
児玉郡児玉町

長沖古墳群

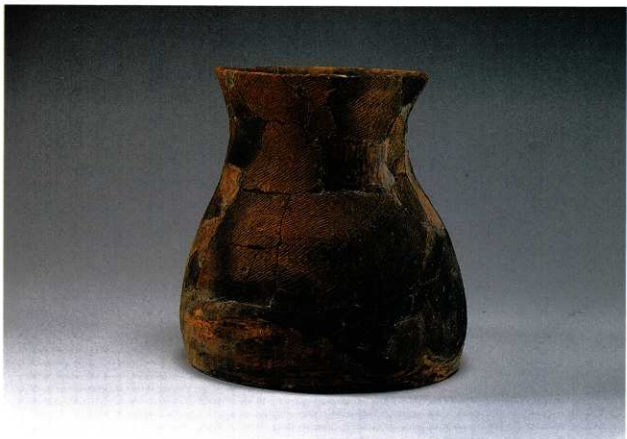
県道秩父児玉線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



道上1号墳横穴式石室



E区第2号住居跡出土土器

序

埼玉県では豊かな彩の国の国づくりを目指し、県民が地域社会の中で、ゆとりと安らぎのある生活ができる基盤づくりを進めています。

人口の増加が続くなか、県民の生活を支えるための道路網の整備も、その一環として進められています。

県道秩父児玉線の建設も、県民の快適な生活や地域間の連携を深めるための施策の一つとして計画されたものです。

県道秩父児玉線用地内には、長沖古墳群の所在が確認され、その取扱いについては、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむをえず現状保存ではなく、記録保存の措置を講じることになりました。そのための発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が埼玉県道路建設課の委託を受け、実施いたしました。

遺跡の所在する児玉町は、原始から古代にかけての遺跡が、数多く分布している地域です。生野山丘陵をはじめとする丘陵には、数多くの古墳群が分布しており、今回報告いたします長沖古墳群も、その中の一つ

です。

発掘調査の結果、古墳跡をはじめ、縄文時代住居跡や土城、古墳時代の住居跡、中・近世の建物跡や道路状遺構などが発見され、各時代の児玉町の様子を知る貴重な資料を得ることができました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護に関する教育・普及の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く御活用いただければ幸いと存じます。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県本庄土木事務所、児玉町教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成11年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町に所在する長沖古墳群の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届けに対する指示通知は、以下のとおりである。
長沖古墳群 (NGOK)
児玉郡児玉町大字長沖273番地3他
平成7年12月28日付け教文第2-161号
児玉郡児玉町大字長沖273番地1他
平成8年4月12日付け教文第2-4号
3. 発掘調査は、県道秩父児玉線建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県本庄土木事務所への委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち、発掘調査については、平成7年度は元井茂、浅野晴樹が、平成8年度は浅野晴樹、書上元博がそれぞれ担当し、平成7年12月1日から平成8年5月31日まで実施した。
整理報告書作成事業は君島勝秀が担当し、平成11年4月8日から平成11年9月30日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量、航空写真撮影、航空写真測量については、株式会社東京航業研究所に委託した。
6. 自然科学分析については、株式会社古環境研究所に委託した。
7. 遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に委託した。
8. 発掘調査における写真撮影は、元井、浅野、書上が行い、遺物の写真撮影は大塚道則の協力を得た。
9. 出土品の整理及び図版の作成は、君島が行い、旧石器については西井幸雄、埴輪については大谷徹、石器の石質鑑定は町田瑞男が行った。
10. 本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、IV-1の古墳跡と出土遺物、V-2については大谷が、他は君島が行った。
11. 本書の編集は、君島がたった。
12. 本書にかかる資料は平成12年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
13. 本書の作成にあたり、児玉町教育委員会、江原昌俊、太田博之、鈴木徳雄、山崎武の諸氏から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表するものがある。

凡例

1. 本書におけるX、Yによる座標数値は、国土標準平面直角座標IX系に基づく座標値を示している。各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
2. グリッドの区画は、各遺跡の全体図に示した。グリッド名は、10mを1単位とし、北西隅の坑名称を用いた。
3. 挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構：住居跡・掘立柱建物跡・土塼・井戸跡 1/60
古墳 1/160
遺物：土器実測図 1/4 土器拓影図(縄文土器) 1/3 旧石器 2/3 石器 1/3 石鏡・小型石器 1/2 鉄製品 1/3 埴輪拓影図 1/3
その他のものは、スケールと縮尺率をその都度示した。
4. 本書における遺構の略号は原則として以下のとおりである。
S J (住居跡) SB (掘立柱建物跡) SK (土塼) SD (溝) SE (井戸跡) P (ピット) SX (粘土探掘跡・その他の遺構)
5. 遺構番号はA～E区の各区別に通し番号を付しており、原則として調査時に付した番号をそのまま使用したが、一部変更したのものもある。古墳の名称については、長沖古墳群内ですでに調査済、または登録済の古墳との混乱を避けるため、兎玉町教育委員会からの御教示を得て、「道上1号墳」「村後3号墳」とした。
6. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。
7. 遺構図および遺物実測図中のスクリーントーンは住居内の炉跡および土器の赤彩範囲を示す。
8. 遺構図・遺物分布図中に示したドットと線は遺物の出土位置と接合関係を示し、番号は遺物実測図のそれと一致する。
9. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・法量の()内の数値は推定値であり、単位はcmである。
 - ・胎土は主に肉眼で観察された含有物を以下の記号に示した。
白：白色粒子 赤：赤色粒子 黒：黒色粒子 酸：酸化鉄粒子 砂：小石・砂粒 雲：雲母 針：白色針状物 片：片岩 石：石英
 - ・焼成はA(良好) B(普通) C(不良)の3ランクに分類した。
 - ・色調は「新版標準土色帳」(農林省水産技術会議事務局監修1967)に照らし、最も近似した色相を記した。
 - ・残存率は、実測図に現した部位を100%として算定したもので、5%刻みで表した。
10. 第II章に掲載した遺跡分布図は、建設省国土地理院発行の1/25000地形図を使用した。

目次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	4. D区	43
1. 調査に至る経過	1	5. E区	47
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	6. 遺構新旧対照表	66
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	V 結語	68
II 遺跡の立地と環境	4	1. 今回の調査の成果について	68
III 遺跡の概要	8	2. 長沖古墳群の性格と特徴	72
IV 検出された遺構と遺物	14	引用・参考文献	79
1. A区	14	付編	
2. B区	29	長沖古墳群の火山灰分析	80
3. C区	33		

挿図目次

第1図 埼玉の地形	4	第12図 道上1号墳出土埴輪	18
第2図 長沖古墳群と周辺遺跡	5	第13図 道上1号墳出土形象埴輪	20
第3図 調査区位置と古墳分布	7	第14図 A区第1号住居跡	22
第4図 A区全体図	9	第15図 A区第1号掘立柱建物跡・第2号土塚	23
第5図 B区全体図	10	第16図 A区第2号掘立柱建物跡	23
第6図 C区全体図	11	第17図 A区土塚・井戸跡・石組遺構	24
第7図 D区全体図	12	第18図 A区出土遺物	25
第8図 E区全体図	13	第19図 A区第3号溝	26
第9図 道上1号墳(1)	15	第20図 A区道路状遺構・ピット	27
第10図 道上1号墳(2)	16	第21図 B区土塚	29
第11図 道上1号墳出土土器	17	第22図 B区第1号溝	30

第23図	B区粘土探掘跡(SX1~6)	31	第42図	E区第2号住居跡	50
第24図	B区グリッド出土遺物	32	第43図	E区第2号住居跡遺物分布図	51
第25図	村後3号墳	33	第44図	E区第2号住居跡出土遺物	52
第26図	C区土壌(1)	35	第45図	E区第3号住居跡	53
第27図	C区土壌(2)	36	第46図	E区第4号住居跡	54
第28図	C区土壌(3)	37	第47図	E区土壌(1)	56
第29図	C区第1号溝	38	第48図	E区土壌(2)	57
第30図	C区SX1	39	第49図	E区土壌出土遺物	58
第31図	C区ビット(1)	40	第50図	E区第1号溝	61
第32図	C区ビット(2)	41	第51図	E区道路状遺構	62
第33図	C区グリッド出土遺物	42	第52図	E区ビット(1)	63
第34図	D区第1号住居跡	44	第53図	E区ビット(2)	64
第35図	D区第1号住居跡出土遺物	44	第54図	E区グリッド出土遺物	65
第36図	D区第2号住居跡・出土遺物	45	第55図	周辺遺跡の出土土器	69
第37図	D区土壌	45	第56図	各調査区と検出遺構	70
第38図	D区道路状遺構	46	第57図	道上1号墳丘復元図	73
第39図	E区第1号住居跡	47	第58図	長沖古墳群分布図	74
第40図	E区第1号住居跡遺物分布図	48	第59図	長沖古墳群出土円筒埴輪	77
第41図	E区第1号住居跡出土遺物	49			

図版目次

図版1	長沖古墳群遠景・A区全景・道上1号墳	図版6	E区第2号住居跡出土遺物・道上1号墳出土遺物
図版2	A区第1号住居跡・A区第1・2号掘立柱建物跡・A区道路状遺構・B区全景・C区全景	図版7	道上1号墳出土埴輪
図版3	D区全景・D区第1号住居跡遺物出土状況・D区第2号住居跡・E区全景・E区第1号住居跡	図版8	道上1号墳出土形象埴輪・B区グリッド出土遺物
図版4	E区第2号住居跡・E区第10・13・16号土壌・E区道路状遺構	図版9	E区第1号住居跡出土遺物(1)・(2)
図版5	A区第2号土壌・D区第1・2号住居跡出土遺物	図版10	E区第1号住居跡出土遺物(3)・E区第1号土壌出土遺物
		図版11	E区第10・13号土壌出土遺物

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は関東地方の中西部に位置し、県全域が都心から100kmの圏内に含まれる。県では快速でうるおいのある生活空間の形成のために、道路網の整備を進めている。「県内1時間道路網構想」を推進し、高速道路、地域高企画道路、インターチェンジにアクセスする道路、都市内街路などの、幹線道路から生活道路に至るまで、体系的な道路網の整備計画である。県道秩父児玉線の整備もこうした事業の一つである。

道路建設課から平成7年6月12日付け本土第218号で、文化財の所在及びその取扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対して文化財保護課は、平成7年9月1日付け教文第573号で、以下のよう

1 文化財の所在

次の埋蔵文化財包蔵地が所在する。

名称	種別	時代	所在地
長沖古墳群 (54-300)	古墳群・ 集落跡	縄文・ 古墳	児玉町大字 長沖地先

2 取扱い

工事計画上、やむを得ず上記の埋蔵文化財包蔵地の

現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査については当課と協議してください。

その後、道路建設課と文化財保護課との間で取扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であり、記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査の実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画・調査期間などについて協議した。

文化財保護法第57条3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。各遺跡での発掘調査の期間と発掘調査に係わる通知は以下のとおりである。

調査期間：平成7年12月1日～平成8年3月31日

指示通知：平成7年12月28日付 教文第2-161号

調査期間：平成8年4月1日～平成9年5月31日

指示通知：平成8年4月12日付 教文第2-4号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

調査は平成7年12月1日から平成8年5月31日まで実施した。調査面積は5,500㎡である。全調査区域をA～E区に分け、A～C区を平成7年度(第1次調査)、D・E区を平成8年度(第2次調査)の2回に分けて行った。

第1次調査 A～C区、4,500㎡を調査した。12月上旬に埼玉県本庄土木事務所との打ち合わせを行い、調査範囲の確認を行った。重機を用いて表土除去作業を進め、直ちに遺構確認、遺構の精査に入った。基準点測量を行い、調査区に10m方眼杭を打ち、グリッドを設定して遺構実測、遺物分布図の作成が可能な状況にした。A区から順次遺構の精査を行い、翌平成8年2月下旬にはC区まで完了した。遺構精査を完了後、古環境研究所に委託してテフラ分析のための土壌採取、古墳石室の地上写真および調査区の航空写真測量を行った。3月には残りの遺構の実測作業を終え、調査を終了した。

第2次調査 D・E区、1,000㎡を調査した。表土除去後、遺構確認作業を行い、D区から順次遺構の精査を進めた。第1次調査と同様に基準点測量からグリッドの設定を行い、遺構の実測作業を行った。遺構精査

を完了後、5月下旬に調査区の空中写真撮影を実施し、遺物、図面などの記録類の引き上げ、事務所の撤去を行い、調査を終了した。

(2) 報告書作成

平成11年4月8日から同年9月30日までの期間実施した。4月から出土遺物の接合・復元作業を行い、並行して遺構図面の第2次原図の作成を行った。5月から遺構図のトレースを開始し、6月下旬には遺構図版の作成を終了した。

一方、接合・復元を完了した遺物については5月から実測・拓本を開始した。5月下旬から遺物実測図のトレースを開始し、6月下旬には遺物図版の作成を終了した。

写真については5月下旬に遺物の撮影を行い、6月初旬には巻頭カラーに掲載する遺物撮影を小川忠博氏に委託して行った。遺構と遺物の写真図版を作成し、6月下旬に完了した。

7月から原稿の執筆、データ処理、地形図、分布図、表などの各種図版の作成を行い、割付作業を経て、同月下旬に完了した。入校、校正作業を経て9月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成7年度

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	吉川 國男
常務理事兼管理部長	新井 秀直
理事兼調査部長	小川 良祐
管理部	
専門調査員兼経理課長	関野 栄一
主 任	江田 和美
主 任	福田 昭美
主 任	腰塚 雄二
庶務課長	及川 孝之
主 査	市川 有三
主 任	長滝 美智子
主 事	菊池 久

調査部

調査部副部長	高橋 一夫
調査第四課長	酒井 清治
主 査	元井 茂
主 査	浅野 晴樹

平成8年度

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	吉川 國男
常務理事兼管理部長	稲葉 文犬
理事兼調査部長	小川 良祐
管理部	
専門調査員兼経理課長	関野 栄一
主 任	江田 和美

主 任	福田 昭美
主 任	腰塚 雄二
庶務課長	依田 透
主 査	西沢 信行
主 任	長滝 美智子
主 査	菊池 久

調査部

調査部副部長	高橋 一夫
調査第三課長	村出 健二
主 査	浅野 晴樹
主任調査員	書上 元博

(2) 整理・報告書刊行

平成11年度

理事長	荒井 桂
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	広木 卓

管理部

管理部副部長兼経理課長	関野 栄一
主 任	福田 昭美
主 任	腰塚 雄二
主 任	菊池 久
庶務課長	金子 隆
主 査	田中 裕二
主 任	江田 和美
主 任	長滝 美智子

資料部

資料部長	高橋 一夫
専門調査員兼副部長	石岡 憲雄
主任調査員	君島 勝秀

II 遺跡の立地と環境

長沖古墳群は埼玉県児玉郡児玉町大字長沖に所在し、JR 八高線児玉駅の南西約1.5kmに位置している。

児玉町は埼玉県の北西部にあたり、通称「埼玉の角」と呼ばれる児玉地域の南部に相当する。児玉町のほぼ中央部には、八王子—高崎構造線が東西に横断している。このため、町の地形は、南西部の山地と北東部の台地および低地に明瞭に区分される。南西部の山地は、陣見山・不働山を主峰とする上武山地が迫る。山地からは児玉丘陵が北東方向に半島状に張り出し、さらに台地へと移行していく。東には生野山丘陵・大久保山丘陵などの独立残丘が伸び、丘陵の周囲には小山川・女堀川などの小河川が形成した沖積地となっている。北方には神楽川扇状地として形成された本庄台地が広がり、現在の児玉工業団地周辺から本庄市・上里町市街地方面へと続いている。

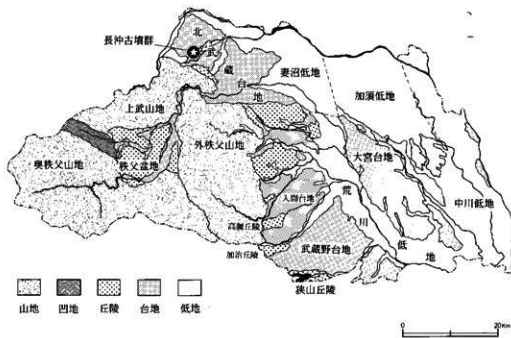
長沖古墳群は（第2図1）児玉丘陵から続く台地上から、小山川に形成された河岸段丘上にかけて立地す

る。遺跡の所在する台地の北側には、現在の児玉町の市街地が広がり、女堀川に形成された低地へと続いている。上武山地から流れ出た小山川は、緩やかに北東方向に伸びて、遺跡の南側を画している。遺跡の標高は最も高い台地面で122m、河岸段丘面で110mとなる。

長沖古墳群は、古くから古墳群の存在が確認され、町の都市計画事業に伴う3次にわたる発掘調査も行われ、報告書が刊行された（菅谷他1980）。1994年には埼玉県の古墳詳細分布調査によって、前方後円墳7基を含み、円墳を主体とする157基の古墳が登録されており（埼玉県教委1994）、その後も新たに古墳跡が検出されている。また遺跡の範囲内には、古墳の他に縄文時代や弥生時代などの遺跡（2～4）が確認され、各時代の複合遺跡であることが知られている。ここでは長沖古墳群周辺の各時代の遺跡について概観する。

旧石器時代の遺跡では、古井戸遺跡（27）からナイフ形石器、削器などが採集されている。将監塚遺跡

第1図 埼玉の地形



第2図 長沖古墳群と周辺遺跡



- 1 長沖古墳群 2 賀家上遺跡 3 長沖久保遺跡 4 長沖梅原遺跡 5 倉林東遺跡 6 倉林後遺跡 7 倉林後B遺跡 8 枇杷橋遺跡
 9 塩谷遺跡 10 塩谷下大塚遺跡 11 ミカド西遺跡 12 真鏡寺後遺跡・真鏡寺館跡 13 下原北遺跡 14 天田遺跡 15 前組羽根倉遺跡
 16 新羽根倉遺跡 17 西北原遺跡 18 中道遺跡第1地点 19 精進場遺跡 20 中道遺跡第2～24地点遺跡 21 安保氏館跡 22 枳樹原・楡
 下遺跡 23 阿保境館跡 24 新宮遺跡 25 塚島遺跡 26 平塚遺跡 27 古井戸遺跡 28 将監塚遺跡 29 藤塚遺跡 30 今井川越田遺跡 31
 一丁田遺跡 32 地神・塔頭遺跡 33 今井条里遺跡 34 北原遺跡 35 諏訪遺跡 36 夏目遺跡 37 西富田新田遺跡 38 社具路遺跡 39 後
 張遺跡 40 川越田遺跡 41 梅沢遺跡 42 雷電下遺跡B地点 43 向田A遺跡 44 老丁田遺跡 45 生野山遺跡 46 八幡山壇輪需跡 47 雉
 ヶ岡城跡 48 十二天遺跡 49 秋山塚原遺跡 50 秋山中山遺跡 51 蘇森神社前遺跡 52 羽黒山遺跡 A 飯倉古墳群 B 白岩古墳群 C
 十二ヶ谷戸古墳群 D 海老ヶ久保古墳群 E 二ノ宮古墳群 F 南塚原古墳群 G 北塚原古墳群 H 植竹古墳群 I 関口古墳群 J 元
 阿保古墳群 K 四軒在家古墳群 L 大御堂古墳群 M 本郷古墳群 N 塚本山古墳群 O 生野山古墳群 P 下町古墳群 Q 広木大町古
 墳群 R 秋山古墳群

(28) では細石刃核、有舌尖頭器が採集されている。

縄文時代の周辺遺跡を見てみると、長沖梅原遺跡(4)では、草創期の爪形文、多縄文系、押型文土器が出土している。塩谷下大塚遺跡(10)は縄文前期の黒浜式期、羽黒山遺跡(52)は諸磯a式期の集落跡である。秋山中山遺跡(50)は花積下層式から十三菩提式期までの中規模集落と考えられている。

縄文中期になると、将監塚・古井戸遺跡(28・27)が勝坂式期終末から加曾利E式期までの複合集落として知られ、新宮遺跡(24)とともに縄文中期の大規模遺構群を構成している。藤塚遺跡(29)は後・晩期集落として知られている。

弥生時代の遺跡では、雷電下遺跡B地点(42)が弥生前期末の土器が出土している。弥生中期では、秋山塚原遺跡(49)で方形周溝墓と考えられる溝が検出され、前組羽根倉遺跡(15)では再葬墓が検出されている。弥生後期では吉ヶ谷式土器を主体とする遺跡に真鏡寺後遺跡(12)がある。長沖久保遺跡(3)では、住居跡から吉ヶ谷式系土器が出土している。

古墳時代になると、遺跡の分布が低地に広がり、大規模集落が出現するとともに丘陵部には古墳群が数多く構築されるようになる。水田経営を示す水路跡などの遺跡も検出されており、この時代から本格的な低地の開発が始まったことがわかる。

古墳時代前期の遺跡では、新羽根倉遺跡(16)で住居跡が、前組羽根倉遺跡(15)では方形周溝墓が検出されている。女堀川流域の丘陵から台地部では、ミカド西遺跡(11)、十二天遺跡(48)、倉林後B遺跡(7)、塩谷下大塚遺跡(10)が知られている。低地を臨む微高地には地神遺跡(32)、後張遺跡(39)、川越田遺跡(40)、などの集落跡が見られ、一丁田遺跡(31)では用水路と思われる溝が検出されている。今井糸里遺跡(33)では古墳時代前期からの用水路跡と水田跡が検出されている。

古墳時代中期の遺跡では、女堀川流域では倉林後遺跡(6)、真鏡寺後遺跡(12)などが丘陵部に、塚島遺跡(25)、平塚遺跡(26)、古井戸遺跡(27)などが台

地に立地する。夏目遺跡(36)、西富田新田遺跡(37)、社具路遺跡(38)などの大規模集落が出現する。

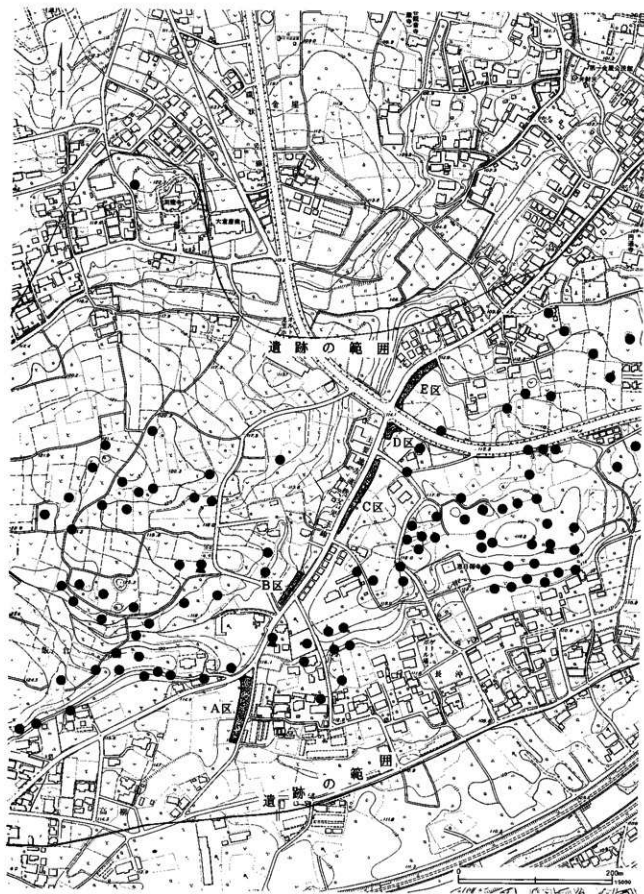
古墳後期では今井川越田遺跡(30)、川越田遺跡(40)、梅沢遺跡(41)などが集落跡である。神流川右岸流域では古墳群の築造と同時に集落跡が見られるようになる。西北原遺跡(17)、中道遺跡第1地点(18)、精進場遺跡(19)、中道遺跡第2～24地点(20)、などを含みいわゆる埼玉県遺跡NO.016では、古墳後期の住居跡が100軒以上検出されている。

古墳について見てみると、児玉丘陵から続く台地部と生野山丘陵、大久保山丘陵などの丘陵部にかけては、今回報告する長沖古墳群(1)をはじめ、飯倉古墳群(A)、生野山古墳群(O)、下町古墳群(P)、塚本山古墳群(N)が分布する。生野山古墳群のなかでは、生野山將軍塚古墳、物見塚古墳などが5世紀代の古墳として知られている。神流川右岸の河岸段丘上には青柳古墳群(C-L)が分布する。

奈良・平安時代に入ると、自衛原・松下遺跡(22)、将監塚・古井戸遺跡(28・27)などの大規模集落が出現する一方で、西北原遺跡(17)、精進場遺跡(19)なども引き続き営まれる。同時にこの時代には低地部の大規模な灌漑用水の開鑿が行われた。真下大溝、女堀大溝などはこの時代の遺構と考えられる。今井糸里遺跡(33)では、古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての水田跡や水路跡が検出されている。

中世に入ると、児玉地域は武蔵七党の児玉党、丹党、猪俣党などに関連すると考えられる館跡が多く存在する。また、上州と武蔵の国境であり、信州からの進路にあたる要所であることから室町期以降には自然地形を生かした山城や城館が構築されるようになる。阿保境館跡(23)、安保氏館跡(21)、真鏡寺館跡(12)などはこうした中世城館跡であり、館を構成する溝跡などが検出されている。雄ヶ岡城跡(47)は16～17世紀にかけての城跡である。

第3図 調査区位置と古墳分布



III 遺跡の概要

今回の調査は、遺跡の分布する台地中央部を縦走するように、果道に沿って細長い調査区が設定された。調査区は南からA～E区の5箇所、果道幅部分の調査のため、各調査区は幅5～15mで北東～南西方向に向かって細長く伸びる。各調査区の間には20～100mの隔りがあり、A区の南端からE区の北端までは、およそ570mに及ぶ。全調査面積は5500㎡である。

各調査区域の立地を見ると、A区は遺跡南方の小山川に対する河岸段丘の低位面にあたり、B～E区は、西部から北西部に形成された谷部に沿った台地面にあたる。調査区内の遺構確認面の標高は、A区で最も低く114m、D区では最も高く115mを測る。

A区は礫混じりの粘土質の水性土壌が広く堆積し、調査区内には北部と南部を除いてほぼ平坦になる。調査区北部には埋没谷があり、北西方向に向かって低くなる。南部は小山川に向かってやや傾斜する。

B区は西側の谷に向かって緩やかに傾斜する台地上に位置し、地山には関東ローム層の堆積が認められる。C区は平坦な台地上に位置し、調査区内はほぼ平坦になる。D・E区は北西方向の谷に向かって緩やかに傾斜する台地上に位置し、調査区内は西側がやや傾斜する。

発掘調査の結果、検出された遺構は、古墳跡2基、住居跡7軒、中世の掘立柱建物跡2棟、土壌59基、古墳時代の粘土探掘跡1箇所、近世の道路状遺構3箇所、単独のピット66基の他、時期不明の井戸跡1基、溝4条、石組遺構1基、性格不明遺構1基である。

古墳跡は、A区とC区から各1基検出された。各検出位置の字名をとって、A区を「道上1号墳」、C区を「村後3号墳」とした。道上1号墳は、周溝の一部と石室下部が検出され、周溝内と石室周辺から埴輪破片が出土した。村後3号墳は、周溝の一部が検出されたが、遺物は出土しなかった。

住居跡は、E区から縄文時代前期1軒、D・E区から古墳時代前期5軒、A区から中世1軒が検出された。

E区SJ1は縄文時代前期の住居跡で、覆土中から諸磯式土器を主体とする縄文前期後葉の土器が出土した。D区SJ1・2、E区SJ2からは古墳時代前期の土器が出土した。E区SJ2は、長辺が約8mを測る比較的大型の住居跡で、住居内からは多量の炭化物と焼土が検出された。A区SJ1はわずかな出土遺物と覆土の状況から、中世の住居跡と考えられる。

中世の掘立柱建物跡はA区から2棟検出された。A区SB1は細いピットからなる2間×2間の建物で、内部には土壌が1基伴う。土壌からは中世以降のものと思われる土師器皿が3点出土した。A区SB2が同じ軸線で並ぶことから、2棟とも同時期に構築されたと考えられる。

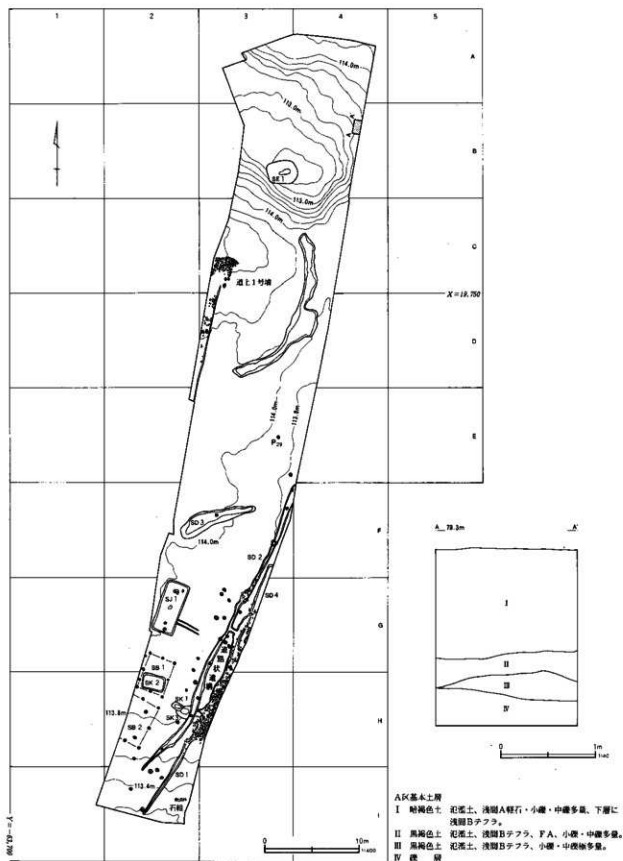
土壌は、縄文時代6基、古墳時代3基、中・近世4基を数える。縄文時代の土壌はすべてE区から検出され、縄文前期3基、縄文中期1基である。E区SK1、E区SK10、E区SK13からは、諸磯式土器が出土した。中・近世の土壌は、平面形が長方形のものがC・E区を中心に検出された。

粘土探掘跡はB区の調査区西側壁に沿って検出された。不定形の掘り込みを呈し、覆土からは流れ込みと思われる縄文時代の石器の他、古墳時代の土師器破片や須恵器甕の破片などが少量出土した。

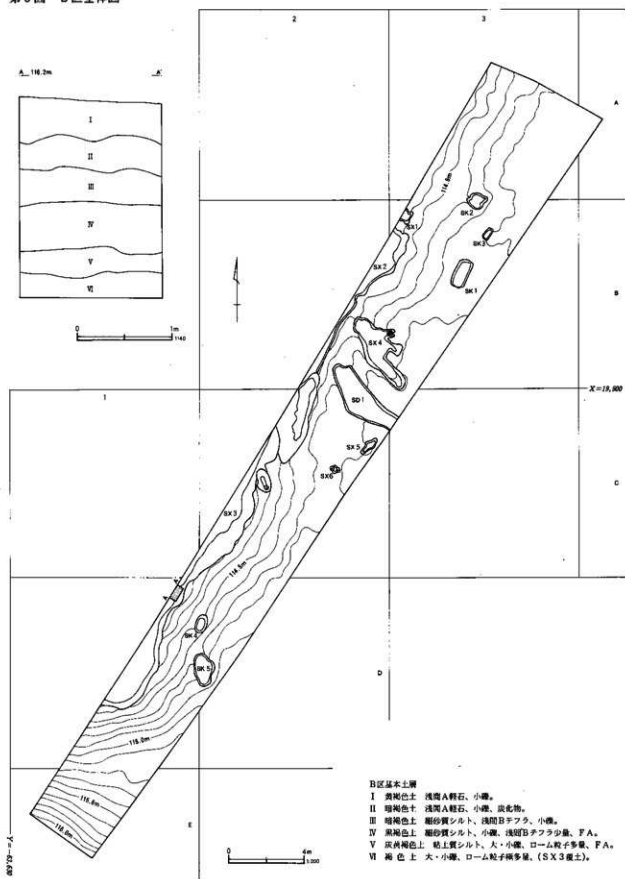
近世の道路状遺構は、A・D・E区から検出された。3箇所の遺構はともに共通した特徴を持ち、ほぼ同時期の遺構と考えられる。複数の浅い溝が北東～南西方向に伸び、溝内には多量の礫が検出された。溝の内部や側壁にはピットが多く検出され、D・E区では溝に沿って柵列状に規則的に並ぶ。

単独のピットは、A・C・E区から検出された。A区検出の大半が、掘立柱建物跡や道路状遺構に関連する中世から近世にかけて構築されたピットと考えられる。C区のものも出土遺物もなく、時期は不明である。E区検出のピットの一部は覆土の状況から道路状遺構に関連する近世以降のものと思われる。

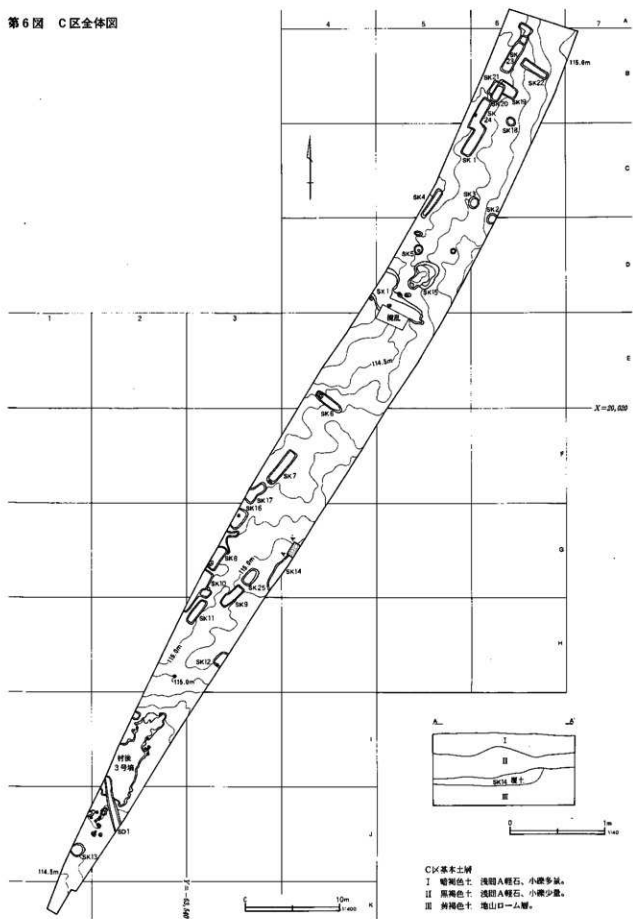
第4図 A区全体図



第5图 B区全体图



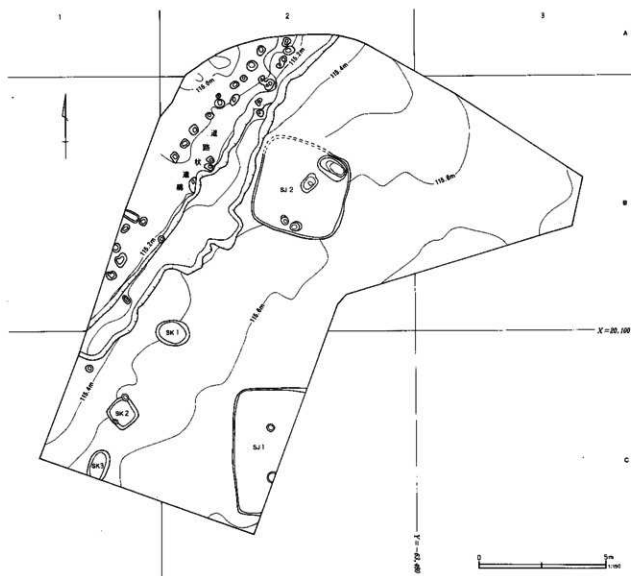
第6图 C区全体图



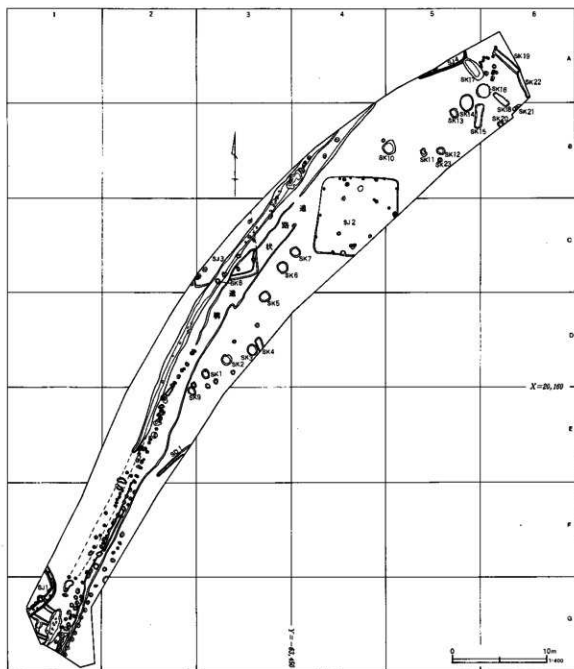
C区基本土層

- I 暗褐色土 浅甜A礫石、小礫多量。
- II 原褐色土 浅甜A礫石、小礫少量。
- III 黄褐色土 堆山口一ム層。

第7图 D区全体图



第 8 图 E 区全体图



IV 検出された遺構と遺物

1. A区

道上1号墳(第9・10図)

道上1号墳は、小山川に面した低位段丘面上に立地する横穴式石室をもつ墳丘径約19.2mの円墳である。墳丘は調査以前に既に削平されており、今回の調査によって新たに所在が確認されたもので、果道の東側に広がる低位段丘面に所在する古墳の中では最西端に位置している。周辺における古墳の分布は希薄で、同一低位段丘面には東にやや離れて長沖108・109号墳が所在しているにすぎない。

(a) 墳丘及び外部施設

A区の北側、C-3・C-4・D-3・D-4グリッドを中心に位置している。横穴式石室を主体部とする円墳で、墳丘の東半分が調査区内に所在し、西半分は調査区域外に延びている。調査以前に墳丘が完全に削平され、石室の基底部及び周溝の一部が検出されただけで、遺存状況はあまり良好ではなかった。

地形的には小山川左岸に発達した河岸段丘の低位面上に立地し、墳丘の北側には埋没谷が大きく湾入していた。段丘面は南へ向かって緩やかに傾斜し、標高113.5～114mである。また、墳丘の北側には北西方向から埋没谷が湾入し、古墳の占地を大きく規制していた。この埋没谷の最深部と確認面との比高差は約2mである。

墳丘の築成法に関しては墳丘がまったく遺存していないため判然としないが、その立地条件から想定すると、北側に湾入する埋没谷を墳丘の一部に利用して見かけの上の墳丘高を強調していたものと想定される。築造当時、谷部がどの程度まで埋没していたかは明らかでないが、緩斜面部に占地することによって、盛土量を少なくして、より効果的に墳丘を大きく見せたものではなかろうか。

調査区内には、この他に古墳跡や同時期の遺構の分布がまったくないことから、占地場所に強い規制が働いたとは考えられず、立地条件の良い緩斜面部に

古墳を築造していることからみて、意図的な占地状況を読み取ることができると考えられる。

周溝はほぼ正円形に巡らされていたようであるが、石室の開口方向の南側では掘り込みが浅くなり、途切れている。また、北側は谷部の斜面部に重複しているため、明確な掘り込みは検出されなかった。周溝の幅は0.8～1.4mと全体に幅狭であるが、周溝東側に墳丘外側に矩形に張り出した部分が認められた。この張り出部の性格について、周溝外縁を掘り込んで構築された従属的な埋葬施設の可能性も考えたが、覆土の状態や周溝底面に特別な造作が認められず、その性格については明確にし得なかった。また、張り出部付近の周溝覆土内に拳大の円礫の流入が認められた。葬石に用いられたものとするには量的に少なく、本来葬石はなかったものと思われる。

周溝の深さは確認面から15～38cmと全体に浅く、南へ向かって掘り込みが徐々に深くなっている。周溝の断面形は低台形で、墳丘側の立ち上がりはなだらかである。底面には数箇所10cm前後の段差が作り出されていたが、おおむね平坦であった。

部分的にしか周溝が検出されなかったため、墳形や墳丘規模についての確証は得られなかったが、墳丘における石室の構築位置や開口方向などから円墳の可能性が高い。墳丘規模は東側周溝の円弧から直径約19.2mに還元され、周溝を含めた規模は直径約21.5mを測り、当古墳群では中規模の一群に属している。

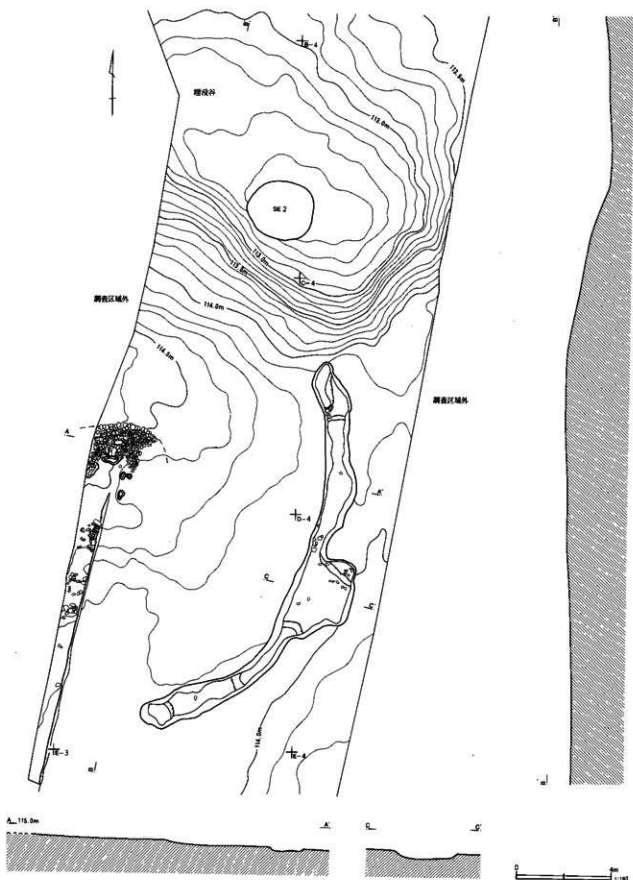
出土遺物は、周溝の覆土中へ流れ込んだ状態で土師器、須恵器、埴輪が検出された。

円筒埴輪、形象埴輪の破片はコンテナ約1箱分のみ出土しており、本来の埴輪の樹立量もさほど多くはなかったものと推定される。

(b) 主体部

主体部は、南に開口する横穴式石室の基底部が一部遺存していただけで、奥壁をはじめとする構築石材は

第9图 道上1号墳(1)



第10図 道上1号墳(2)



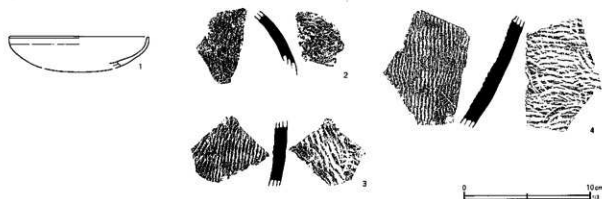
既に抜き取られていた。

玄室の平面形や規模については明確でないが、奥壁部分に長さ100cm、幅40cm、深さ18cmほどの不整形の掘り込みが検出されており、奥壁に比較的大型の石材を用いていたことが分かる。また、側壁に相当する部分にも不整形の掘り込みが検出されたが、奥壁との位置関係がやや不自然で、積極的に石材設置痕と断定することは難しい。このため石室の平面形について復元す

ることは困難であるが、玄室の平面形は両袖型ないし胴張り型と想定される。

石室の裏込めは、結晶片岩を主体とした扁平な円礫を敷き詰めて基底部を構築していた。石室の構築面は旧表土面を浅く掘り込み、内部に径20~40cmの円礫を隙間なく充填していた。控積みは、緩やかな弧を描いて円礫が一列に敷設されており、築造当初は馬蹄形に構築されていたものと推定される。

第11図 道上1号墳出土土器



道上1号墳出土土器観察表 (第11図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(10.8)	(2.8)		RW砂	C	橙褐色	20	器面風化 体外外面へラケズリ
2	甕				W灰砂	A	暗灰色		外面平行叩き 内面同心円文
3	甕				W灰砂	A	暗灰色		周溝 外面カキ目後平行叩き 内面同心円文
4	甕				W灰砂	A	暗灰色		周溝 外面カキ目後平行叩き 内面同心円文

石室内からは土師器の小片が検出されているが、細片のため実測・図示できるものはなかった。

(c) 出土遺物 (第11～13図)

遺物は、周溝の覆土中から土師器環、須恵器甕、円筒埴輪、形象埴輪の破片が、コンテナ1箱分出土しただけである。

土器類は、土師器環1点、須恵器甕の胴部破片3点が出土した(第11図)。1の土師器環は推定口径10.8cm、器高2.8cmの小型のものである。丸底で口縁部は内湾しながら上方に立ち上がる。器面は風化が著しく細部の調整は不明である。胎土は砂粒の混入が少なく粉っぽい。焼成はやや甘く、色調は橙褐色である。

北武蔵型環の系統に属し、7世紀第II四半期前後の所産と推定される。古墳の築造年代よりもやや新しく位置づけられ、追葬に伴うものか、混入かは明確にしない。

2～4は須恵器甕の破片である。2は肩部の破片で、外面に平行叩き、内面に同心円文当て具痕を施す。胎土は砂粒を多く含む多孔質である。焼成は良好で、色調は暗灰色を基調とする。3・4は同一個体の甕胴部破片である。外面は目の細かいカキ目を施して器面を

整えた後に、平行叩き目を施す。内面は同心円文当て具痕を施す。胎土は砂粒を少量含む、焼成は良好堅緻である。色調は暗灰色を基調とする。

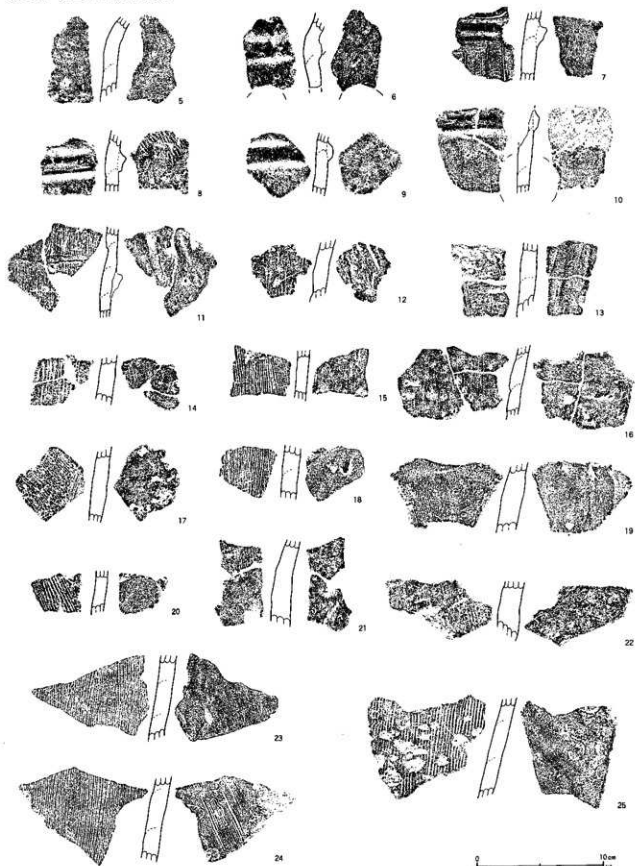
出土した須恵器は胎土・焼成・色調等の特徴から在地産と想定されるが、生産地の特定はできない。

円筒埴輪は破片ばかりで、全体のプロポーションの判明するものはないが、二条凸帯三段構成の円筒埴輪が主体であったと想定される。外面に一次調整として縦ハケを施すものが大半を占める。凸帯は幅が狭く、突出度の低い、断面低台形や低M字形などの退化したものが多く、透孔は全体の形の分るものはないが、円形であろう。底部調整の有無については底部の破片がなく不明である。内面調整は口縁部に横ハケ・右傾斜ハケを施すほかは、全体にナデ調整を丁寧に加えている。色調は橙褐色を基調とし、焼成は黒斑がないことから、窯窯焼成と考えられる。

出土した円筒埴輪は、胎土・焼成・色調・形態等の特徴から大きく二群に大別することができる。さらに、ハケ工具の違いや細部の特徴から細分することが可能である(第12図)。

I群は胎土に赤色粒子及び結晶片岩・雲母粒子を多

第12图 道上1号墳出土埴輪



く含み、白色針状物質を含まないもので、a-c種に細分される。一方、II群は胎土が精選され、砂粒の混入が少なく、白色針状物質・雲母粒子を含むもので、a・b種に細分される。

I a類 (6・10・12・16・21・22) は、胎土に赤色粒子・結晶片岩粒子を多量に含み、焼き上がりは軟質で器面が風化しているものが多い。色調は橙褐色を基調とする。外面調整は縦ハケで、内面調整はナデを施す。ハケメは幅2cm当たり9-10本を数える。6は透孔を有し、凸帯が剥落している。緩やかに屈曲する器形からすると朝顔形埴輪の類部の可能性もある。10は透孔と断面低M字形の凸帯を有する。12は径の小さな器形に復元されることから動物埴輪の脚部の可能性もあるが断然としない。16は内面に粘土継接合痕が明瞭に残り、幅2-3cmの粘土紐の巻き上げにより成形されていることが分かる。21・22は器面が風化しているが、器厚が厚く最下段部分の破片であろう。

I b類 (5・7・11・17・19) の胎土の特徴は、赤色粒子、結晶片岩・雲母粒子を多く含み、I a類に近いが、焼成は普通で、色調もI a類に比べやや暗い橙褐色を主体とする。器面調整に用いられたハケ工具は細かく幅2cmあたり12-15本を数える。5は口縁部に近い最上段部の破片で、内面に横ハケを施す。7は上稜の突出した断面低M字形の凸帯を有し、唯一へう記号が認められた。凸帯幅1.8cm、凸帯高0.8cmを測り、凸帯上側に接するように横位の弧線と、凸帯下側に縦位の条線が3本認められる。11は凸帯が剥離した破片で、内面は縦位のナデを施す。17は外面に右傾斜ハケを施しており、形象埴輪の一部の可能性も考えられる。19は器厚が厚く、最下段の破片であろう。

I c類 (8・9・13・14) は胎土に赤色粒子を多量に含むもので、器面が風化のため磨耗している。ハケメ工具は幅2cmあたり9本ほどやや粗い。8は上稜の突出した断面M字形の凸帯を貼付している。凸帯幅1.6cm、凸帯高0.6cmである。外面は風化のため摩滅しているが、内面は右傾斜ハケを施し、凸帯貼付のための指頭玉痕が残る。9は断面低M字形の凸帯を有する。

凸帯幅1.6cm、凸帯高0.5cmを測り、器面は風化のため磨耗している。13は外面が風化しており調整は不明であるが、内面は縦位のナデを丁寧に施している。14は外面に目の粗い縦ハケを施す。

II a類 (18・23・24) は、胎土中に砂粒の混入が少なく、特徴的に白色針状物質・結晶片岩粒子を含む。硬質の焼き上がりで他に比べるとやや異質である。色調は橙褐色から淡褐色まで幅があるが、断面は灰褐色を呈する。ハケメは幅2cm当たり14本前後で目が細かい。18・23は外面に縦ハケ、内面にナデを施している。24は外面に縦ハケ、内面に右傾斜ハケを施す。

II b類 (15・20・25) は、良好な焼き上がりで、II a類に比べ赤色粒子を多く含んでいる。ハケメは幅2cmあたり9-12本を数える。15は外面に縦ハケと一部横ハケを施す。20・25はやや目の粗いハケ工具を用いている。

形象埴輪は、人物・鞍・盾・家・不明器財等の小破片が少量検出されただけで、そのうちの9点を実測・図示した(第13図)。いずれも周溝の覆土中から出土しており、樹立位置を想定できるものはない。胎土・焼成・色調等の特徴は円筒埴輪II群に共通しており、胎土中に白色針状物質、赤色粒子、結晶片岩、絹雲母等が含まれているのが特徴である。

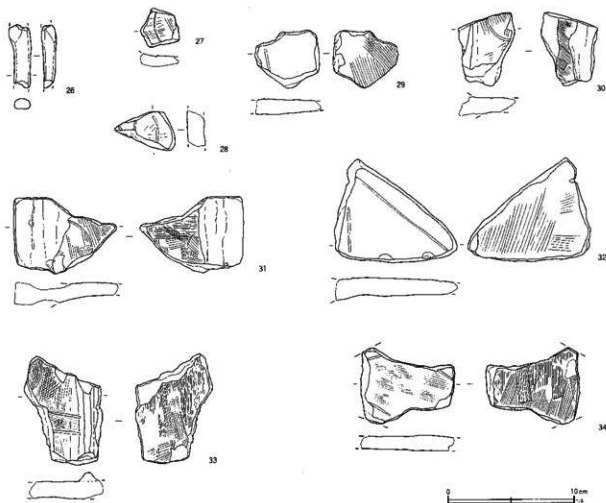
26は男子埴輪の下げ美豆良の破片である。粘土塊を棒状に成形したもので、横断面形は内側の平坦な偏楕円形を呈し、ナデ調整を施す。

27・30・31は、奴隸形の鞍形埴輪の背板と考えられる板状の小破片である。27は矢筒部との接合部に近い背板の破片で、正面に弧状の線刻を施す。30・31は円筒形に仕上げた矢筒部に粘土板を差し込んで背板を成形したもので、正面に弧状の線刻が一部残る。胎土・焼成・色調等の特徴が共通することから同一個体と考えられる。

32は盾形埴輪の側縁部と考えられる板状の破片である。器面の風化が著しいが、正面には鋸歯状の線刻が一部認められる。

33は家形埴輪の壁体部の破片である。小破片である

第13図 道上1号墳出土形象埴輪



ため壁体の成彩が粘土板によるものか、粘土紐によるものかは明確でない。壁体外面には縦方向に凸帯を貼付しており、柱あるいは入口部を表現したものとと思われる。外面には平行線と弧線を描いた線刻がみられ、さらに線刻間には赤彩が施されている。

28・29・34は器種不明の器財埴輪の破片で、いずれも板状を呈する。28は正面に弧線が線刻されている。29は直線状の線刻が一部残る。34は二か所に端面がみられ、それに沿って菱形状に線刻が描かれている。

(d) 小 結

今回の調査により道上1号墳は、低位段丘面上に立地する横穴式石室を主体部とした墳丘径19.2mほどの円墳であることが確認された。県道の東側に展開する長沖支群のうち、低位段丘面に所在する古墳の中で

は最西端に位置している。

古墳の占地状況は、埋没谷が古墳の北側に溝入しているため、古墳の占地が大きく規制をうけていた。おそらく、墳丘の見かけ上の高さを強調するために埋没谷を墳丘の築造に利用したものと想定される。

横穴式石室は裏込めの基底部を残すだけで、その全容は不明である。裏込めは扁平な円礫を比較的入念に敷設し、その外縁に馬蹄形と想定される控積みか取り巻いていたようである。調査の所見では、石室の平面形態や規模については明確にし得なかった。

築造時期については、円筒埴輪の形態及び調整手法の特徴や、器財埴輪を主体とする形象埴輪の様相などから6世紀後半でも新しい段階に位置づけるのが妥当と考えられる。

道土1号墳出土埴輪観察表 (第12・13図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	
5	円筒 I b 類	ABFHJ	B	C	器面風化		横ハケ	12	最上段破片	
6	円筒 I a 類	ADFHIJ	B	C	器面風化		ナデ・指頭圧痕		凸帯剥落 透孔 朝顔形埴輪頭部か	
7	円筒 I b 類	AEFHJ	A	C	縦ハケ	15	ナデ		凸帯断面低M字形 外面ヘラ記号	
8	円筒 I c 類	ABFHJ	B	C	縦ハケ・ナデ	9	右傾斜ハケ・指頭圧痕	9	凸帯断面低M字形	
9	円筒 I c 類	ABFHJ	C	C	縦ハケ・ナデ		ナデ		凸帯断面低台字形	
10	円筒 I a 類	ABFHJ	C	C	器面風化		ナデ		凸帯断面低M字形 透孔	
11	円筒 I b 類	ABFHJ	A	C	縦ハケ	14	ナデ		凸帯剥落 ハケメ粗い	
12	円筒 I a 類	AEFHI	B	C	縦ハケ	10	ナデ		動物埴輪の脚部の可能性あり	
13	円筒 I c 類	ABFHI	B	C	縦ハケ	9	ナデ		器面風化	
14	円筒 I c 類	ADFHIJ	B	C	縦ハケ	9	ナデ		ハケメ粗い	
15	円筒 II b 類	ACFHI	A	C	縦ハケ	12	ナデ		外面一部横ハケあり	
16	円筒 I a 類	ADFHIJ	C	C	縦ハケ	14	ナデ		内面粘土紐接合痕あり	
17	円筒 I b 類	ABFHJ	B	C	右傾斜ハケ	14	ナデ		周溝 形象埴輪の可能性あり	
18	円筒 II a 類	ACFHJ	A	C	縦ハケ	13	ナデ		焼成良好堅緻 断面灰褐色	
19	円筒 I b 類	ABFHJ	A	C	縦ハケ	14	ナデ		最下段破片	
20	円筒 II b 類	ACFHJ	A	C	縦ハケ	9	ナデ		ハケメ粗い	
21	円筒 I a 類	ABFHJ	C	C	縦ハケ	9	ナデ		最下段破片	
22	円筒 I a 類	ADFHIJ	B	C	縦ハケ	9	ナデ		周溝 最下段破片	
23	円筒 II a 類	ACDFHIJ	A	C	縦ハケ	14	ナデ		焼成良好堅緻 断面灰褐色	
24	円筒 II a 類	ACFHJ	A	D	縦ハケ	14	縦ハケ	14	焼成良好堅緻 断面灰褐色	
25	円筒 II b 類	ACFHJ	A	C	縦ハケ	9	ナデ		ハケメ粗い	
26	人物	美豆良	ABFHI	B	C	ナデ	ナデ		棒状美豆良 肉地欠損 断面灰褐色	
27	板	青板	ACFHI	B	C	ハケメ	14	器面剥落	外面弧線線刻	
28	器財	不明	ABFHI	B	C	ハケメ		器面風化	周溝 外面線刻	
29	器財	不明	ACFHI	B	C	器面風化		ハケメ	15	外面線刻
30	板	青板	ACFHI	A	C	ハケメ	14	ハケメ	14	周溝 外面弧線線刻 粘土板差込式
31	板	青板	ACFHI	A	C	ハケメ	14	ハケメ	14	外面弧線線刻 粘土板差込式
32	盾	側縁部	ACFHJ	B	C	器面風化		ハケメ	12	周溝 外面弧線線刻か
33	家	壁体部	ABFHJ	A	C	ハケメ	14	ハケメ	14	周溝 外面線刻・赤彩 凸帯貼付
34	器財	不明	ABEFHI	B	C	ハケメ	14	ハケメ	14	周溝 外面線刻 端面あり

埴輪観察表 凡例

円筒埴輪

- ここで扱う円筒埴輪とは普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪の総称であり、形象埴輪とは図示方法及び観察表の記述方法が一部異なる。
- 円筒埴輪の分類は事実記載部分で行った分類に対応する。
- 胎土は肉眼で観察される範囲の混入物を記載した。
A…石英、B…白色粒子、C…白色針状物質、D…長石、E…角閃石、F…赤色粒子、G…黒色粒子、H…雲母、I…片岩、J…砂粒
- 焼成はA…良好、B…普通、C…不良の3ランクに大きく分けた。
- 色調は全体の大部分を占めている色調を記載した。
A…暗赤褐色、B…赤褐色、C…橙褐色、D…淡褐色、E…乳白色、F…灰褐色、G…黒褐色の大

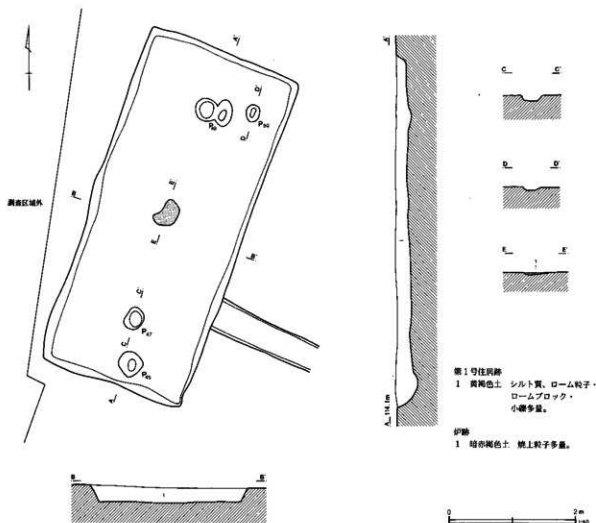
きく7段階に分けた。

- 外面調整及び内面調整は器表の主体的な調整法を記す。ハケメは2cm当たりの本数で示し、若干の変位幅を含めている。また内面のハケメ調整のうち右傾斜ハケは向かって右下がりのハケメ、左傾斜ハケは同じく左下がりのハケメを指す。
- 備考欄には出土位置、成形、その他の製作技法等の特記事項を記した。また、ヘラ記号のある場合は内外面の位置とその存在を記した。

形象埴輪

- 形象埴輪の種類は人物、器財(板・盾)、家、その他(不明等)に区分され、掲載・記述の順序もおおむねこれに従っている。
- 胎土・焼成・色調・調整(ハケメ)については円筒埴輪と同じ基準である。

第14図 A区第1号住居跡



第1号住居跡

1 黄褐色土 シルト質、ローム粒子・ロームブロック・小礫多量。

炉跡

1 褐色黄褐色土 焼上粒子多量。

第1号住居跡 (第14図)

G-2グリッドに位置する。北東-南西方向を主軸とする方形プランの住居跡であり、東壁に幅0.5m、深さ8cmの溝が伴う。主軸方位はN-19°-Eを測る。

遺構の規模は、長軸5.5m、短軸2.5m、深さ23cmを測る。床面はほぼ平坦である。床面中央に炉跡が検出された。住居跡の覆土には、黄褐色土である。浅いピットが4基検出された。覆土の状況から全て住居跡に伴うものと思われる。ピットの深さはP₁₅=13cm、P₄₇=14cm、P₄₉=6cm、P₅₀=5cmを測る。遺構の時期は中世である。

第1号孤立柱建物跡 (第15図)

G・H-2グリッドに位置する。平面形は2間×2

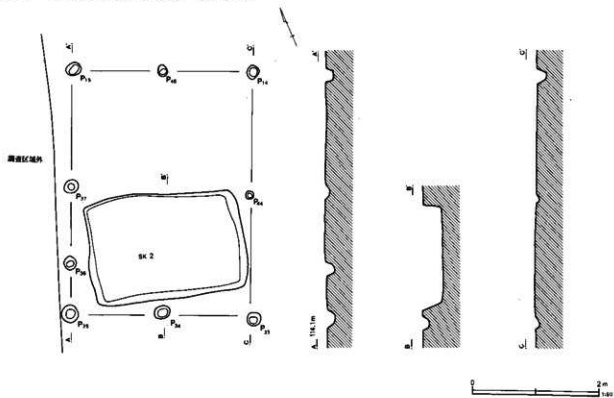
間の方形になる。P₃₃・P₃₆・P₃₇・P₄₄が囲む部分にSK2が位置することから、本遺構に伴うものと思われる。桁行方位はN-22°-Eを測る。

遺構の規模は、桁行3.9m、梁行2.8mを測る。桁行の柱間は1.9m、梁行の柱間は1.4mである。柱穴の深さはP₁₄=15cm、P₁₅=13cm、P₃₃=6cm、P₃₄=11cm、P₃₅=12cm、P₃₆=16cm、P₃₇=不明、P₄₄=5cmを測る。P₃₇・P₄₄は不明である。SK2から、中世の素焼土器が出土していることから、本遺構の時期もほぼ同じものと考えられる。

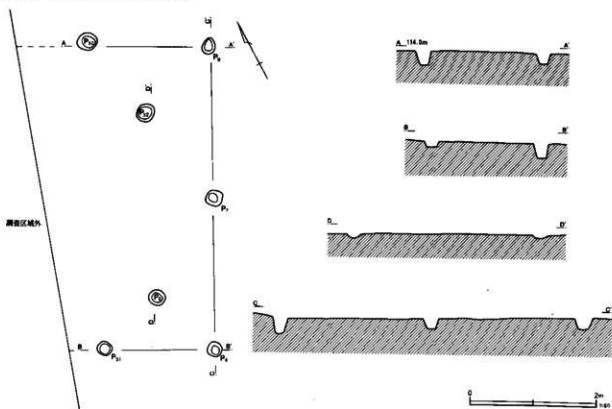
第2号孤立柱建物跡 (第16図)

H-2グリッドに位置する。桁行方向はN-26°-Eを測る。遺構の規模は、桁行4.7mを測る。梁行は不

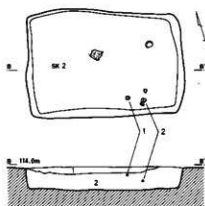
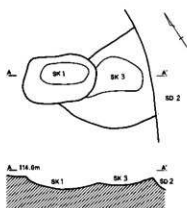
第15图 A区第1号掘立柱建物跡・第2号土坑



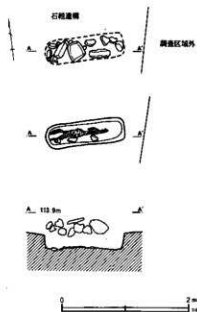
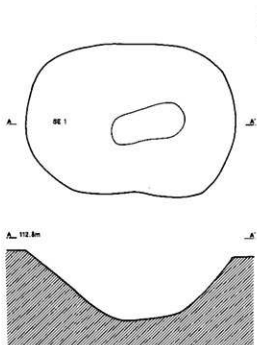
第16图 A区第2号掘立柱建物跡



第17図 A区土壌・井戸跡・石組遺構



第2号土層
 1 黒褐色土 シルト質、ローム粒子・小礫・炭化物少量。
 2 暗褐色土 シルト質、大礫、ローム粒子多量、小礫・炭化物少量。



明である。桁行の柱間は2.3m、梁行の柱間は1.9m(上部)、1.7m(下部)である。柱穴の深さは $P_4=25\text{cm}$ 、 $P_6=6\text{cm}$ 、 $P_7=16\text{cm}$ 、 $P_9=18\text{cm}$ 、 $P_{10}=12\text{cm}$ 、 $P_{31}=9\text{cm}$ 、 $P_{32}=5\text{cm}$ を測る。遺物は出土しなかったが、SB1とはほぼ同じ並びで位置することから、SB1と同時期の遺構であると考えられる。

第1号土壌 (第17図)

H-2グリッドに位置する。SK3と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ21cmである。

主軸方位はN-56°-Wを測る。底面は皿状に浅くくぼむ。覆土は暗褐色土である。遺物は出土しなかった。覆土の状況から中・近世の土壌と考えられる。

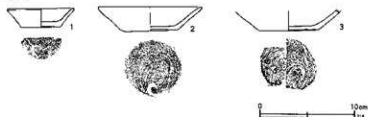
第2号土壌 (第18図)

H-2グリッドに位置する。平面形は方形で、SB1の内側に位置しており、SB1に伴うものと考えられる。

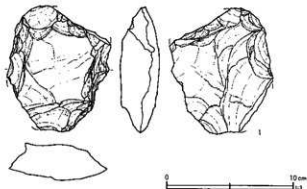
遺構の規模は、長辺2.5m、短辺1.7m、深さ35cmである。主軸方位はN-75°-Wを測る。底面は平坦で、壁はほぼまっすぐに立ち上がる。覆土は暗褐色土

第18図 A区出土遺物

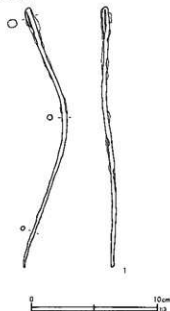
SK2



グリッド出土



石組遺構



A区第2号土壌出土遺物観察表 (第18図)

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	土師器皿	(6.8)	1.9	(4.1)	白赤黒雲	明褐	B	30	ロクロ挽き成形 底部回転糸切り痕
2	土師器皿	10.7	2.3	5.4	白黒雲片	明褐	B	90	ロクロ挽き成形 底部回転糸切り痕
3	土師器皿			6.0	白黒雲	橙	B	50	ロクロ挽き成形 底部回転糸切り痕

である。床面上に自然礫が1個、覆土中からは、中世の土師器環が出土した。この遺構の時期は、出土遺物から中世であると考えられる。

出土遺物 (第18図)

1～3は中世の土師器皿である。3点ともロクロ挽き成形で、底部には回転糸切り痕が明瞭に残る。遺物の時期は、中世になるものと思われる。

第3号土壌 (第17図)

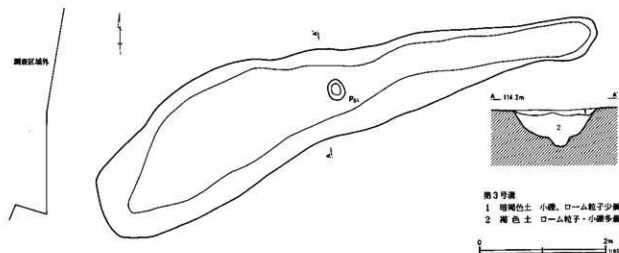
H-2グリッドに位置する。SK1と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は不明であり、深さ15cmである。底面は皿状に浅くくぼむ。覆土は暗褐色土である。覆土上面から馬歯と思われる動物の歯が出土した。遺構の時期は、覆土の状況から中・近世の土壌と考えられる。

第1号井戸跡 (第17図)

B-3・4グリッドに位置する。平面形は楕円形である。遺構の規模は、長軸3.3m、短軸2.3m、深さ12cmである。主軸方位はN-90°-Eを測る。谷地形から検出されたため浅いが、実際は、より上面から掘り込まれたものと思われる。遺物は出土しなかった。この遺構の時期は不明である。

石組遺構 (第17図)

C-3グリッドに位置する。土壌のプランは方形を呈する。規模は、長辺1.2m、短辺0.4m、深さ24cmである。主軸方位はN-90°-Eを測る。土壌の上面から、径10～30cm大の河原石がまとまって検出された。土壌の床面は平坦となり、壁もほぼ垂直に立ち上がる。底面に貼りつくように炭化材と、数個の河原石が検出された。炭化材は、土壌の長軸方向に伸びていた。覆



土は暗褐色土である。覆土中からは鉄製品が1点出土した。遺構の時期は不明である。

出土遺物 (第18図)

1は細長くのびる鉄製品である。断面は円形で、端部は折り返されている。長さ20.4cm、幅0.4cm、重さ16.63gを測る。用途は不明である。

第3号溝 (第19図)

F-2グリッドからF-3グリッドにかけて位置する。全長8.3m、幅0.6m、深さ42cmを測る。溝の断面は幅の広い部分では逆台形、狭い部分ではU字形を呈する。覆土は褐色土である。出土遺物はなく、遺構の時期も不明である。

道路状遺構 (第20図)

A区調査区の南半部にかけて検出された。SK3と重複するが、新旧関係は不明である。SD1・2が北東-南西方向に伸びており、SD2に平行するように、径10~30cm大の河原石が多数敷き詰められた状態で検出された。石が敷き詰められた範囲はSD1の北部からSD4、SD2の北部にかかる状態で、幅約1.5m、長さ約20mに及ぶ。石の直下には幅1.8m以上、深さ35cmの溝状の落ち込みが伸びており、北部ではSD4に接続する。

各溝の規模はSD1が幅0.5m、深さ22cm、SD2が幅0.8m、深さ22cm、SD4が幅0.6m、深さ25cmを測

る。SD2の南側から西側にかけて、多数のピットが分布する。SD2に重複するものも多く、関連するものと考えられる。SD1・2・4と河原石直下の溝の覆土は、小礫を混入する暗褐色土で共通する。これらの遺構は、D・E区で検出された遺構と共通することから、近世の道路状遺構であると思われる。

ピット (第20図)

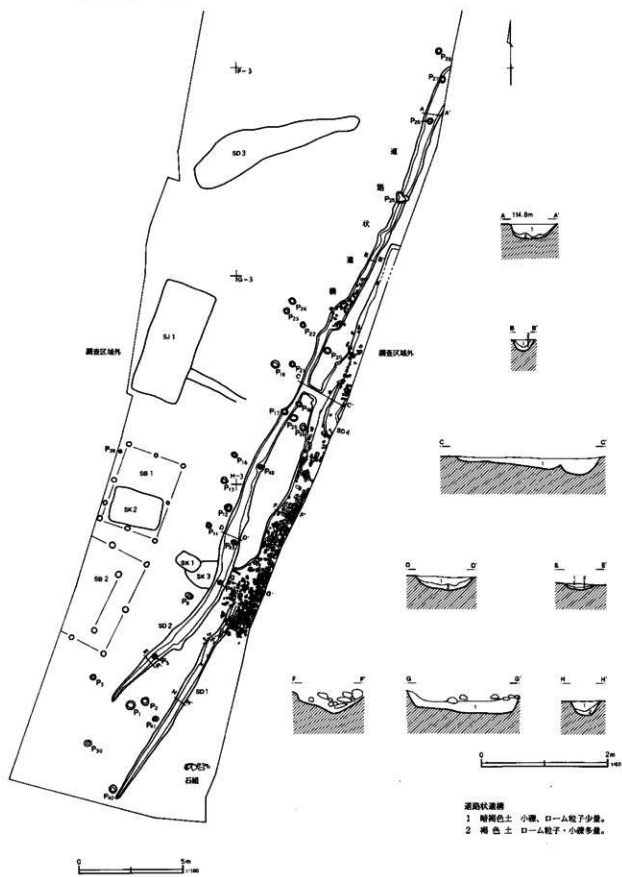
調査区南半部に分布し、全部で55基検出された。このうちSJ1、SD3に伴うものと、SB1・2を構成するものを除くと、単独のピットは34基を数える。ピットは円形または楕円形で、径20cm大のものが最も多く、30cm大が次いで多い。深さは10~20cm大が大半である。これらのピットは、道路状遺構の西側に沿って、または、重複して位置するものが多く、位置関係をうかがわせる。また、SB1・2のピットと直径、深さ、覆土が共通なものが多い。

以上のことから遺構の時期としては、中世から近世にかけて、SB1・2や道路状遺構に関連して構築されたピット群と考えよう。

グリッド出土遺物 (第18図)

1は、縄文時代の石器である。スクレイパーになるものと思われる。上部と左側縁部とを欠損する。正面右側縁部に刃部を作り出している。長さ9.8cm、幅7.9cm、厚さ2.8cm、重さ261gを測る。石質は頁岩である。

第20図 A区道路状遺構・ピット



A区ビット観察表

遺構名	グリッド	平面形	直径・長径	深さ	覆土	備考
P ₁	I-2G	円形	42cm	44cm	暗褐色土	
P ₂	I-2G	円形	32	7	暗褐色土	
P ₃	H-2G	円形	25	4		
P ₄	H-2G	円形	23	25	暗褐色土	SB2
P ₅	H-2G	円形	23	30		
P ₆	H-2G	円形	24	6	暗褐色土	SB2
P ₇	H-2G	楕円形	26	16	暗褐色土	SB2
P ₈	H-2G	楕円形	36	21	暗褐色土	
P ₉	H-2G	楕円形	26	18	暗褐色土	SB2
P ₁₀	H-2G	楕円形	32	12	暗褐色土	SB2
P ₁₁	H-2G	楕円形	28	16	暗褐色土	
P ₁₂	H-2G	楕円形	35	30	暗褐色土	
P ₁₃	G-2G	円形	28	18	暗褐色土	
P ₁₄	G-2G	円形	22	15	暗褐色土	SB1
P ₁₅	G-2G	円形	24	13	暗褐色土	SB1
P ₁₆	G-2G	楕円形	28	16	暗褐色土	
P ₁₇	G-3G	楕円形	32	26	暗褐色土	
P ₁₈	G-3G	楕円形	29	26	暗褐色土	
P ₁₉	G-3G	円形	38	39	暗褐色土	
P ₂₀	G-3G	円形	32	17	暗褐色土	
P ₂₁	G-3G	円形	24	12	暗褐色土	
P ₂₂	G-3G	円形	24	9	暗褐色土	
P ₂₃	G-3G	円形	30	25	暗褐色土	SB1
P ₂₄	G-3G	円形	28	28	暗褐色土	
P ₂₅	F-3G	楕円形	13	36	暗褐色土	
P ₂₆	F-3G	楕円形	30	17		
P ₂₇	F-3G	楕円形	32	11		
P ₂₈	E-3G	円形	29	20	暗褐色土	
P ₂₉	E-3G	円形	25	22	暗褐色土	
P ₃₀	I-2G	円形	30	8	暗褐色土	
P ₃₁	H-2G	円形	21	9	暗褐色土	SB2
P ₃₂	H-2G	円形	29	5	暗褐色土	SB2
P ₃₃	H-2G	円形	22	6	暗褐色土	
P ₃₄	H-2G	円形	24	11	暗褐色土	SB1
P ₃₅	H-2G	円形	26	12	暗褐色土	SB1
P ₃₆	H-2G	楕円形	20	16	暗褐色土	SB1
P ₃₇	G-2G	円形	24	不明	暗褐色土	SB1
P ₃₈	G-2G	円形	16	不明	暗褐色土	
P ₃₉	G-3G	楕円形	40	13	暗褐色土	
P ₄₀	I-2G	楕円形	38	13		
P ₄₁	I-2G	楕円形	26	13		
P ₄₂	H-2G	円形	22	17		
P ₄₃	H-2G	楕円形	29	12		
P ₄₄	H-2G	円形	14	5		SB1
P ₄₅	G-2G	円形	38	13		SJ1に伴う
P ₄₆	G-2G	円形	16	不明		SB1
P ₄₇	G-2G	楕円形	35	14		SJ1に伴う
P ₄₈	G-3G	円形	22	15		
P ₄₉	G-2G	不定形	60	16		SJ1に伴う
P ₅₀	G-2G	楕円形	26	5		SJ1に伴う
P ₅₁	F-3G	楕円形	32	15		SJ3に伴う
P ₅₂	C-3G	楕円形	38	6		
P ₅₃	C-3G	楕円形	38	9		
P ₅₄	C-3G	楕円形	28	8		
P ₅₅	C-3G	楕円形	23	8		

2. B区

第1号土壇 (第21図)

B-3グリッドに位置する。平面形は方形であり、遺構の規模は、長辺1.5m、短辺0.8m、深さ78cmである。主軸方位はN-31°-Eを測る。底面は平坦となり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土である。遺構の時期は平面形と覆土の状況から中世以降のものと考えられる。

第2号土壇 (第21図)

A・B-3グリッドに位置する。平面形は不定形であり、深さ26cmである。底面は皿状に浅くぼむ。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は不明である。

第3号土壇 (第21図)

B-3グリッドに位置する。平面形は方形であり、遺構の規模は、長辺0.6m、短辺0.3m、深さ9cmである。主軸方位はN-34°-Eを測る。土壇の底面は平坦になる。遺構の時期は不明である。

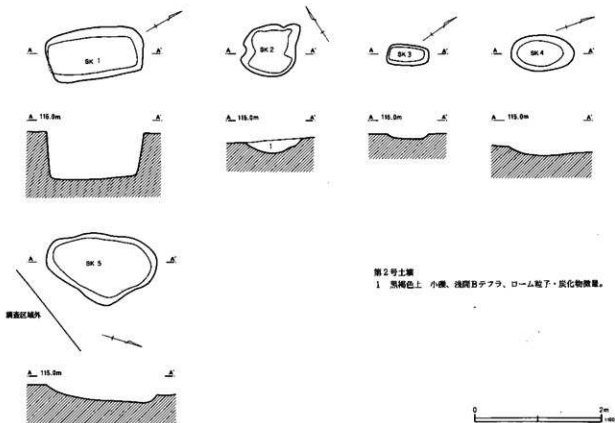
第4号土壇 (第21図)

D-1・2グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.0m、短軸0.5m、深さ15cmである。主軸方位はN-18°-Eを測る。土壇の床面は皿状に浅くぼむ。遺構の時期は、覆土の状況が粘土採掘跡のそれに近似することから、ほぼ同時代のものと推定される。

第5号土壇 (第21図)

D-1・2グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.7m、短軸1.1m、深さ30cmである。主軸方位はN-16°-Wを測る。土壇の底面は北側にやや傾斜するが、ほぼ平坦になる。覆土はにぶい黄褐色土である。遺構の時期は、覆土の状況が粘土採掘跡のそれに近似することから、ほぼ同時代のものと推定される。

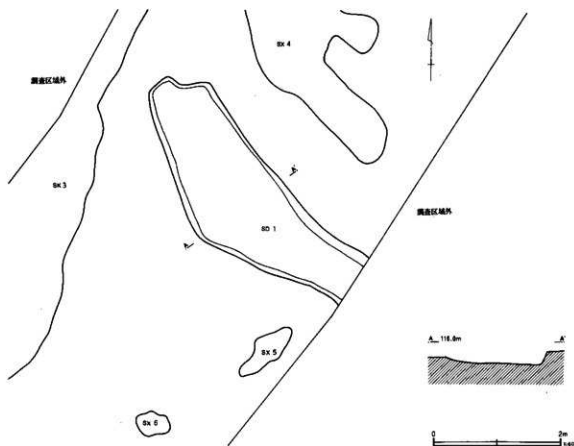
第21図 B区土壇



第2号土壇

1 黒褐色土 小礫、池田Bテフラ、ローム層・粘土採掘跡。

第22図 B区第1号溝



第1号溝 (第22図)

B-2グリッドからC-2・3グリッドにかけて位置する。遺構の規模は、幅1.5m、深さ20cmを測る。溝の断面は浅い逆台形になり、底面は平坦である。覆土は上層が暗褐色土で、下層が黄褐色土である。遺構の時期は不明であるが、溝が弧状にめぐることや、規模から古墳の周溝だった可能性もある。

粘土採掘跡 (第23図)

調査区中央部から西壁にかかるように広く検出された。調査区中央部では、大小の不定形な土塊状になり(SX 4~6)、掘り込みの形状も不定形である。調査区西壁にかかる部分は、南北全長31mの範囲に及んでおり、西側の谷に向かって広がるものと思われる。

覆土は褐色土でローム粒子を多く混入している。火山灰分析の結果では、6世紀初頭に噴出したとされる榛名ニッ岳淡川テフラ(Hr-FA)が含まれていた。

遺構上面から覆土にかけて、縄文時代の石器や古墳時代の土師器片が、流れこんで混在していた。これらの粘土採掘跡は、出土遺物と覆土の火山灰分析の結果から、古墳時代のものと考えられる。

グリッド出土遺物 (第24図)

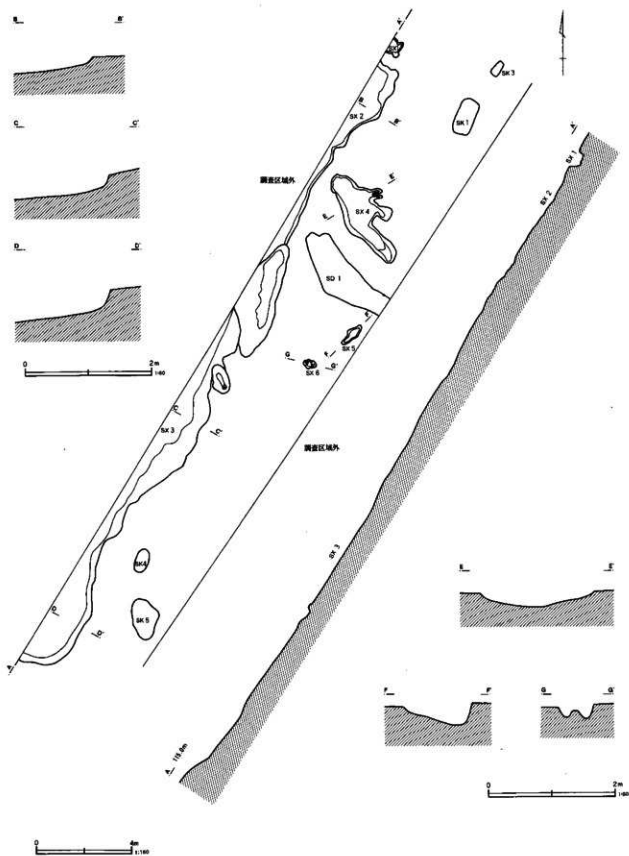
調査区西側の谷に向かう傾斜面から、縄文時代の石器が比較的多く出土した。1~3は、打製石斧である。4~6は、磨石である。

1は上部と左側縁部とを大きく斜離している。長さ6.0cm、幅5.5cm、厚さ1.6cm、重さ6.8gを測る。石質は頁岩で、フォルンフェルス化している。

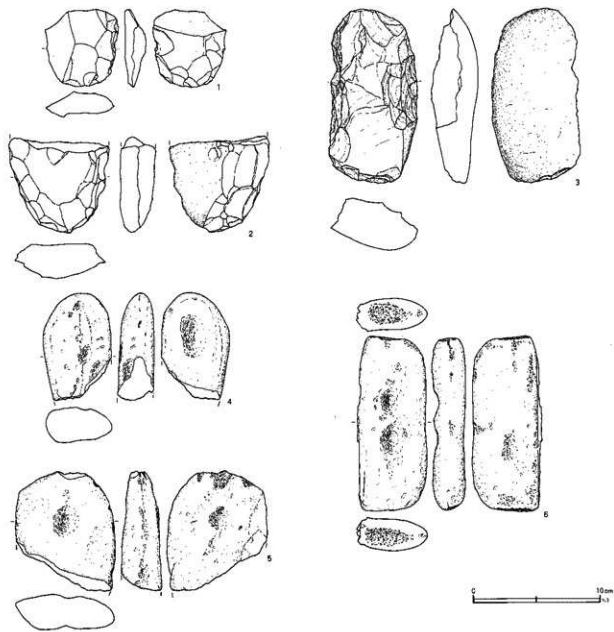
2は上部を欠損する。長さ7.1cm、幅7.2cm、厚さ2.7cm、重さ195gを測る。石質は安山岩であるが、堆積岩の可能性もある。

3は厚身の打製石斧である。完形品である。片面に自然面を残し、片側のみ加工を施している。中央部分

第23图 B区粘土探掘跡(SX 1~6)



第24図 B区グリッド出土遺物



を厚く残しており、特徴的である。長さ13.5cm、幅6.8cm、厚さ3.7cm、重さ421gを測る。石質は泥岩である。

4は下部を一部欠損する磨石で、両面に浅いくぼみ部がある。長さ8.2cm、幅5.2cm、厚さ2.6cm、重さ182gを測る。石質は点紋緑泥片岩である。

5は下部を欠損する磨石で、両面に浅いくぼみ部がある。長さ8.1cm、幅7.7cm、厚さ2.7cm、重さ321gを測る。石質は点紋緑泥片岩である。

6は左側縁部を薄く剥落する磨石で、片面に2箇所くぼみ部がある。両端部には敲打痕が認められ、敲石としても使用されている。長さ13.6cm、幅5.6cm、厚さ2.5cm、重さ327gを測る。石質は絹雲母片岩である。

3. C区

村後3号墳 (第25図)

I・J-2グリッドに周溝の一部が検出された。S D1と重複するが、新旧関係は不明である。周溝は幅2~3m、深さ23cmで弧を描いて伸びており、東側の調査区域外に、主体部が位置するものと思われる。周溝の底面は浅く、凹凸が激しい。覆土は上層が黒褐色土、下層がロームブロックを含む暗褐色である。古墳の時期を示す遺物は出土しなかったが、周溝の伸びる形状から、古墳跡と考えられる。

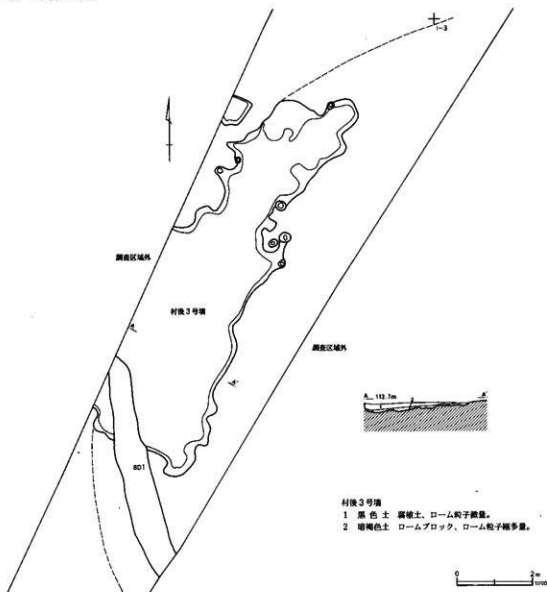
土壌

土壌はC区で25基検出された。大半が中世から近世にかけてのもので、平面形が長方形を呈する。調査区中央部と北部に分布が偏在し、互いに近接し、重複するものもある。

第1号土壌 (第26図)

C-5・6グリッドに位置する。SK24と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は方形であり、遺構の規模は、長辺3.7m、短辺1.2m、深さ30cmであ

第25図 村後3号墳



る。主軸方位はN-33°-Eを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は、全体の形状から中・近世の土壌と考えられる。

第2号土壌 (第26図)

C・D-6グリッドに位置する。東側が一部調査区域外にかかる。平面形は円形であり、遺構の規模は、長軸1.0m、深さ38cmである。底面は平坦で、壁の立ち上がりが明確である。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は、覆土の状況から中・近世の土壌と考えられる。

第3号土壌 (第26図)

C-5・6グリッドに位置する。平面形は円形であり、遺構の規模は、直径1.0m、深さ22cmである。底面は平坦で、壁はやや開いて、まっすぐに立ち上がる。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は覆土の状況から、中・近世の土壌と考えられる。

第4号土壌 (第26図)

C-5グリッドに位置する。平面形は方形であり、遺構の規模は、長辺3.5m、短辺0.5m、深さ34cmである。主軸方位はN-34°-Eを測る。底面は平坦で、南端でピット状にくぼむ。壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は、全体の形状から中・近世の土壌と考えられる。

第5号土壌 (第26図)

D-5グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.0m、短軸0.9m、深さ51cmである。主軸方位はN-2°-Eを測る。底面は南側に傾斜しており、中央やや南よりにピットが伴う。壁は南側でまっすぐに立ち上がる。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は不明である。

第6号土壌 (第26図)

E・F-4グリッドに位置する。平面形は長楕円形であり、遺構の規模は、長軸3.2m、短軸0.8m、深さ40cmである。主軸方位はN-53°-Wを測る。底面はほぼ平坦で、北西部で皿状に浅くくぼむ。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は、全体の形状から中・近世の土壌と考えられる。

第7号土壌 (第26図)

F-3・4グリッドに位置する。平面形は方形に近い。遺構の規模は、長辺4.1m、短辺1.0m、深さ32cmである。主軸方位はN-38°-Eを測る。底面は平坦で、南西端部で棚状の段差がつく。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は、全体の形状から中・近世の土壌と考えられる。

第8号土壌 (第26図)

G-3グリッドに位置する。西側が調査区域外にかかる。平面形は方形で、北側に不定形な土壌が連続する。遺構の規模は、長辺2.8m、深さ31cmである。主軸方位はN-34°-Eを測る。底面はほぼ平坦で、南部には皿状の浅いピットが伴う。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は、全体の形状から中・近世の土壌と考えられる。

第9号土壌 (第26図)

G・H-3グリッドに位置する。平面形は方形である。遺構の規模は、長辺2.7m、短辺0.9m、深さ20cmである。主軸方位はN-47°-Eを測る。土壌の底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は、全体の形状から中・近世の土壌と考えられる。

第10号土壌 (第27図)

G-3、H-2・3グリッドに位置する。西側半分が調査区域外にかかる。平面形は方形で、北側と東側にそれぞれ方形の土壌が重複する。遺構の規模は、長辺4.9m、深さ30cmである。底面は平坦で、壁はやや開いて立ち上がる。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は、全体の形状から中・近世の土壌と考えられる。

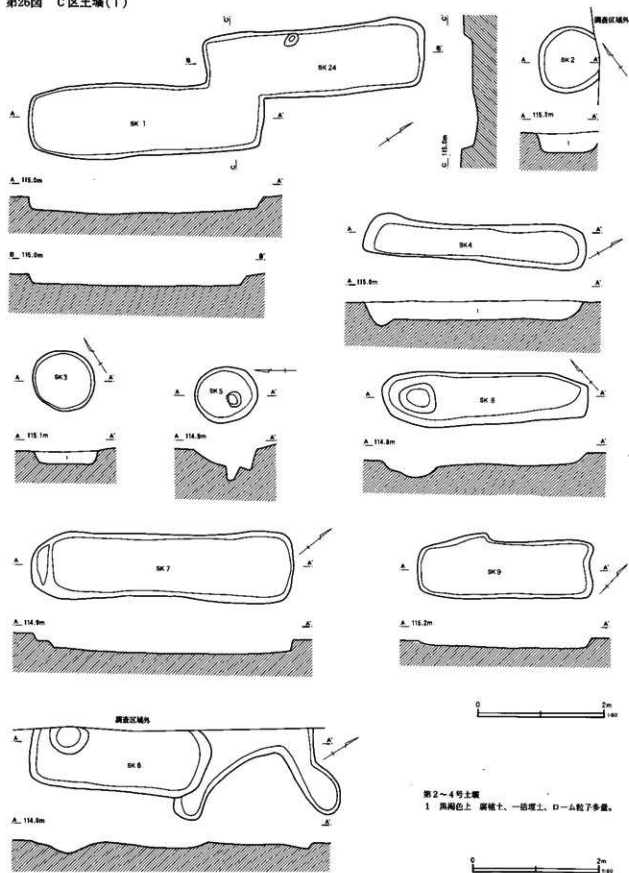
第11号土壌 (第27図)

H-3グリッドに位置する。平面形は方形である。遺構の規模は、長辺2.8m、短辺0.8m、深さ29cmである。主軸方位はN-37°-Eを測る。底面は平坦になり、壁はやや開いて立ち上がる。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は、全体の形状から中・近世の土壌と考えられる。

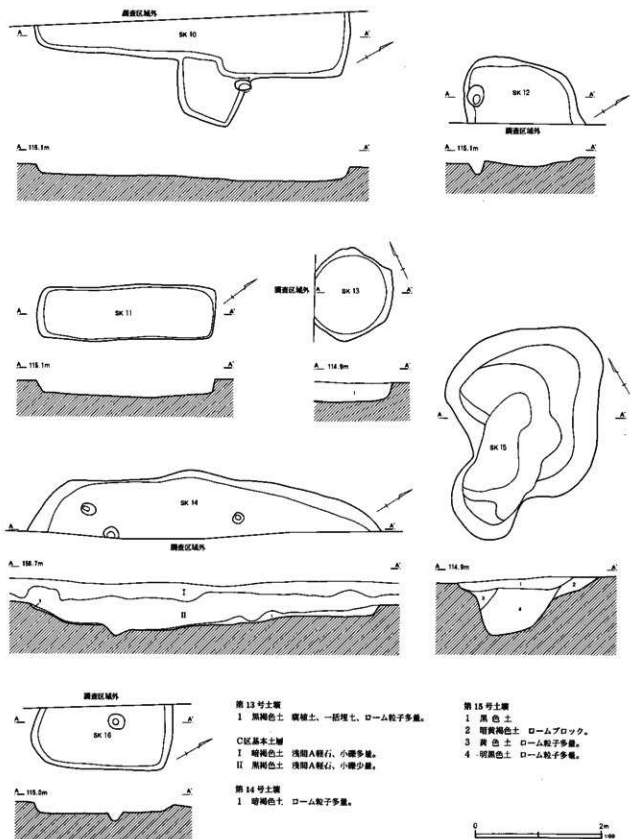
第12号土壌 (第27図)

H-3グリッドに位置する。平面形は隅丸のくずれ

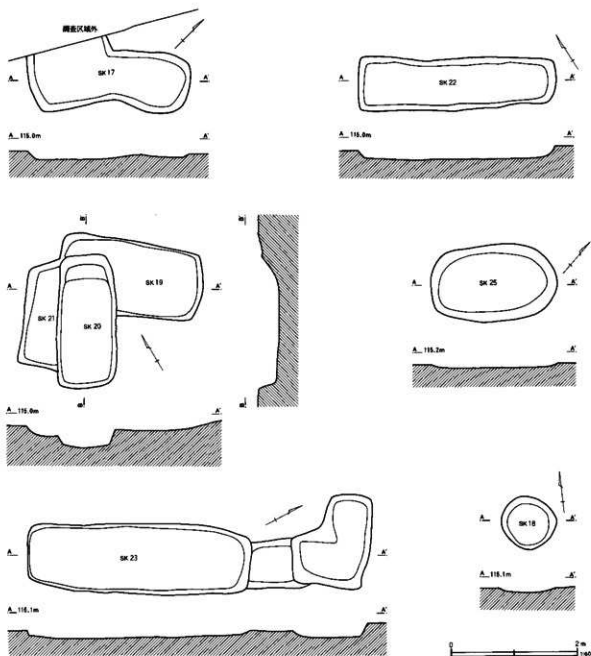
第26图 C区土坑(1)



第27图 C区土壤(2)



第28図 C区土坑(3)



た方形となり、東側は調査区域外にかかる。深さは26cmである。底面はゆるやかにくぼみ、壁はあまり明確ではない。覆土は黒褐色土である。遺構の時期は、覆土の状況から中・近世の土坑と考えられる。

第13号土坑 (第27図)

J-1グリッドに位置する。平面形は円形である。遺構の規模は、直径1.4m、深さ32cmである。底面は平坦となり、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は黒褐色

土である。遺構の時期は、覆土の状況から中・近世の土坑と考えられる。

第14号土坑 (第27図)

G-3・4グリッドに位置する。東側から南側にかけて調査区域外にかかるため、平面形は不明である。深さ49cmを測る。底面は平坦ではなく、小ピットを伴う。壁の立ち上がりはゆるやかだが、一様ではない。上層が基本土層第II層と同様の黒褐色土で小礫を多く

混入し、下層は小礫が少ない暗褐色土である。遺構の時期は不明である。

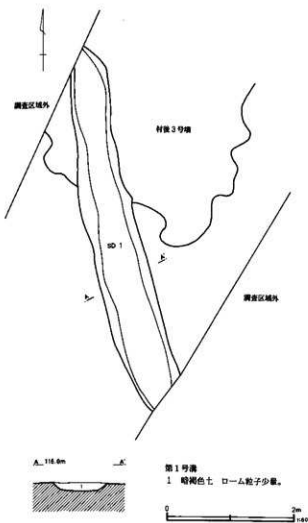
第15号土壌 (第27図)

D-5グリッドに位置する。平面形は不定形であり、深さは98cmである。覆土は明黒色土である。遺構の時期は不明である。

第16号土壌 (第27図)

G-3グリッドに位置する。西側が調査区域外にかかる。平面形は方形である。遺構の規模は、長さ2.2m、深さ29cmである。主軸方位はN-33°-Eを測る。底面はほぼ平坦となり、中央には小ピットが伴う。壁はゆるやかに立ち上がる。遺構の時期は、全体の形状から中・近世の土壌と考えられる。

第29図 C区第1号溝



第17号土壌 (第28図)

F-3グリッドに位置する。一部西側が、調査区域外にかかる。平面形は不定形であるが、方形の土壌が重複した結果と考えられる。遺構の規模は、長さ2.5m、深さ16cmである。底面は中央部分で傾斜するが、ほぼ平坦となる。遺構の時期は、全体の形状から中・近世の土壌と考えられる。

第18号土壌 (第28図)

B・C-6グリッドに位置する。平面形は円形である。遺構の規模は、直径0.8m、深さ8cmである。底面は皿状に浅くくぼむ。遺構の時期は、覆土の状況から中・近世の土壌と考えられる。

第19～21号土壌 (第28図)

B-6グリッドに位置する。3基の土壌が互いに重複する。新旧関係は不明である。平面形は3基とも方形を呈する。

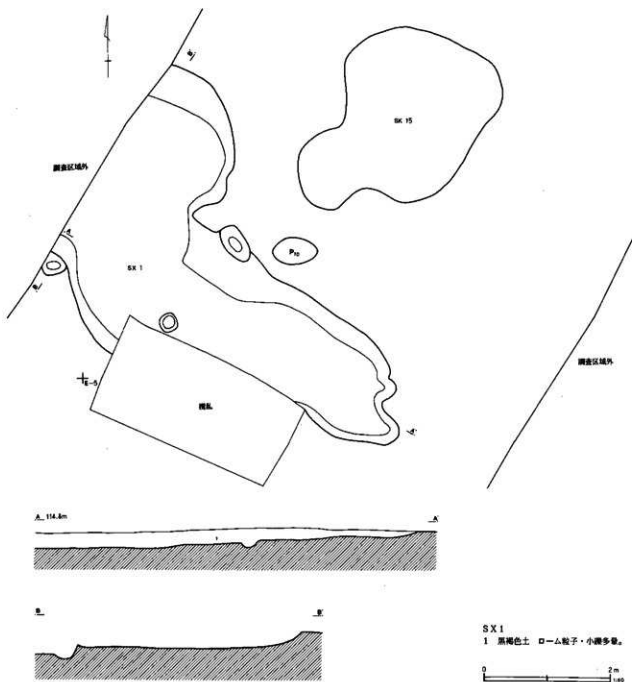
遺構の規模は、SK19が長辺2.2m、短辺1.2m、深さ15cmを測る。SK20は長辺2.1m、短辺0.9m、深さ36cmである。SK21は長辺1.6m、深さ16cmである。主軸方位はSK19がN-51°-W、SK20がN-31°-E、SK21がN-36°-Eを測る。3基ともに底面は平坦となる。この遺構の時期は、3基とも中・近世の土壌と考えられる。

第22号土壌 (第28図)

B-6グリッドに位置する。平面形は方形であり、遺構の規模は、長辺3.1m、短辺0.8m、深さ32cmである。主軸方位はN-57°-Wを測り、多くの土壌が北東-南西方向に主軸方位を取るのに対して、本土壌は北西-南東方向に向く。底面は平坦となり、壁はゆるやかに立ち上がる。中・近世の土壌と考えられる。

第23号土壌 (第28図)

B-6グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、北側に方形の土壌から連続する。遺構の規模は、長辺5.4m、短辺1.1m、深さ24cmである。主軸方位はN-28°-Eを測る。底面は連続する土壌の部分で段差がつく以外は、ほぼ平坦となる。遺構の時期は、全体の形状から中・近世の土壌と考えられる。



第24号土壌 (第26図)

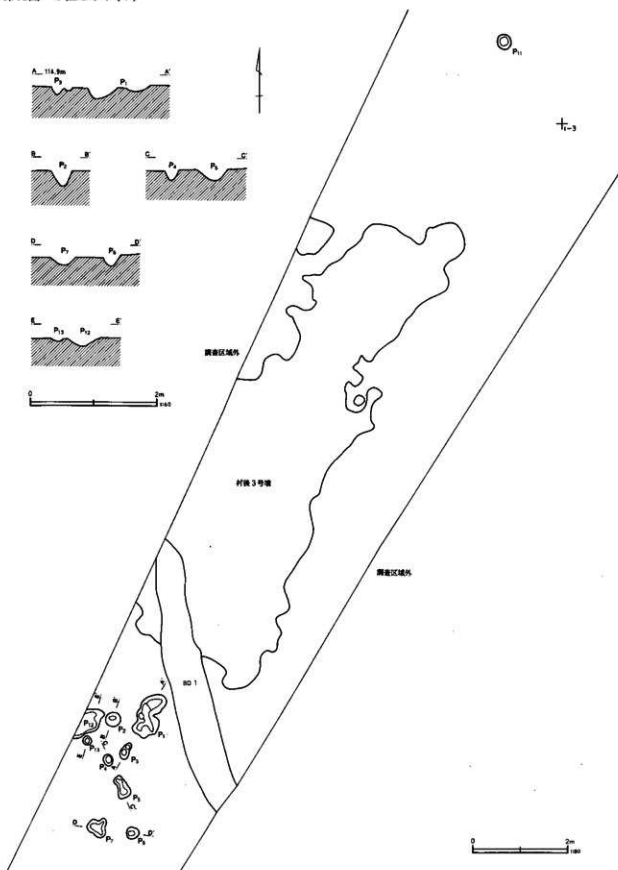
B-6、C-5・6グリッドに位置する。SK 1と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は方形であり、遺構の規模は、長辺3.4m、短辺1.1m、深さ37cmである。主軸方位はN-30°-Eを測る。底面はほぼ平坦となる。西側壁際に小ピットが位置するが、この

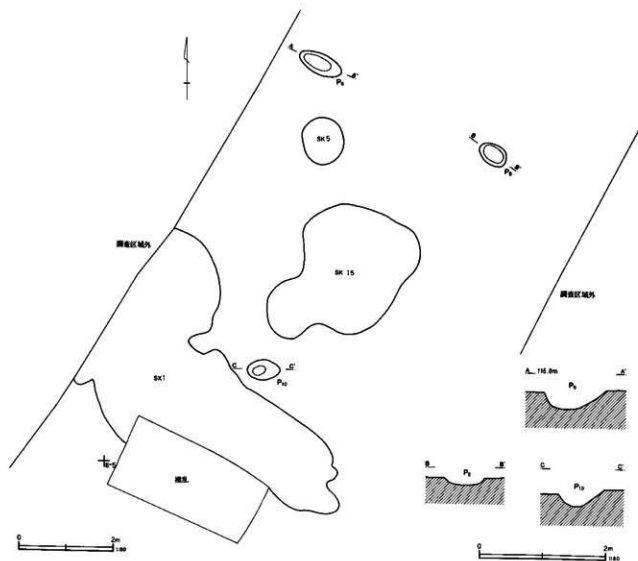
土壌に伴うものかどうかは不明である。中・近世の土壌と考えられる。

第25号土壌 (第28図)

G-3グリッドに位置する。SK 9に直列するように位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸2.0m、短軸1.2m、深さ12cmである。主軸方位

第31図 C区ビット(1)





はN-48°-Eを測る。底面は浅く、平坦となる。遺構の時期は、覆土の状況から、中・近世の土壌と考えられる。

第1号溝 (第29図)

I-2グリッドからJ-2グリッドにかけて位置する。北西-南東方向にややカーブしながら伸びる。村後3号墳の周溝と重複するが、新旧関係は不明である。南際には不定形のピットが9基検出されたが、溝との関連性は明確ではない。遺構の規模は、幅0.8m、深さ12cmを測る。溝の底面は平坦となり、壁は開いて立ち上がる。覆土は暗褐色土である。遺構の時期は不明である。

SX 1 (第30図)

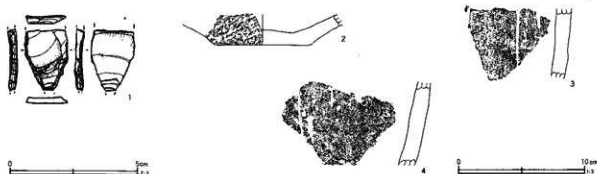
D・E-5グリッドに位置する。西側が調査区域外にかかる。北西-南東方向に溝状に伸びるが、西側の調査区壁にかかって、大きく土塚状に膨らむ。底面と両際にピットを伴う。

遺構の規模は、溝状部分の長さが6.2m、幅1.5m、深さ14cm、土塚状に膨らむ部分が長さ3.7m、深さ26cmを測る。底面の状態は、西側に向かうに従ってなだらかに傾斜し、土塚状の部分ではほぼ平坦となる。覆土は、小礫を多く含む黒褐色土で、中近世の土壌の覆土に似てしまいが弱い。遺構の時期は、覆土の状況から中・近世と考えられるが、遺構の性格は不明である。

C区ビット観察表

遺構名	グリッド	平面形	直径・長径	深さ	覆土	備考
P ₁	J-2	不定形	96cm	21cm	暗褐色土	
P ₂	J-2	楕円形	32	24	暗褐色土	
P ₃	J-2	不定形	36	14	暗褐色土	
P ₄	J-2	楕円形	24	16	暗褐色土	
P ₅	J-2	不定形	48	10	暗褐色土	
P ₆	J-2	楕円形	26	17	暗褐色土	
P ₇	J-2	不定形	42	12	暗褐色土	
P ₈	D-5	楕円形	64	11		
P ₉	D-5	楕円形	97	31		
P ₁₀	D-5	楕円形	72	26		
P ₁₁	H-2	円形	30	13		
P ₁₂	J-1・2	不定形	68	12		
P ₁₃	J-2	円形	18	4		

第33図 C区グリッド出土遺物



ビット (第31・32図)

単独のビットは13基検出された。分布は調査区南部のJ-2グリッド内に9基、H-2グリッド内に1基、調査区北部のD-5グリッド内に3基で、調査区南部のSD1南際と調査区北部のSX1、SK15周辺の2箇所に分布する。ビットの平面形は不定形のものが多く、深さは4~24cmと浅いものが多い。覆土はしまりの弱い暗褐色土が多く、SD1の覆土に共通する。いずれのビットも出土遺物はなく、遺構の時期は明確にできない。P₁~P₇とP₁₁~P₁₃は、SD1の南際に集中して位置しており、SD1に関連するビット群であろうか。

グリッド出土遺物 (第33図)

1は村後3号墳の周溝内から出土したナイフ形石器である。刃部を欠損する。基端部も欠損しているもの

と思われる。長さ2.4cm、幅1.7cm、厚さ1.25cm、重さ1.53gを測る。石質は黒曜石である。

2~4は、縄文土器である。3点とも中・近世の土壌覆土から出土したものである。2は深鉢の底部で、斜縄文が施文される。内面は丁寧に調整されている。3・4は、無文の地文に細い沈線が懸垂する胴部破片で、底部に近い部分と思われる。3は2本1組の平行沈線が一定の間隔で懸垂する。外面は滑らかに調整されている。いずれも土器の色調は明褐色を呈し、胎土には片岩、白色砂粒を含む。焼成は良好である。縄文中期後葉から後期初頭、加曾利E式または称名寺式土器と思われる。

4. D区

第1号住居跡 (第34図)

C-2グリッドに位置する。東側半分が調査区域外にかかる。南北方向に主軸をとる方形プランの住居跡になるものと思われる。遺構の規模は、長軸4.7m、深さ6cmを測る。床面は平坦で固い。壁はゆるやかに立ち上がる。炉跡は調査区域外にあるものと思われる。

P₁・P₂が主柱穴と思われる。土層断面から柱痕が観察された。ピットの深さはP₁=5cm、P₂=6cmである。覆土はロームブロックを混入する暗褐色土である。

北壁周辺から、壺の大型破片、器台の脚部、台付甕の脚台部などが出土した。複合口縁の壺(第35図1)は、床面に置いた状態で、他は床面から少し浮いた状態で出土した。遺構の時期は、出土遺物から古墳時代前期であると考えられる。

出土遺物 (第35図)

1は壺形土器で、頸部が屈曲して開き、薄い折り返し口縁になる。外面と口縁から頸部の内面はよく磨かれ、胴部内面は横方向に木口ナデされる。

2・3は高坏である。2は脚部のみで、4ヶ所に円孔がある。外面は縦方向によく磨かれる。3は口縁部の破片である。

4は台付甕の底部破片である。5は小型器台の器受部である。

第2号住居跡 (第36図)

B-2グリッドに位置する。北東方向に主軸とする方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-16°-Eを測る。遺構の規模は、長軸3.3m、短軸3.3m、深さ6cmを測る。床面はほぼ平坦である。炉跡は中央からやや北東よりに検出された。ピットは3基検出された。このうちP3は貯蔵穴と思われる。P3は落ち際周辺がテラス状に段差がつく。ピットの深さはP₁=2cm、P₂=2cmである。覆土は黒褐色土である。

東壁近くの床面から自然礫、その周辺から台付甕の脚台部が出土した。遺構の時期は、出土遺物から古墳時代前期であると考えられる。

出土遺物 (第36図)

1~3は、台付甕の脚台部である。3点とも端部内面が折り返され、内面は指頭による押さえ痕が著しいことなど共通した特徴を持つ。2は斜方向のハケメ後、軽く縦ナデされる。

第1号土墳 (第37図)

B-1・2、C-1・2グリッドに位置する。確認面からは浅い痕跡のみが検出された。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.4m、短軸1.0m、深さ6cmである。主軸方位はN-89°-Wを測る。遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

第2号土墳 (第37図)

C-1グリッドに位置する。平面形は方形であり、遺構の規模は、長辺1.0m、短辺0.9m、深さ8cmである。ピットが2基重複しているが、土壌に伴うものかどうかは不明である。遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

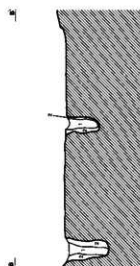
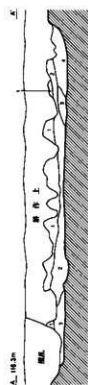
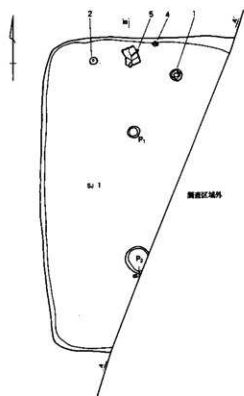
第3号土墳 (第37図)

C-1グリッドに位置する。確認面から浅く、痕跡のみが検出された。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ7cmである。主軸方位はN-18°-Eを測る。遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

道路状遺構 (第38図)

調査区北部から西部にかけて位置し、調査区域西部の谷側に向かって、ゆるやかに傾斜する面に構築される。約20cmの段差が2段、北東-南西方向に続き、2段目の最下面には、小ピット列が同方向に伸びる。小ピット列は、一部途切れながらも、ほぼ等間隔で続いており、2列が平行して伸びる。小ピット列と小ピット列の間は、約1m、小ピット同士は30~40cmの間隔を保つ。小ピットは、直径30~40cm、深さ20~25cmが大半である。これらの遺構は、E区の道路状遺構の延長上に位置していることから、同一の遺構であると考えられる。

第34図 D区第I号住居跡



D区

第I号住居跡

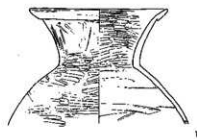
- 1 黒褐色土 ローム粒子若干。
 2 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック少量。
 3 暗褐色土 ロームブロックわずか。
 4 黒褐色土 ロームブロック・粘土粒子わずか。

P₁・P₂

- 1 黒褐色土 ローム粒子、炭化物粒子。(柱穴)
 2 黒褐色土 ロームブロック。



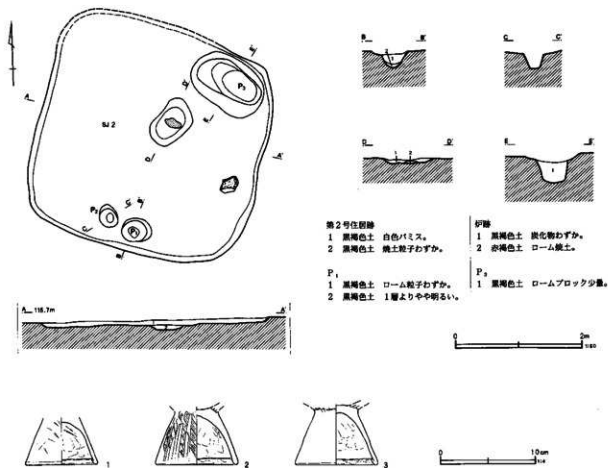
第35図 D区第I号住居跡出土遺物



D区第I号住居跡出土遺物観察表 (第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺	14.5		11.5	白黒砂石	明褐	B	80	床面出土
2	高坏				黒石	黄褐	B	50	四孔4ヶ所
3	高坏	(18.7)			白片石	明黄褐	A	20	
4	台付羹				白片石	赤褐	A	80	
5	器台	6.8			白砂片	黄褐	A	60	

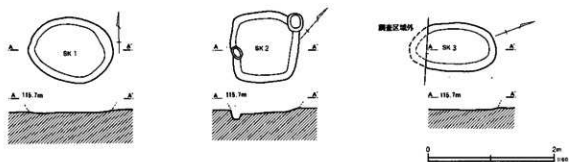
第36図 D区第2号住居跡・出土遺物



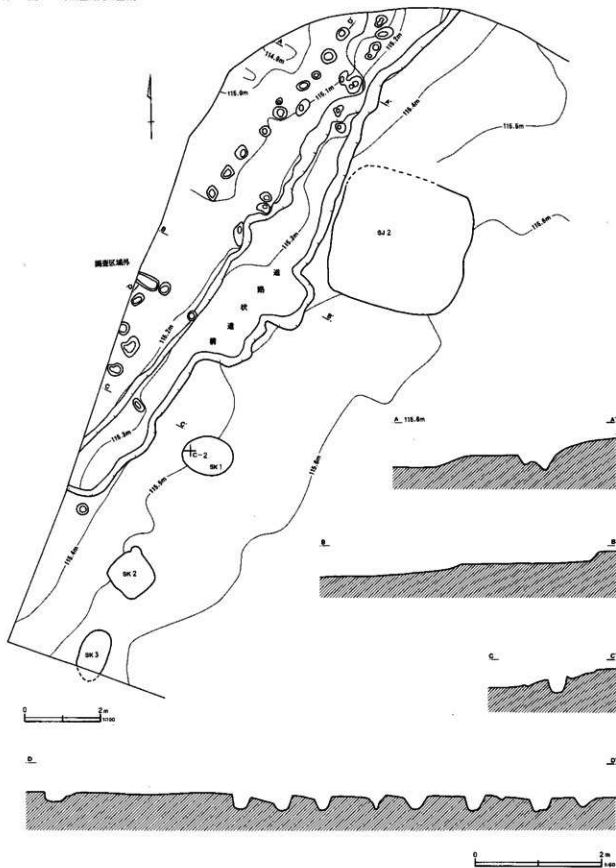
D区第2号住居跡出土遺物観察表 (第36図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	白付甕			7.3	白黒	明黄褐	A	70	
2	白付甕			8.8	白黒	赤褐	B	100	
3	白付甕			8.2	白黒	明黄褐	A	50	

第37図 D区土壇



第38图 D区道路状遗構

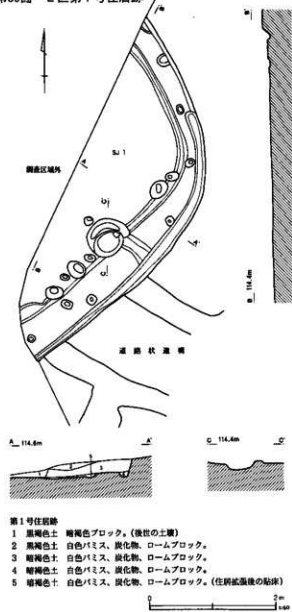


5. E区

第1号住居跡 (第39図)

F・G-1グリッドに位置する。道路状遺構を構成する溝と重複する。東側の大半が、調査区域外にかかる。このため、全体の形状は不明だが、おそらく方形になるものと思われる。深さ30cmを測る。床面はほぼ平坦である。壁溝が2条巡っており、拡張の際の貼床も認められることから、住居を拡張したものと思われる。壁際には、径10~30cm、深さ10~40cmの小ピットが巡る。住居跡の覆土は炭化物とロームブロックを含む

第39図 E区第1号住居跡



む暗褐色土である。覆土中から縄文前期の諸磯式土器を主体とする縄文前期後葉の土器が出土しており、遺構の時期も、同じ時期であると考えられる。

出土遺物 (第41図)

1・2は口縁部片で、1は口唇がやや内割ぎ状になり、浅い沈線が横走る。2は先端の尖った工具による細い沈線が、2本平行する。色調は2点とも暗赤褐色を呈し、焼成はやや弱い。1は胎土に金雲母を含む。縄文早期中葉の沈線文系土器であると思われる。

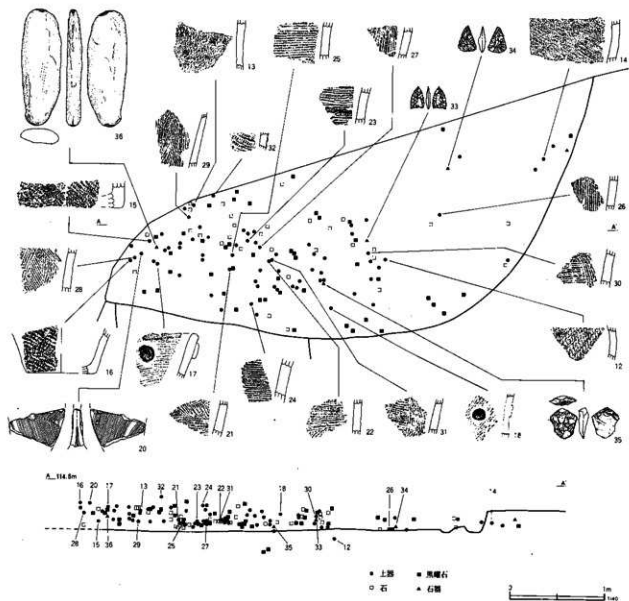
3~8は、胎土に繊維を多量に含む縄文施文土器である。3は同一原体により器面上部には縦位に、下部には横位に縄文施文される。4は縦走縄文、5~8は斜縄文で、7は太い原体による粗い施文である。内面にはいずれも繊維痕が著しく、6は内面に条痕文を伴う。色調は明黄褐色を呈し、焼成は良好である。縄文前期初頭の花積下層式であると思われる。

9~11は、縄文前期中葉の諸磯B式である。9・10は浮線文が貼りつき、浮線状には先の尖った工具による細い斜め刻みが連続する。10は地文縄文である。11は半截竹管による平行沈線で幾何学モチーフを描く。地文には縄文が施文される。3点とも色調は明黄褐色を呈し、焼成は固くしまっている。9の胎土には石英、片岩を多く含む。

12~16は縄文施文の胴部から底部にかけての土器である。12・13は同一個体で、やや粗く施文される。色調は12・13・16が明黄褐色、14が赤褐色、15が褐色を呈する。いずれも片岩、砂粒を多く含む、焼成は固くしまつて良好である。

14~32は、半截竹管による集合沈線文土器で、諸磯C式である。17・18はボタン状の円形突起が貼り付く。19は口縁部に縦長の突起部が張り出す。口縁部には矢羽根状の沈線文が施文される。20は口縁部から大きく縦に張り出す深斜把手の一部と思われる。下部で二股に分かれ、そのまま波状口縁に至ると考えられる。両側面には矢羽根状の集合沈線にボタン状の小突起が付く。正面の二股の間と内面側の端部にも集合沈線が施

第40図 E区第1号住居跡遺物分布図



文される。21は横走る集合沈線の上に矢羽根状のモチーフが展開する。22~25は、集合沈線が帯状に横走るもので、24は無文部に縄文が残る。26~31は、縦位に区画される胴部片で、28・30・31は弧状に、29は縦位の矢羽根状モチーフを描く。32は半截竹管の内側で押し引き状に施文された浮線文を同心円状に描く。色調は17・18・21が明赤褐色、19・23・30・31が黒褐色、他は全て明黄褐色を呈し、焼成はいずれも良好である。胎土には砂粒、雲母片岩を多く含む。

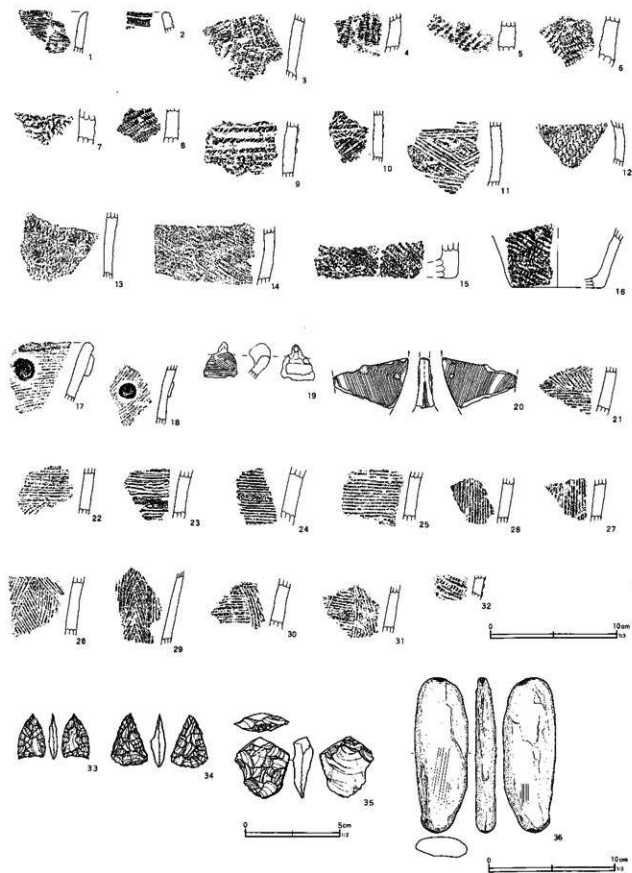
33・34は石織である。33は長さ2.8cm、幅1.9cm、厚

さ0.8cm、重さ2.97gを測る。石質はチャートである。34は長さ2.4cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ1.53gを測る。石質はチャートである。

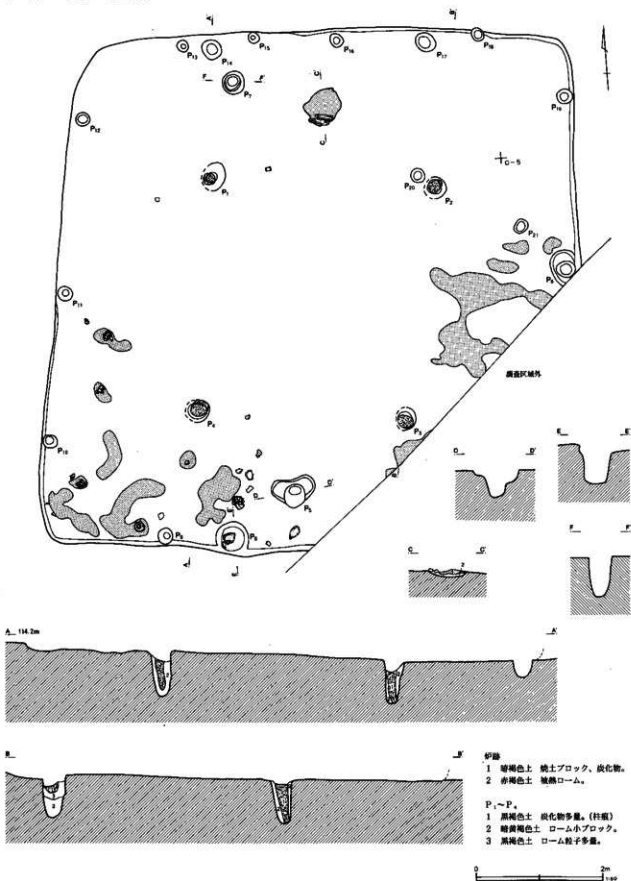
35は小型のスクレイパーで、側縁部には細かい2次加工が施される。長さ3.2cm、幅2.9cm、厚さ1.0cm、重さ7.84gを測る。石質はチャートである。

36は敲石である。両端部には敲打痕が観察される。長さ12.2cm、幅4.2cm、厚さ1.5cm、重さ130gを測る。石質は砂岩である。

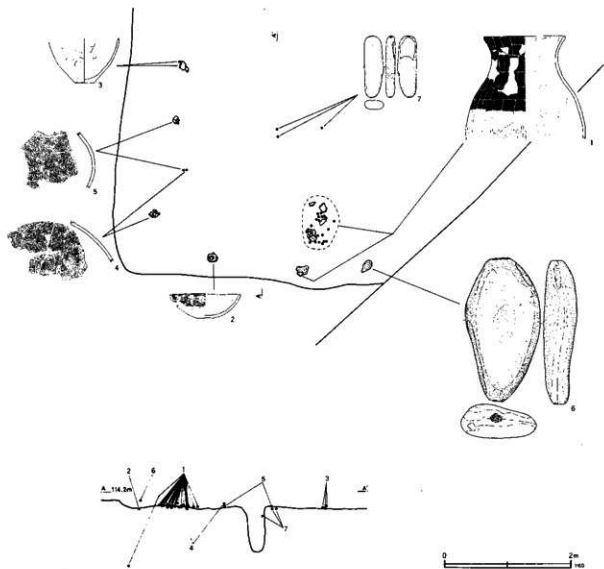
第41图 E区第I号住居跡出土遺物



第42図 E区第2号住居跡



第43図 E区第2号住居跡遺物分布図



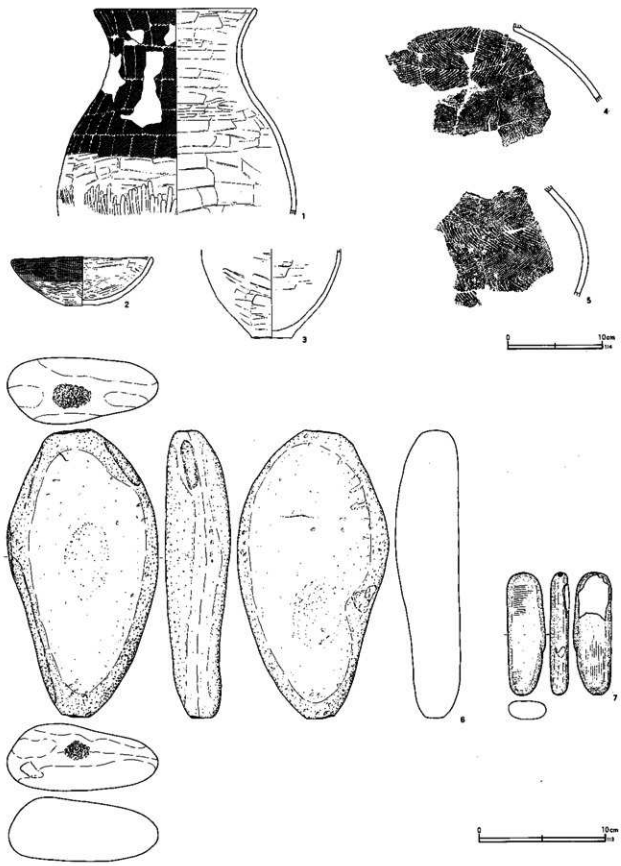
第2号住居跡 (第42・43図)

B・C-4・5グリッドに位置する。南東隅部が調査区域外にかかるが、ほぼ全容が把握できる。真北からやや東に振れた方位を主軸とする方形プランの住居跡である。主軸方位はN-6°-Eを測る。遺構の規模は、長辺7.9m、短辺7.4m、深さ10cmを測る。床面はほぼ平坦で、北西部でやや傾斜する。住居跡南半分の壁周辺の床面上には、炭化物とともに多量の焼土ブロックが検出された。炉跡はP₁とP₂を結んだ線と北壁との間に位置する。炉跡の南際には、棒状の河原石が2個置かれる。

主柱穴はP₁~P₄・P₂₀でP₂₀は後にP₂に建て換えられたものと思われる。P₅は段状の掘り込みを持ち、P₃・P₄との位置関係から、出入り口に関連するピットと思われる。ピットはこの他に、壁際に等間隔に位置する。

ピットの深さはP₁=68cm、P₂=67cm、P₃=77cm、P₄=70cm、P₅=44cm、P₆=51cm、P₇=33cm、P₈=37cm、P₉=18cm、P₁₀=38cm、P₁₁=37cm、P₁₂=20cm、P₁₃=30cm、P₁₄=26cm、P₁₅=22cm、P₁₆=32cm、P₁₇=38cm、P₁₈=41cm、P₁₉=27cm、P₂₀=38cm、P₂₁=14cmである。

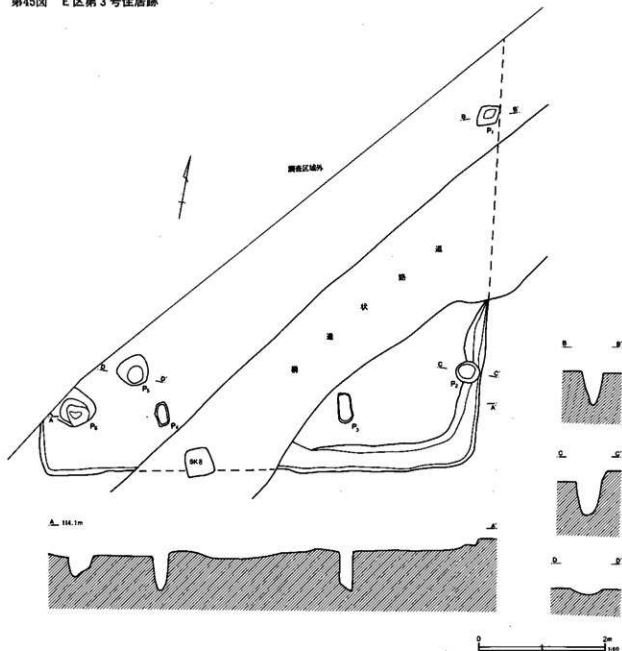
第44图 E区第2号住居跡出土物



E区第2号住居跡出土遺物観察表 (第44図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺	16.8	5.1	3.6 (4.3)	白片石	明褐	B	80	外面上半部赤彩
2	環	14.7			黒砂片石	明褐	B	90	
3	壺				白砂石	赤褐	B	50	
4	壺				白黒	明褐	B		
5	壺				黒片石	明黄褐	B		

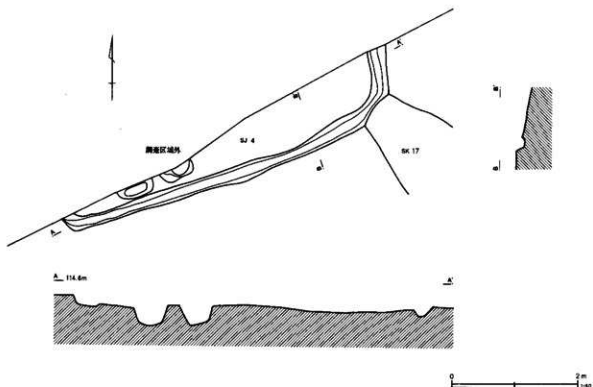
第45図 E区第3号住居跡



遺物は主に、南西部のP₁₁・P₄・P₈を結んだ線から南側の範囲に集中して出土した。ほとんどの遺物が焼土ブロックとともに、検出された。ほぼ床面上からの

出土と考えられる。出土遺物から古墳時代前期の住居跡であると推定される。

第46図 E区第4号住居跡



出土遺物 (第44図)

1はギョヶ谷式系の壺形土器である。胴部で最大径となり、頸部で緩やかに括れて口縁部が開く。外面には輪積み痕がみられず、口唇部と口縁から胴部上位にかけて同一原体によるLR縄文が施文される。胴下部には横方向の木口ナデ、さらに底部に向かって密に縦磨きされる。内面調整は横方向の木口ナデである。

2は坏で、口縁部が内彎しながら開き、口唇は丸くなる。器面調整は両面に密な縦磨きが施される。体部外面上半が赤彩される。

3～5は壺形土器である。3は胴部下半から底部に至るもので、器面調整には両面に粗い木口ナデが加えられる。4は壺の胴上部片である。頸部がくの字状に強く屈曲し、3段の縄文施文帯によって羽状縄文を構成する。下部無文部はよく磨かれる。5も壺の胴上部片である。4段の縄文帯を重ねて羽状縄文を構成する。

6は磨石である。両面に滑らかな磨り面がみられ、上下両端部には敲打痕が顕著で、敲石として併用されている。長さ22.6cm、幅11.8cm、厚さ4.8cm、重さ1.79

kgを測る。石質は泥岩である。

7は敲石で、上下両端部には敲打痕が認められる。表裏面は扁平Fでよく磨かれている。長さ9.7cm、幅3.0cm、厚さ1.4cm、重さ67gを測る。石質は泥岩である。

第3号住居跡 (第45図)

C-3グリッドに位置する。北側の大半が調査区域外に出るが、隅部を2ヶ所検出したことから方形の住居跡と推定される。SK 8と道路状遺構を構成する溝と重複するが、新旧関係は不明である。主軸方位はN-11°-Eを測る。

遺構の規模は、一辺の長さが7m、深さ14cmを測る。南東隅部では、幅の広い壁溝が検出された。主柱穴はP₁・P₂である。P₁・P₂は住居の壁際を巡るピットと思われる。P₁の壁面は被熱して焼けた痕が認められた。ピットの深さはP₁=52cm、P₂=52cm、P₃=56cm、P₄=57cm、P₅=8cm、P₆=33cmである。遺物は出土しなかった。住居跡の規模と覆土の状況から、SJ 2と同時期であると考えられる。

第4号住居跡(第46図)

B-5グリッドに位置する。北側の大半が調査区域外にかかるため、全容は不明である。SK17と重複するが、新旧関係は不明である。遺構の規模は、一辺の長さが5.5m、深さ12cmを測る。壁際には幅約25cmの壁溝がめぐり、ピット状の掘り込みが2基検出された。遺構の時期を示す遺物は出土しなかったが、住居跡の規模と覆土の状況から、S J 2と同時期であると考えられる。

第1号土壌(第47図)

D-3グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸0.9m、短軸0.7m、深さ65cmである。主軸方位はN-13°-Wを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は炭化物を含み、しまりの強い暗褐色土である。覆土中から、縄文時代前期後葉の土器が出土した。出土遺物と覆土の状況から、縄文時代前期の土壌と考えられる。

出土遺物(第49図)

1は地文縄文に半截竹管による横位と斜位の平行沈線が走る。やや膨らむ口縁部近くの破片であろう。諸磯b式土器である。色調は橙色で、焼成は良好、胎土には白色砂粒、金雲母を含む。

2~9は諸磯c式で、半截竹管による集合沈線文土器である。2は波状口縁の波頂部で、2ヶ所穿孔部がある。補修孔であろうか。3は平縁の口縁部である。4・5は集合沈線の縦区画内のモチーフである。6~8は集合沈線が帯状になる部分、9は底部いっぱいまで施文される。色調は9が明黄褐色、その他は褐色を呈し、焼成はいずれも良好である。胎土にはいずれも砂粒を含み、2・4・5・8は片岩を多く含む。

第2号土壌(第47図)

D-3グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.1m、短軸1.0m、深さ19cmである。主軸方位はN-57°-Wを測る。底面はやや凹凸があり、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は炭化物を含み、しまりの強い暗褐色土である。遺物は出土しなかったが、覆土の状況がSK1に共通することから、縄

文時代の土壌であると思われる。

第3号土壌(第47図)

D-3グリッドに位置する。平面形は円形であり、遺構の規模は、長軸1.2m、短軸1.1m、深さ38cmである。底面は平坦で、壁はまっすぐに立ち上がる。覆土はしまりのない黒褐色土である。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から近世以降の土壌と思われる。

第4号土壌(第47図)

D-3グリッドに位置する。南側が調査区域外にかかるが、方形の土壌と思われる。遺構の規模は、短辺0.7m、深さ20cmである。主軸方位はN-24°-Wを測る。底面は平坦であるが、壁面はしっかりせず、やや不安定である。覆土はしまりのない暗褐色土である。近世の青磁片が1点出土したが、小破片のため図示できない。出土遺物と覆土の状況から、近世以降の土壌と思われる。

第5号土壌(第47図)

C-D-3グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ19cmである。主軸方位はN-61°-Eを測る。底面は平坦である。壁はゆるやかに立ち上がる。覆土はしまりのない黒褐色土である。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から近世以降の土壌と思われる。

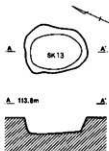
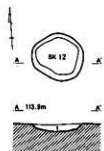
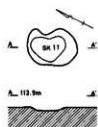
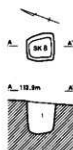
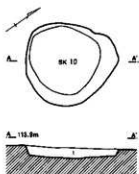
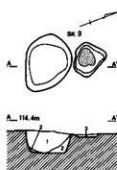
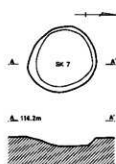
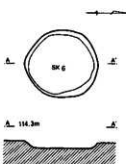
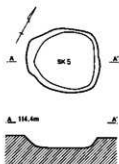
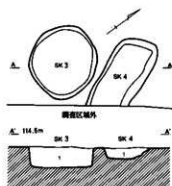
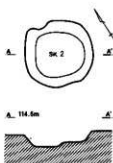
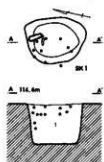
第6号土壌(第47図)

C-3グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ12cmである。底面は平坦である。壁はゆるやかに立ち上がる。覆土はしまりのない黒褐色土である。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から近世以降の土壌と思われる。

第7号土壌(第47図)

C-3・4グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.1m、短軸1.0m、深さ15cmである。底面は平坦となり、壁は北側では開いて立ち上がるが、南側では徐々に浅くなっていく。覆土はしまりのない黒褐色土である。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から近世以降の土壌と思われる。

第47図 E区土坑(1)



第1号土窟
1 暗褐色土 炭化物、ロームブロック少量。

第3号土窟
1 黒褐色土 ロームブロック。

第4号土窟
1 暗褐色土 ローム小ブロックわず。

第5号土窟
1 黒褐色土 炭化物、ロームブロックわず。

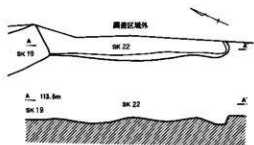
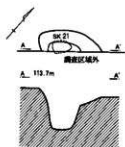
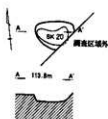
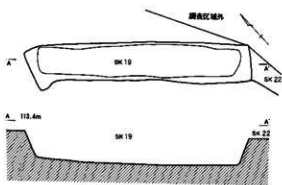
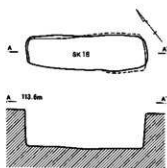
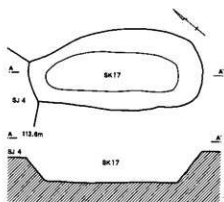
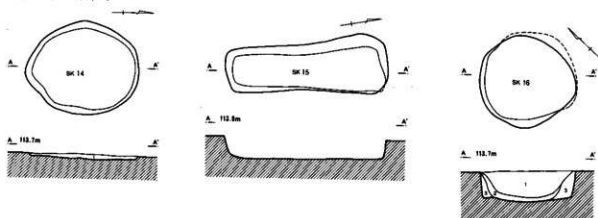
第9号土窟
1 暗褐色土 よごれたローム土。
2 黄色土 ロームブロック。
3 暗褐色土 ローム粒子、焼土ブロック。

第10号土窟
1 暗褐色土 炭化物、ローム粒子多量。

第12号土窟
1 暗褐色土 砂粒多量。



第48图 E区土壤(2)



第 14 号土壤

1 暗黄褐色土 □—△土主体。

第 16 号土壤

1 暗黄褐色土 砂粒、□—△粒子多量。

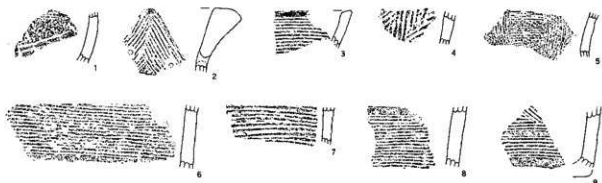
2 灰褐色土 黑色粒子多量。

3 黄褐色土 □—△粒子多量。

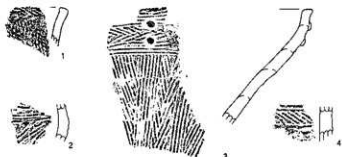


第49图 E区土坑出土遗物

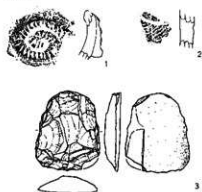
SK1



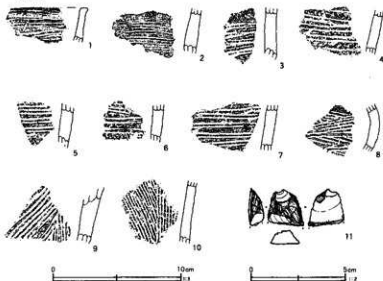
SK10



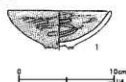
SK16



SK13



SK8



E区第8号土坑出土遗物观察表 (第49图)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色调	烧成	残存率	出土位置・備考
1	高坏	(10.8)			白黑雲片	明陶	B	50	内外面赤彩

第8号土壌 (第47図)

C-3グリッドに位置する。S J 3、道路状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は一辺0.4 mの方形の土壌である。深さは55cmを測る。底面はゆるやかにくぼみ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土である。覆土から高坏の破片が出土していることから、古墳時代前期の土壌と思われるが、S J 3の南壁際に位置することを合わせると、S J 3に伴うピットであった可能性もある。

出土遺物 (第49図)

1は高坏の体部の破片である。口縁が内凹しながら開く器形で、器面調整は内外面ともによく磨ききされる。内外面ともに赤彩される。

第9号土壌 (第47図)

D・E-2グリッドに位置する。平面形は不定形であり、北側には、浅い皿状の落ち込みが伴う。深さは36cmである。底面は平坦となり、壁はほぼまっすぐに立ち上がる。覆土はよこれたローム土を主体とする暗黄色土である。北側の浅い落ち込みからは焼土ブロックが検出された。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から近世以降の土壌と思われる。

第10号土壌 (第47図)

B-4・5グリッドに位置する。平面形はくずれた楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.5m、短軸1.3m、深さ20cmである。覆土はしまりの良い暗黄褐色土である。覆土中から縄文時代前期後葉の土器が出土した。出土遺物と覆土の状況から、縄文時代前期の土壌と考えられる。

出土遺物 (第49図)

1は縄文早期の捻糸文系土器である。口唇部と口唇下に約1cmの無文部をおいて縦位に捻糸文を施文する。色調は明黄褐色、焼成は良好である。胎土には片岩、細かい雲母を含む。

2-4は、縄文前期後葉の諸磯C式土器である。集合沈線施文で、3は口縁部に横位の矢羽根状文に2個1対の小突起を配し、胴部には縦線と斜線、縦位の矢羽根状文が展開する。胴部で大きく開いて口縁部で立

ち上がる器形で、口唇部は平坦になる。色調は2・3が橙色、4が黄橙色を呈し、焼成はいずれも良好である。胎土には砂粒、細かい片岩を含む。

第11号土壌 (第47図)

B-5グリッドに位置する。平面形は不定形であり、遺構の規模は、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ50cmである。覆土はしまりの悪い茶褐色土である。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から近世以降の土壌と思われる。

第12号土壌 (第47図)

B-5グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ14cmである。主軸方位はN-86°-Wを測る。底面は浅く皿状にくぼむ。覆土は砂粒を多く含むしまりの悪い暗茶褐色土である。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から近世以降の土壌と思われる。

第13号土壌 (第47図)

B-5グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ25cmである。主軸方位はN-25°-Wを測る。底面はほぼ平坦となり、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は黒色土である。覆土中から縄文時代前期後葉の土器が多く出土した。出土遺物からこの時期の土壌であると思われる。

出土遺物 (第49図)

1-10は、縄文前期後葉の諸磯式土器である。1-7は、半截竹管による平行沈線が条間を不規則にしてやや粗く施文される。地文は無文である。1は口縁部でやや外傾し、口唇が平坦になる。8-10は、諸磯C式土器で、集合沈線が密に施文される。色調は1・3・5・7が明黄褐色、2・4・6・9・10が黄褐色、8が暗赤褐色を呈する。焼成はいずれも良好である。胎土には砂粒、片岩を含む。

11はスクレイパーである。下部を欠損する。長さ1.8cm、幅1.9cm、厚さ0.7cm、重さ2.30gを測る。石質は黒曜石である。

第14号土壇 (第48回)

A・B-5グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.8m、短軸1.5m、深さ8cmである。主軸方位はN-1°-Eを測る。底面は平坦で浅い。覆土はローム土を主体とするしまりの良い暗黄褐色土である。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から縄文時代の土壇と考えられる。

第15号土壇 (第48回)

B-5・6グリッドに位置する。平面形は方形であり、遺構の規模は、長辺2.6m、短辺0.7m、深さ38cmである。主軸方位はN-9°-Eを測る。底面は平坦となり、壁はまっすぐに立ち上がる。覆土はしまりの悪い黒色土であり、一括埋め戻した土と思われる。覆土から、近世の素焼土器片が1点出土した。出土遺物と覆土の状況から、近世以降の土壇であると思われる。

第16号土壇 (第48回)

A-5・6グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸1.5m、短軸1.4m、深さ50cmである。主軸方位はN-42°-Wを測る。底面はほぼ平坦となり、壁はまっすぐに立ち上がる。覆土はローム粒子を多く含んだ、しまりの良い暗茶褐色土である。覆土から縄文中期の土器が出土した。出土遺物と覆土の状況から、縄文時代中期の土壇と思われる。

出土遺物 (第49回)

1は口縁部近くに付く渦巻き隆帯で隆帯上に連続刻みが入る。勝坂式土器である。色調は橙褐色で、焼成は硬くしまり、胎土には砂粒を含む。

2は地文に縄文が施文され、弧状に沈線が引かれる。縄文中期中葉の土器と思われる。暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。砂粒、細かい雲母を含む。

3はスクレイパーである。長さ6.3cm、幅4.6cm、厚さ1.3cm、重さ46.87gを測る。石質は泥岩である。

第17号土壇 (第48回)

A-5・6グリッドに位置する。S J 4と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は長楕円形であり、遺構の規模は、長軸2.8m、短軸1.3m、深さ56cmである。主軸方位はN-38°-Wを測る。底面はほぼ平坦

で、壁はまっすぐに開いて立ち上がる。覆土はロームブロックを多く含んだしまりの悪い暗黄褐色土であり、短期に埋め戻された状態である。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から近世以降の土壇と思われる。

第18号土壇 (第48回)

A・B-6グリッドに位置する。平面形は方形であり、遺構の規模は、長辺1.9m、短辺0.5m、深さ61cmである。主軸方位はN-51°-Wを測る。底面は平坦となり、壁はまっすぐに立ち上がる。覆土はしまりの悪い黒色土で、一括埋め戻した土と思われる。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から近世以降の土壇と思われる。

第19号土壇 (第48回)

A-6グリッドに位置する。SK22と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は方形であり、遺構の規模は、長辺3.6m、短辺0.6m、深さ59cmである。主軸方位はN-47°-Wを測る。底面は平坦となり、壁はまっすぐに開く。遺物は出土しなかったが、遺構の規模と形状から近世以降の土壇と思われる。

第20号土壇 (第48回)

B-6グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、遺構の規模は、長軸0.6m、短軸0.4m、深さ14cmである。主軸方位はN-83°-Wを測る。底面は平坦となる。遺構の時期は不明である。

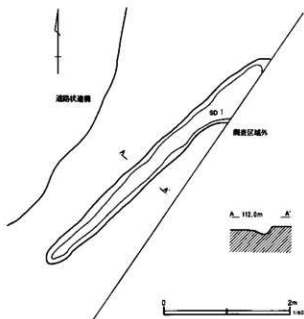
第21号土壇 (第48回)

B-6グリッドに位置する。平面形は半分が調査区域外にかかるが、楕円形になるものと思われる。深さは68cmである。底面は円形になり、ピット状に落ち込む。遺構の時期は不明である。

第22号土壇 (第48回)

A-6グリッドに位置する。SK19と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は方形になるものと思われる。深さ24cmを測る。主軸方位はN-23°-Wを測る。底面は凹凸が激しい。遺物は出土しなかったが、遺構の規模と形状から近世以降の土壇と思われる。

第50図 E区第1号溝



第23号土壇 (第48図)

B-5グリッドに位置する。平面形は円形であり、遺構の規模は、直径0.4m、深さ15cmである。底面は平坦となる。遺構の時期は不明である。

第1号溝 (第50図)

E-2グリッドに位置する。北東-南西方向に、長く伸び、北東側は幅を広げながら、調査区域外にかかる。全長2.3m、幅1.1m、深さ10cmを測る。溝の断面は浅いU字形となる。出土遺物はなく、溝の時期、性格は不明である。

道路状遺構 (第51図)

B-4グリッドから調査区南部のG-1グリッドにかけて、北東-南西方向にややカーブしながら、溝、段差、ビット列が伸びる。北部では、浅い溝の東側に段差が並行する。段差は途中で幅広く浅い溝状になって伸びる。

ビットは、溝の底面と壁に重複して位置する。南部では、ビットが明確な列となって伸びており、2-3条の列になって、互いに並行する。ビットは径20-40cm大のものが大半で、大きいものは60cm大である。ビットの深さは30-40cm大のものが多い。

溝の底面には径5-30cm大の河原石が多量に出土

しており、A区の道路状遺構と共通する。中央部での溝から段差までの幅は3.6cmとなり、これが、道路状遺構の幅になるものと思われる。土層断面から踏み固められた状況は、明確には認められなかったが、長期にわたって形成されている状況が観察されたことから、道路状遺構と半断される。溝は側溝として利用されたものと思われる。

遺構の時期としては、溝やビットの覆土から近世の陶器片、染付の破片などが出土したことから、江戸時代以降であると考えられる。

ビット (第52・53図)

E区では、単独のビットは19基検出された。これらのうち、調査区中央部に分布するP₁-P₃・P₁₇・P₁₈の5基は、位置的に道路状遺構に伴う可能性もある。特にP₁-P₃は、覆土の状況が、近世以降の土壌と共通しており、道路状遺構のものと思われる。調査区北部に分布するP₅-P₁₆の12基はA-6グリッドに集中して位置しており、住居跡の可能性もあるが、出土遺物もなく、遺構の時期は不明である。

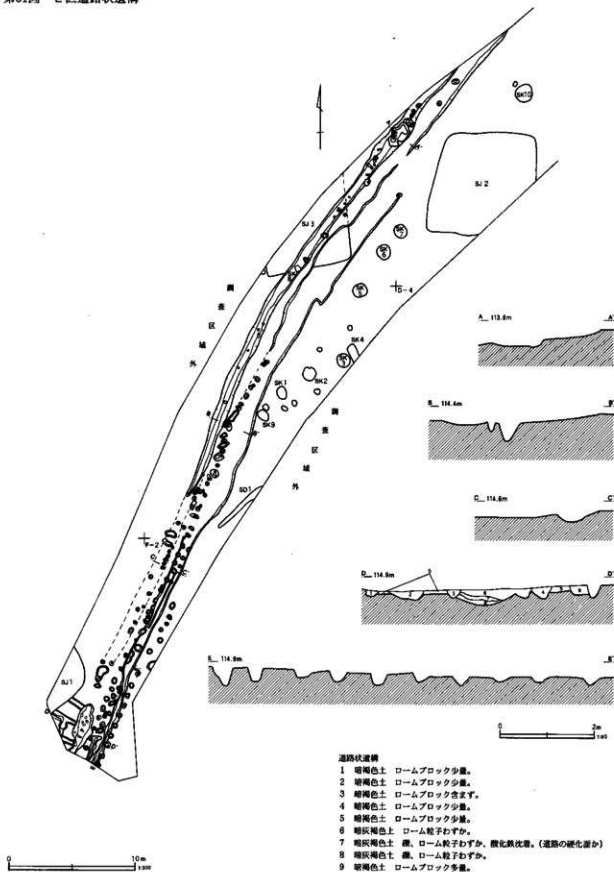
グリッド出土遺物 (第54図)

1・2は加曾利E式土器である。1は太い原体の縄文が施文される。2は5本1組の櫛状文が縦に施文される。2点とも色調は明橙色、焼成は良好である。胎土には砂粒を多く含む。3-5は、称明寺式土器である。3は口唇下内面が凹線状にくぼみ、外面には口縁部に無文帯、沈線による区画文を配する。区画内には先の尖った細い刺突文が付く。4は沈線による区画内に列点文が施文される。5は浅い2本の沈線は平行して懸垂する。3点とも色調は明黄褐色、焼成は良好で、胎土には細かい片岩を含む。

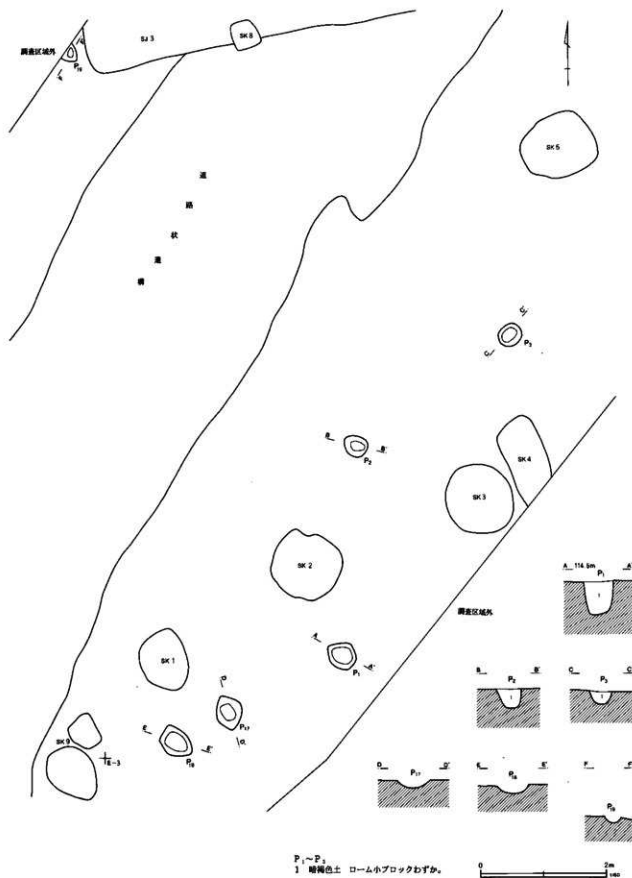
6は小型の磨製石斧の先端部である。長さ2.9cm、幅は推定3.0cm、厚さは推定1.0cm、重さ7.51gを測る。石質はチャートである。

7は石錐である。長さ5.4cm、幅4.8cm、厚さ1.2cm、重さ26.75gを測る。石質はチャートである。

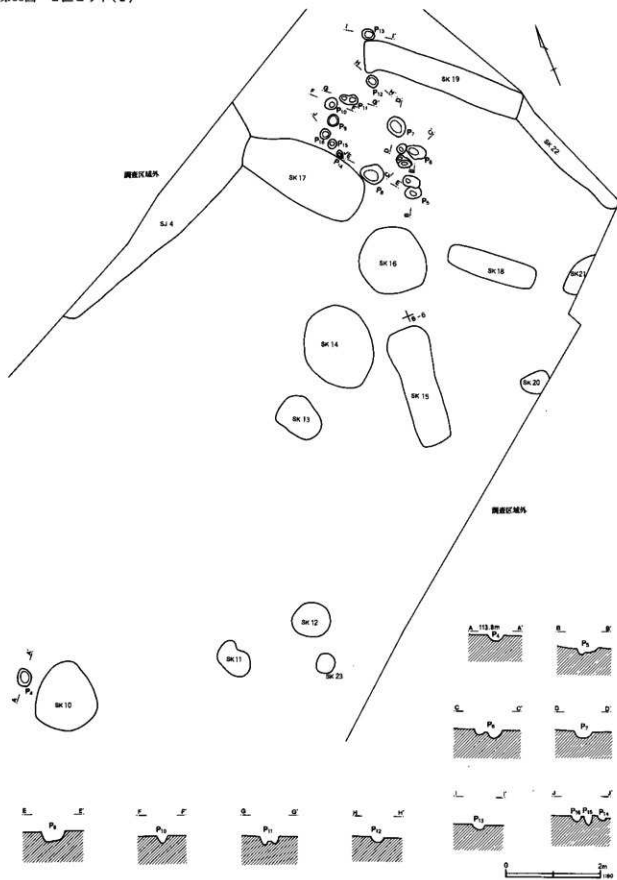
第51図 E区道路状遺構



第52図 E区ビット(1)



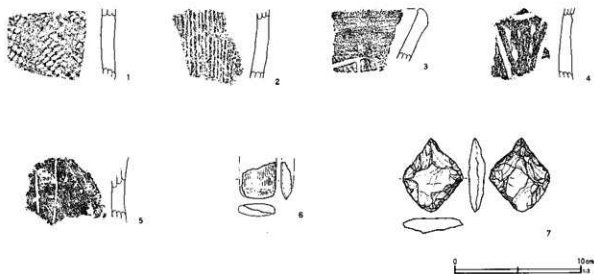
第53図 E区ビット(2)



E区ピット観察表

遺構名	グリッド	平面形	直径・長さ	深さ	覆土	備考
P ₁	D-3G	楕円形	48cm	53cm	暗褐色土	近世以降
P ₂	D-3G	楕円形	38	32	暗褐色土	近世以降
P ₃	D-3G	楕円形	38	23	暗褐色土	近世以降
P ₄	B-4G	楕円形	34	12		
P ₅	A-6G	不定形	48	21		
P ₆	A-6G	不定形	64	24		
P ₇	A-6G	楕円形	40	15		
P ₈	A-6G	楕円形	50	21		
P ₉	A-5-6G	円形	24	不明		
P ₁₀	A-6G	円形	26	16		
P ₁₁	A-6G	不定形	38	20		
P ₁₂	A-6G	楕円形	24	11		
P ₁₃	A-6G	円形	24	14		
P ₁₄	A-5G	楕円形	18	13		
P ₁₅	A-5G	円形	20	22		
P ₁₆	A-5G	円形	23	15		
P ₁₇	D-3G	楕円形	48	13	暗褐色土	
P ₁₈	D-3G	楕円形	52	14	暗褐色土	
P ₁₉	C-2G	楕円形	28	12	暗褐色土	
P ₂₀	C-4G	円形	24	38		
P ₂₁	C-5G	楕円形	22	14		

第54図 E区グリッド出土遺物



6. 遺構新旧対照表

A区

遺構名	旧名	グリッド	時期	
第1号住居跡	第2号不明遺構	G-2	中世	
道上1号墳		C-3・4、D-3・4	古墳時代	
第1号土壌		H-2	中・近世	
第2号土壌		H-2	中世	
第3号土壌		第10号土壌	H-2	中・近世
第1号并戸跡			第2号并戸跡	B-3・4
第3号溝		F-2-3		不明
第1号雁立柱建物跡		G・H-2	中世	
第2号雁立柱建物跡		H-2	中世	
石組遺構		C-3	不明	
道路状遺構		F・G-3、H-2・3、I-2	近世	

B区

遺構名	旧名	グリッド	時期
第1号土壌	第5号不明遺構	B-3	中世以降
第2号土壌		A・B-3	不明
第3号土壌		B-3	不明
第4号土壌		D-1・2	古墳時代
第5号土壌		D-1・2	古墳時代
第1号溝		B-2-C-2・3	不明
粘土探掘跡		B-2・3、C-1・2、D-1	古墳時代

C区

遺構名	旧名	グリッド	時期	
村俵3号墳	第2号墳	I・J-2	古墳時代	
第1号土壌	第14号土壌	C-5・6	中・近世	
第2号土壌		C・D-6	中・近世	
第3号土壌		C-5・6	中・近世	
第4号土壌		C-5	中・近世	
第5号土壌		D-5	不明	
第6号土壌		E・F-4	中・近世	
第7号土壌		F-3・4	中・近世	
第8号土壌		G-3	中・近世	
第9号土壌		G・H-3	中・近世	
第10号土壌		G-3、H-2・3	中・近世	
第11号土壌		H-3	中・近世	
第12号土壌		H-3	中・近世	
第13号土壌		J-1	中・近世	
第14号土壌		第15号土壌	G-3・4	不明
第15号土壌		第16号土壌	D-5	不明
第16号土壌		第17号土壌	G-3	中・近世
第17号土壌		第18号土壌	F-3	中・近世
第18号土壌		第19号土壌	B・C-6	中・近世
第19号土壌		第20号土壌	B-6	中・近世
第20号土壌		第21号土壌	B-6	中・近世
第21号土壌		第22号土壌	B-6	中・近世
第22号土壌		第23号土壌	B-6	中・近世
第23号土壌		第24号土壌	B-6	中・近世
第24号土壌		第25号土壌	B-6、C-5・6	中・近世
第25号土壌		第26号土壌	G-3	中・近世
第1号溝		I-2-J-2	不明	
SX1		D・E-5	中・近世	

D区

遺構名	旧名	グリッド	時期
第1号住居跡		C-2	古墳時代前期
第2号住居跡		B-2	古墳時代前期
第1号土塚		B-1・2, C-1・2	不明
第2号土塚		C-1	不明
第3号土塚		C-1	不明
道路状遺構		A-2, B-1・2, C-1	江戸時代以降

E区

遺構名	旧名	グリッド	時期
第1号住居跡		F・G-1	縄文時代前期
第2号住居跡		B・C-4・5	古墳時代前期
第3号住居跡		C-3	古墳時代前期
第4号住居跡		B-5	古墳時代前期
第1号土塚		D-3	縄文時代前期
第2号土塚		D-3	縄文時代
第3号土塚		D-3	近世以降
第4号土塚		D-3	近世以降
第5号土塚		C・D-3	近世以降
第6号土塚		C-3	近世以降
第7号土塚		C-3・4	近世以降
第8号土塚		C-3	古墳時代前期
第9号土塚		D・E-2	近世以降
第10号土塚		B-4・5	縄文時代前期
第11号土塚		B-5	近世以降
第12号土塚		B-5	近世以降
第13号土塚		B-5	縄文時代前期
第14号土塚		A・B-5	縄文時代
第15号土塚		B-5・6	近世以降
第16号土塚		A-5・6	縄文時代中期
第17号土塚		A-5・6	近世以降
第18号土塚		A・B-6	近世以降
第19号土塚		A-6	近世以降
第20号土塚		B-6	不明
第21号土塚	第19号土塚	B-6	不明
第22号土塚		A-6	近世以降
第23号土塚		B-5	不明
第1号溝		E-2	不明
道路状遺構	第1・2号溝、櫛列	B-4~G-1	江戸時代以降

V 結語

1. 今回の調査の成果について

今回の調査では、長沖古墳群の遺跡範囲を南北に縦断するように、A-E区に5箇所に調査区を設定した。このため、調査区の北端から南端までが約570mにおよび、調査地点が大きく異なる。検出された遺構や遺物にも、各調査区で違いが見られ、全体としては、旧石器時代から近世までの各時代のものが見られる。ここでは、各時代順に今回の調査の成果について簡単に触れておく。なお、今回検出された古墳跡については、次節で詳しく触れることにする。

今回、C区で検出された村後3号墳の周溝内から、ナイフ形石器が1点出土した。周溝覆土からの出土のため、詳細を明らかにすることができないが、今後旧石器が検出される可能性が期待できる。周辺の遺跡では、女堀川を挟んだ本庄台地の古井戸遺跡でナイフ形石器が収集されている(栗島1989)ほか、児玉町城の内遺跡、同町下原北遺跡でナイフ形石器が出土している(児玉郡市文化財担当者会1992)。

縄文時代の遺構では、E区で縄文前期の住居跡が1軒、縄文前期の土壇3基、縄文中期の土壇1基が検出された。E区第1号住居跡は、覆土内から諸磯式土器が出土しているが、数量的に主体となるのは諸磯式土器の集合沈線土器である。出土土器から窺える特徴は、半截竹管を数本束ねた集合沈線にボタン状の突起が貼り付くもの(第41図17・18)や、口縁部内側に耳状の突起が付くもの(19)がある。口縁部近くには横位に矢羽根状沈線が施文されるもの(19-21)、胴部には縦位区画による弧状、矢羽根状モチーフが施文されるもの(28-31)が含まれる。周辺の遺跡では、群馬県多野郡吉井町の黒熊第5遺跡3号住居出土土器(群馬県1988)に類例を求めることができる(第55図)。第41図20は深鉢把手の一部であり、上記類例中の大波状把手を持つ深鉢に共通するものと思われる。

E区第1号土壇、E区第10号土壇出土土器も、E区第1号住居跡のものとはほぼ同時期的な特徴を示す土器

と思われる。特に第10号土壇出土土器(第49図SK10の3)は、土器全体の特徵がわかる唯一の資料である。口縁部から胴部にかけてキャリバー形となり、口縁部文様帯は、上下各4本1組の横線帯に挟まれて矢羽根状沈線になり、ボタン状の小突起が一対で縦に貼り付く。胴部は縦位区画となり、矢羽根状文と斜線文が繰り返される。口縁部に横位矢羽根状文、胴部に縦位斜線文と矢羽根状文という文様構成では、群馬県群馬郡箕郷町の中善地・宮地遺跡SB2号住居出土土器(群馬県1988)に類例がある(第55図)。口縁部のボタン状突起は刺突されるが、2個対になって縦に貼り付く。埼玉県寄居町東国寺東・増善寺遺跡第1号住居出土土器(今関他1993)は、破片資料だが同様の文様構成となり、ボタン状小突起が付く(第55図)。

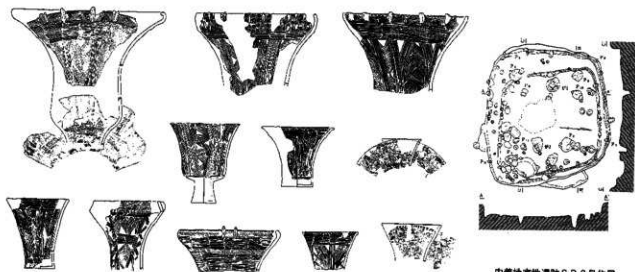
この他、諸磯式土器を出土する周辺の遺跡では、群馬県多野郡上野村の新羽今井平遺跡(群馬県1988)、埼玉県内では上里町金久保・内出遺跡(丸山他1987)、寄居町ゴシン遺跡(市川・中村他1978)、寄居町大町遺跡(井上1996)などがある。黒熊第5遺跡3号住居、中善地・宮地遺跡SB2号住居、東国寺東・増善寺遺跡第1号住居は方形または隅丸方形の住居であることから、長沖古墳群E区第1号住居跡も、同形態の住居になるものと思われる。

次に、古墳時代前期の遺構では、D・E区から住居跡が5軒検出された。このうちD区第1号住居跡、D区第2号住居跡、E区第2号住居跡からは、実測可能な遺物が出土している。D区第1号住居跡出土土器は、頸部がくの字状に屈曲する壺(第35図1)、脚部に円孔のある高環(2)、そして破片ではあるが器台(5)が付くことなど、古墳時代前期の特徴を十分に備えている。D区第2号住居跡出土土器は、3点とも台付甕の脚台部で、S字状口縁台付甕の特徴である端部内面の折り返しが見られることから、外来系土器搬入以降の段階にあることを示している。2軒の住居は出土土器

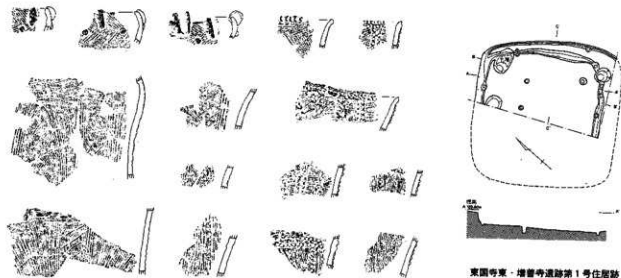
第55図 周辺遺跡の出土土器



黒熊第5遺跡3号住居



中野地宮地遺跡SB2号住居



東園寺東・増善寺遺跡第1号住居跡

の特徴からも、調査区内における位置関係や住居跡の形態からも、大きな時期的隔ちを見ることはできない。

E区第2号住居跡は、一辺が7mを超える大型住居であり、覆土内の炭化物や焼土ブロックの検出状況から焼失住居と考えられる。遺物は焼土ブロックとともに、ほぼ床面上から出土していることから、破片も含めて一括遺物として捉えることができる。吉ヶ谷式系の壺(第44図1)は、横位に規則正しく縄文が施文され、口唇部にも施文されるが、口縁部から頸部にかけての輪積み痕は見られない。また、他の壺形土器の破片(4)では、頸部が屈曲するものが見られる。一方で、脚部のつかない坏(2)は、弥生後期からの特徴を残すものと思われ、土器の組成から見れば、D区の2軒の出土土器と比べ、やや古い要素も認められる。

上記の住居跡が検出されたD・E区は、北西方向の谷に向かって緩やかに傾斜する台地上に位置していることから、周辺部一帯に古墳時代前期の集落跡が分布するものと思われる。調査区の東方の長沖久保遺跡(第2図3)では、住居跡から吉ヶ谷式系の壺が出土しており(恋河内1984)、詳細は明らかではないが関連する時期の遺跡と思われる。

中世の遺構では、A区から掘立柱建物跡2棟と住居跡1軒が検出された。A区第1号掘立柱建物跡は内側に土壌が1基伴うものと見られ、土壌内からは15世紀のものと思われる土師器皿が出土している。他の遺構も並びが同じため、同時期の関連する遺構群として把握できる。

今回の調査では、3箇所の調査区から道路状遺構が検出された。これらは、A・D・E区から検出され、D・E区のもの位置的に同一の遺構である。A区の

ものも伸びる方向が同一のため、3箇所同じ1本の道路状遺構としてつながる可能性が高い。これらの遺構の特徴としては、数条の溝状または段差状に伸び、溝内には河原石が多量に散在する。溝に重複または側縁部に沿うようにピットが多量構築され、D・E区ではピットが一定の間隔で、柵列状に並ぶことなどがあげられる。D・E区ではピットや溝状の落ち込みの中から近世陶器や染付の破片が出土したことから、江戸時代以降に構築されたものと考えられる。

周辺遺跡の中で、特徴が共通する近世の溝には、壱丁田遺跡第7号溝跡があげられる(恋河内1998)。この溝は中世の溝跡や井戸跡を切って構築されていて、幅50~70cm、深さ15cmの規模で湾曲して伸びる。溝の上面には長さ15cm前後の扁平な石と、小さな礫を敷き詰めている。今回検出された道路状遺構と比較して、礫の検出状況がやや整然としているものの、溝の規模と上面に礫が検出されることに共通点が見られ、示唆的である。この溝跡の時期は、覆土中から染付碗などの破片が少量出土したことから、近世後半以降としている。

以上、今回の調査で検出された遺構と遺物について、各時代順に見てきたが、各調査区の立地と検出される遺構とに関連性が見られることも、遺跡の特徴のひとつにあげられよう。すなわち、河岸段丘面にあたるA区では中世の集落跡、西側に谷を望む台地面であるC区では中・近世の土壌群、調査区の中で最も標高が高く、北西方向の谷への緩斜面であるD・E区では、縄文時代前期の住居と土壌、古墳時代前期の集落跡、中・近世の土壌群といった傾向が窺える。(第56図)各時代によって、台地の利用状況に違いが見られるということもできる。

2. 長沖古墳群の性格と特徴

長沖古墳群は、埼玉県北端部の児玉郡児玉町長沖に所在する総数約180基を越す大規模群集墳である。小山川（旧身馴川）の北岸に広がる河岸段丘の低位面とそれに接する台地上に広く展開しており、南北500m、東西1500mの広範囲に分布している。

ここでは今回の調査で検出された2基の古墳跡の古墳群内における編年的位置づけを目的に、過去の調査成果から古墳群の形成過程を概観し、当古墳群の性格と特徴について若干の検討を試みたい。

(1) 過去の調査と長沖古墳群の概要

長沖古墳群に関する最も古い記録は、明治28年4月11日に秩父地方の探検に出た阿部正功・大野延太郎・鳥居龍藏による児玉町梅原所在古墳群の探査報告が紹介されており、往時の古墳群の様子を知ることができる（阿部他1895、塩野1999）。

昭和26年に刊行された『埼玉県史』によると児玉町金屋地区には152基の古墳の所在が確認されており、長沖・高柳地区には5基の前方後円墳を含む136基の古墳が存在していた（埼玉県1951）。その後、盗掘や耕作等による破壊を受け、消滅してしまった古墳も相当数にのぼっている。

本格的な考古学的調査としては、昭和48年に実施された本庄高等学校考古学部による十兵衛塚古墳（長沖79号墳）の測量調査が挙げられる（本庄高等学校考古学部1975）。調査の結果、全長37mを測る前方後円墳で、埴輪を有することが判明した。主体部はすでに盗掘を受け、片袖型と推定される横穴式石室を有していたと伝えられ、築造時期は6世紀後半でも古い段階と考えられている。

続いて、昭和51年度から昭和54年度にかけて児玉南土地区画整理事業に伴って、2度の分布調査と5次にわたる調査が実施された。それにより157基の古墳の所在が明らかにされ、そのうちの22基の古墳が調査された（菅谷他1980）。同じく、環状1号線建設に伴って

昭和51年と昭和58年の2次にわたり7基の古墳が調査されている（恋河内1984）。

その後も小規模開発に伴う調査が相次ぎ、児玉町教育委員会により、さらに20基を越す新規発見の古墳跡などが調査され、大きな成果が挙げられている。

平成2年には埼玉県教育委員会が実施した古墳詳細分布調査の一環として長沖157号墳が学術調査され、黒斑を有するB種横穴を施した円筒埴輪片が出土し、古墳群の形成初期の具体的な内容が明らかにされている（県立さきたま資料館1994）。

このほかに長沖古墳群から出土したと伝えられる鉄製楕円鏡板付替（関・宮代1988）など、数多くの古墳出土遺物が知られている。

(2) 今回の調査の概要

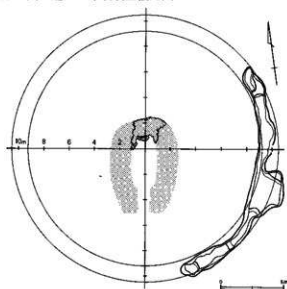
平成7年度に実施された県道秩父児玉線の建設に伴う発掘調査によって、古墳跡が遺跡南側の河岸段丘の低位面にあたるA区と台地上の平坦面に所在するC区からそれぞれ検出されている（註1）。

道上1号墳

道上1号墳は、河岸段丘の低位面に所在するA区の北側に位置し、閉塞等により墳丘の大半が破壊され、周溝と横穴式石室の一部が検出されただけであった。墳丘の北側には自然地形の埋没谷が湾入し、墳丘構築に傾斜地を利用する特徴が認められた。周溝は東半分のみ巡らし、石室の開口方向にあたる南側では途切れ、周溝の内径から墳丘径約19.2mの円墳に復元することができる。

横穴式石室を主体部としているが、馬蹄形に石列を巡らした石室控積みの基底部分がわずかに遺存していただけで、石室の規模・平面形などの細部の状況は不明である。しかし、神川町青柳古墳群における調査で指摘されているように、古墳の築造にあたっては、設計上の長さの単位があり、これに基づいて石室や墓石などの位置が設定されていたことが容易に想定すること

第57図 道上1号墳墳丘復元図



ができる(田村・金子1997)。そこで、同様の操作により本古墳における「墳丘の設計」を復元すると、石室奥壁より内側約1mの位置に円を中心をおいて墳丘径を決定していたことが読み取れる(第57図)。ただし、石室各部の規模が不明であるため、基準長の算出や各部の比例関係などについては明確でない。また、石室の平面形態に関しては土積の残存状況から胴張りプランであった可能性が強いが、断定はできない。

周溝から土師器環、須恵器壺、円筒埴輪、形象埴輪などの破片が少量出土している。このうち円筒埴輪は全体の器形の分かるものはないが、胎土に結晶片岩・雲母・白色針状物質・赤色粒子等の特徴的な混和材を含む一群が確認された。同様の胎土特性を示す円筒埴輪が、区画整理事業に伴う既調査古墳からも出土しており、群馬県藤岡市本郷埴輪窯から供給された可能性が指摘されている(井口1997)。

形象埴輪には、人物・鞍・盾・家などの破片が認められた。このうち鞍形埴輪の背板には弧線などの線刻文が認められ、寄居町箱石1号墳の鞍形埴輪に類似しており(西井他1999)、製作技法や胎土の特徴から円筒埴輪と同様に本郷埴輪窯群との関連が想定される。

道上1号墳の築造時期については、出土した円筒埴輪の形態的特徴や形象埴輪の様相から6世紀後半でも新しい段階に比定される。また、神流川を挟んで対岸

にあたる群馬県藤岡市周辺と児玉地域は、模様積石室の共通の分布圏を形成するだけでなく、本郷埴輪窯の供給圏に含まれ、6世紀における樹立埴輪の一定の割合を占めていたことが埴輪の需給関係の分析から判明しており、両地域間の密接な交流が想定される。

村後3号墳

村後3号墳は、台地上に所在するC区南側に位置し、周溝の一部が検出された。主体部は調査区外に位置しているため詳細は不明である。周溝は全周せず掘り込みが浅く、やや不整形を呈する。

遺物がまったく出土していないため、築造年代を特定することは困難であるが、埴輪をもたないことや周溝の形態が明確でないことから7世紀代に下がる可能性が大きい。

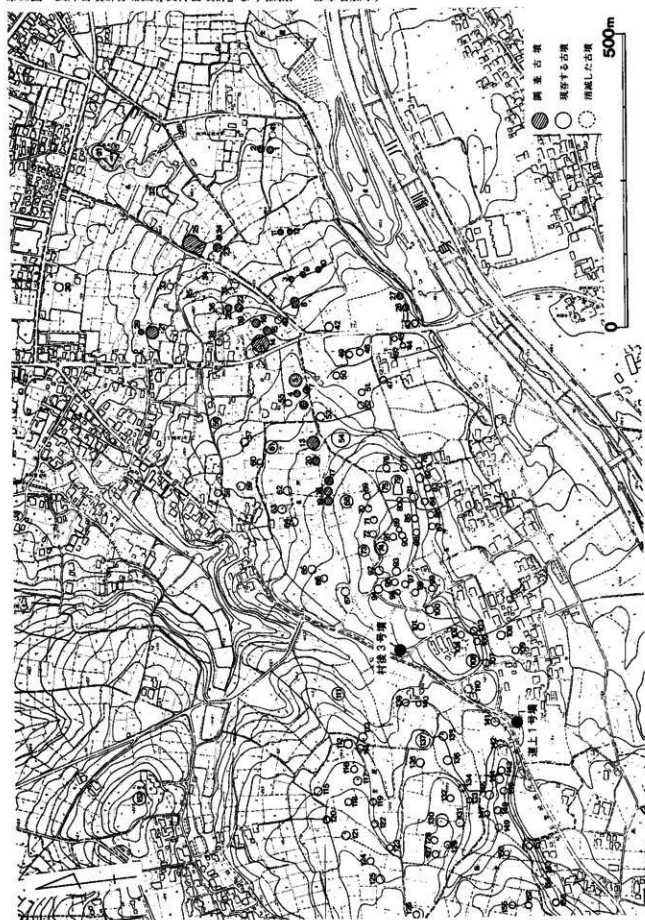
(3) 長沖古墳群の分布と群集構造

長沖古墳群の分布は、南の丘陵地帯より続く洪積台地上に所在するものと、台地の南を東流している小山川によって形成された河岸段丘上に所在するものに大きく区分することができる(第58図)。また、地形的には現在県道秩父児玉線が通っている古墳群の所在する台地を北から分断するように大きく湾入する谷を境にして、便宜的に西側を「高柳支群」、東側を「長沖支群」と呼称し、両者を総称する場合には「長沖・高柳古墳群」とすることが提唱されたが(菅谷他1980)、平成6年刊行の「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」では「長沖古墳群」に統一されており、本稿でもそれに準拠して、各古墳の内容について記述する。

既に、群集構成については山崎武(菅谷他1980)・杉崎茂樹(杉崎1989)・利根川章彦(1994)の各氏によって、微地形や古墳の分布のあり方から支群の構成について検討が行なわれている。

それらの成果によれば、西側の高柳支群は昭和59年に実施された梅原遺跡の調査において、長沖137号墳が前方後円墳であることが確認されている以外、いずれも円墳によって構成されている(註2)。西から三つに分かれて延びる尾根上に15~17基が分布し、3~

第58図 長沖古墳群分布図(『長沖古墳群』より転載、一部筆者加筆)



4支群に大きく区分される。各小支群は、前方後円墳の長沖137号墳や長沖111・130・135号墳などの径15~35mの中規模の円墳を核に群形成がなされている。調査古墳が少ないため、築造時期の判明するものはほとんどないが、横穴式石室の石材を露出するものや埴輪の採集されるものがあることから、6世紀後半には築造を開始し、埴輪消滅期以後の7世紀代まで小規模な円墳が累々と築造された状況が窺われる。

なお、北方の長沖157号墳は径32mの大型円墳で単独で存在しており、後述するように古墳群形成の端緒となった有力墳として位置づけるのが妥当であろう。

東側に展開する長沖支群のうち台地上に立地する古墳の分布は、前方後円墳である長沖79号墳（十兵衛塚古墳）を中心とする一群が小山川に面する台地肩部にやや集中したあり方を示しているが、おむね台地上に広く分布している。これに対して、河岸段丘上に所在する古墳は、飯玉神社の周辺から東側に次第に多く分布しており、道上1号墳の所在する西側の地区は、現在長沖の集落があり、それによって消滅してしまったのか、古墳の分布がやや希薄となっている。

区画整理に伴い発掘調査が実施された長沖支群の東側から中央部にかけては中型前方後円墳・帆立貝式古墳・大型円墳が多数分布しており、群全体の中でも傑出した規模の古墳が集中したあり方を示している。

長沖支群では6基の前方後円墳の所在が現状で確認されている。台地北東部に長沖31・32・25号墳の3基の前方後円墳が同一の主軸方向で直線的に並び、その南側の河岸段丘面上には帆立貝式前方後円墳の長沖8号墳が所在する。また、小山川に面した台地縁辺部には長沖79号墳とすでに消滅してしまった長沖110号墳が所在している。いずれも全長30~50mの中型の前方後円墳である。

群形成の広がりには、大きく東から西に進んでいく傾向が窺われる。ただし、東側の地区の古墳も古い時期の古墳（大型円墳や前方後円墳）を核として群形成の終末期まで、支群を構成するような形態をとりながら築造が継続されていることも小型化した模倣横穴石室の

分布状況から想定することができる。

主体部の変遷過程については、礫部状の小壁穴式石室→軸無型短冊形横穴式石室→「毛野型脚張り石室」という埋葬施設採用の変遷があり、しかも、見玉地域の群集墳における埋葬施設の状況全体から見るかぎり、時代の先取りをしている感があると、その特殊性が指摘されている（利根川1994）。

(4) 長沖古墳群の形成過程

次に、調査古墳を基に主体部の変遷過程や埴輪・土器・副葬品の様相を中心に古墳群の形成過程について概観する。

【I期】 調査された古墳のうち最古のものは、有黒斑のB種横穴調整の円筒埴輪を有する長沖157号墳である。直径32mの大型円墳で、円筒埴輪は外面にB種横穴を施し、川西編年III期に比定されている。凸帯は突出度の高い台形、透孔は半円形が確認されている。外面は第1段が縦穴、第2段以上は二次調整のB種横穴、口縁部は斜め穴を施す。内面は縦・斜位のナデを施す。焼成は良好で黒斑があり、外面に赤彩が認められる。築造年代は出土した円筒埴輪の特徴から5世紀中葉に位置づけられている。

埼玉県における野焼き焼成によるB種横穴調整の円筒埴輪は、奥里町志波川古墳から短甲・家等の形象埴輪とともに出土しているほか、本庄市公郷塚古墳から格子タキ技法の円筒埴輪とともにB種横穴をもつ破片がわずかに検出されている（太田1998）。

この他に野焼き焼成の一次調整縦穴の円筒埴輪を出土した長沖34号墳と長沖15号墳周溝内側出土埴輪が当該期に該当する。長沖34号墳は直径30~40m級の円墳で、凸帯の上縁部が張出した凸帯をもつ埴輪が出土している。また、長沖15号墳周溝内側出土例は外面に赤彩を施し、凸帯の形態は長沖34号墳に類似し突出度が高く古相を示す。凸帯間には円形の透孔を一對穿孔しているが、最上段にも3個の円孔を穿つ。

【II期】 川西編年IV期併行の窯室焼成のB種横穴を施す円筒埴輪を出土した直径34mの大型円墳の長沖

14号墳が当該期に位置づけられる。第1段は一次調整縦ハケのみであるが、凸帯間と口縁部には二次調整B種横ハケが施されている。黒斑がなく、須恵質のものも含まれている。和泉式新段階の土師器壺・高環・小型壺等を出土しており、5世紀後葉を中心とする年代が与えられる。

北武蔵における無黒斑のB種横ハケ埴輪を出土する古墳は、児玉・比企・北足立・北埼玉地域の各地で確認されているが、特に児玉地域に集中している。本庄市旭・小島古墳群、美里町生野山古墳群、塚本山古墳群などの中小古墳から出土し、竈室焼成技術の導入に伴い量産体制が実現されたことを予測させる。

ほぼ同時期の生野山9号墳と長沖14号墳を比較した場合、墳丘規模では径42mと径34mと懸隔が大きく、生野山9号墳には人物・馬・短甲・盾等の形象埴輪が伴っているが、長沖14号墳には部分的な調査ではあるが形象埴輪が出土しておらず、墳丘規模の格差が埴輪祭式にも反映されていることが窺える。

【III期】長沖1・12・22・27号墳の4基に簡素化した小竈穴式石室が主体部として採用されている。円礫を用いた礫棚形態と(長沖1・22号墳)、緑泥片岩の板石を壁材に用いた箱式石棺形態(長沖27号墳)の2形態が認められ、長沖12号墳のように中間形態のものも存在する。いずれも墳丘中心部に構築されている。

円筒埴輪は2条凸帯3段構成のものが主体となり、外面調整は一次調整縦ハケのみで、透孔も半円形が一部残存しているが円形に統一され、板押圧による底部調整技法が長沖1・22号墳で確認される。このうち長沖15・22・2号墳は、口径と底径の差が少なく、各段幅の比率が均等に近く古相を示し、長沖1号墳は最下段幅がやや広くなり新しい様相が窺える。

群馬県・埼玉県北部における円筒埴輪への底部調整技法の出現時期については、最下段幅がまだそれほど広くない段階の富岡市富岡5号墳の円筒埴輪に伴出した須恵器蓋環がTK10型式に近いことから、6世紀中葉の年代幅の中におさえられているが(車崎1992)、長沖1・22号墳の様相からすれば、それよりもやや遅

るMT15型式段階の6世紀前葉には採用されていたと考えられ、今後類別との比較検討が必要である。

長沖2号墳からは須恵器無蓋高環、土師器環が出土している。無蓋高環は四方透かしをもつ古い特徴をとどめる在産の製品である。TK47型式併行に比定され、5世紀末葉ないし6世紀初頭に位置づけられる。

長沖12号墳は、周溝から土師器環・高環・壺が出土している。高環は口縁部の大きく外反する模倣環形態の坏部をもち、鬼高I式の段階に比定され、6世紀前葉に下るものと思われる。

【IV期】当該期に小竈穴式石室に替わって、袖無型の短冊形横穴式石室が導入される。長沖4・13・28号墳の3基で確認されている。石室の平面形態は、長沖4・28号墳は奥壁幅と深み幅の差があまりない短冊形であるのに対して、長沖13号墳は奥壁幅と深み幅の大きい笏形に変化し、石室規模も大きくなり後出的な要素が窺われる(増田1995)。

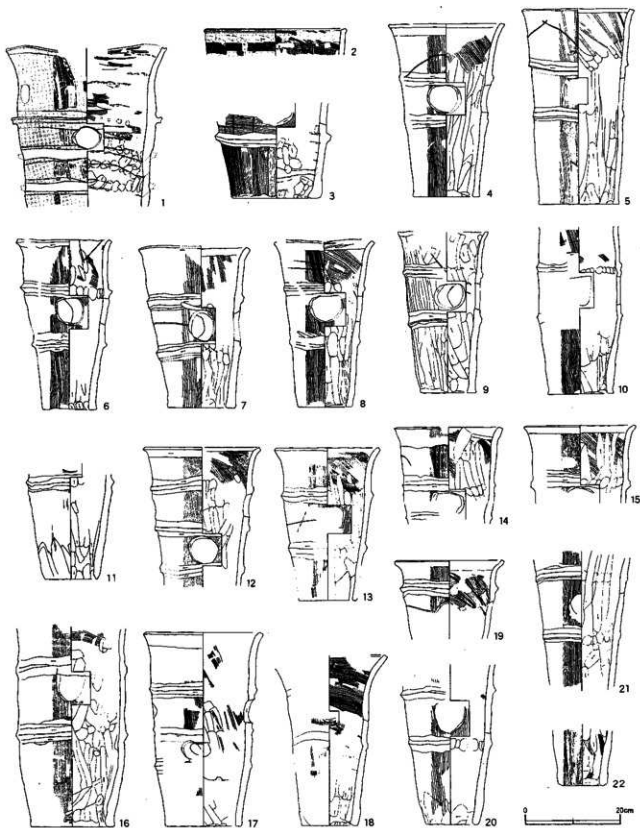
長沖25号墳は全長約40mの前方後円墳で、主体部については不明であるが、前方部が大きく開いた特徴的な墳丘形態である。出土した土師器の模倣環から6世紀前半の築造と推定される。円筒埴輪の中には半円形透孔など古い様相が窺われるが、次期に盛行する板押圧による底部調整と内面に刀子削りを加えるものが存在し、円筒埴輪の変遷過程をたどることができると考えられる。

【V期】当該期には横穴式石室の形態が多様化し、両袖型長方形プラン石室の長沖23号墳、河原石乱石積の両袖型胴張り石室の長沖8号墳が築造され、やや後出して「毛野型胴張り石室」と呼ばれる両袖型徳利形の模倣横胴張り石室の長沖21号墳が出現する。

全長26.3mの帆立貝式前方後円墳の長沖8号墳は、頸部に補強帯を巡らす須恵器壺や、口縁部が短縮化し、外面板押圧・内面刀子削りの底部調整を施す円筒埴輪が出土しており、6世紀後葉の年代が与えられる。

長沖21号墳は、埴輪をもつ直径26mの大型円墳で、石室長8.16mを測り、模倣横石室としては神川町南塚原8号墳に次いで本県第2位の規模を誇る。増田逸朗氏の模倣横石室の分類では、平面形態が短冊形で、奥

第59圖 長沖古墳群出土円筒埴輪



I期 (1: 15号墳内側出土) II期 (2・3: 14号墳) III期 (4・5: 15号墳, 6~9: 22号墳, 10・11: 1号墳)

IV期 (12: 28号墳, 13~17: 25号墳) V期 (18~20: 8号墳, 21・22: 21号墳)

壁幅と玄門幅がほぼ同率を示すA-1類に分類され、模様積石室の出現期にあたるI期の6世紀第4四半期に比定されている(増田1996)。また、長沖21号墳からは最下段の伸長化した細身の円筒埴輪が出土しており、埴輪消滅期の様相を呈している。

なお、道上1号墳も出土した円筒埴輪や形象埴輪の様相から当該期に位置づけられる。

【VI期】石室規模の小型化した毛野型胴張り石室をもつ長沖3・9・10号墳の3基が当該期に位置づけられる。未報告のため詳細は不明であるが、長沖66号墳も当該期にふくまれる(恋河内1984)。周溝は全周せず不明瞭なものも多く、埴輪消滅期以後の7世紀前半を中心とする年代が想定される。

長沖3・9・10号墳の占地状況をみると、途中に他の古墳を挟まず群をなし、直線的に並んで構築されている。前代の長沖21号墳のような初期模様積石室をもつ大型墳が独立墳的な立地を示しているのとは対照的なあり方を示している。これは当該期の造墓活動において群としての構成が重視されるようになったことを示唆するものであり、この段階に群構成の原理が大きく変化したことが予想される。同様の傾向は塚本山古墳群の検討でも指摘されており(余語他1999)、古墳造営主体の性格に関わる問題として重要である。

【VII期】VI期と同じく両袖型の胴張り石室を主体部としているが、石室構造の規模が縮小し、形骸化が進む。長沖11号墳は台形状の前庭部を付設しており、前庭部から土師器環、須恵器台付長頸壺が出土し、7世紀末葉まで下降する年代が考えられる。

(5) まとめ

長沖古墳群は、小山川中流域の台地部と河岸段丘を中心に分布する総数180基を越す大規模群集墳で、現在、十兵衛塚古墳をはじめとする7基の前方後円墳の所在が確認されている。周辺には、対岸に秋山古墳群、広木大町古墳群などの大規模群集墳が分布しているほか、下流の水田地帯に残る丘陵部に生野山古墳群、塚本山古墳群などの大規模な群集墳が所在している。

前述したように古墳群の形成過程は、長沖157号墳にみられるように5世紀中葉段階には築造が開始され、6世紀前葉段階に礎石状の小型六式石室に替わって袖無型短冊形袖型横六式石室が導入される。さらに埴輪消滅期に相当する6世紀末葉段階には長沖21号墳のように大型の模様積石室が有力墳に逸早く採用されている。そして、7世紀代には小型化した模様積石室が小支群を形成しながら築造され、須恵器の様相から7世紀後半の新しい段階まで小規模古墳の造営が継続していたことが明らかにされている。

今回調査を実施した道上1号墳の調査成果としては、今まで分布の希薄であった長沖支群の河岸段丘西側地区における埴輪を樹立した横六式石室墳の具体的な様相を明らかにすることができたことが挙げられる。しかし、遺存状況が良好でなかったため古墳の築造時期をはじめ、横六式石室の構造的特徴については不明な点が多く、大きな課題を残した。また、村後3号墳は出土遺物がなく築造時期については不明であるが、不整形な開溝形態から新しい様相が取窺された。

このように長沖古墳群は、武蔵北部における群集墳の成立背景、展開・消滅過程等の問題を検討する上で重要な位置を占めており、今後は周辺における群集墳との比較検討により、その歴史的な性格を究明していくことが大きな課題として残されている。

註

- (1) 現在、元玉町教育委員会は長沖古墳群における新規発見の古墳群の取り扱いについて、所在する地区ごとに仮番号を付し、〈長沖古墳群+地区名+地区古墳番号〉によって古墳名を呼称している。今回、当事業団が調査した2基の古墳跡の名称についてもそれに従っている。これは墳丘の残存する古墳や既調査古墳と区別する意味で暫定的に用いた古墳名称であり、将来的に古墳番号が整理された段階で「長沖〇号」に統一することを目的としている。なお、調査時における古墳名称は道上1号墳がA区1号墳、村後3号墳がC区1号墳である。
- (2) 元玉町教育委員会 鈴木雄雄氏に御教示いただいた。

引用・参考文献

- 阿部正功・大野延太郎・鳥居龍藏 1895 「秩父地方に於ける人類學的旅行」『東京人類學會雜誌』第10巻第110号號
- 井口泰基 1997 「埼玉県北西部における埴輪供給の問題—胎土分析を中心に—」『土曜考古』第21号
- 石塚和則他 1986 「将監塚—縄文時代—」埼玉県埋蔵文化財調査報告書第63集
- 市川 修・中村倉司他 1978 「甘粕原・ゴシン・粟梨子遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第35集 埼玉県遺跡調査会
- 井上尚明 1996 「大町遺跡」寄居町遺跡調査会報告書第5集 寄居町遺跡調査会
- 今関久夫・石塚三夫 1993 「東国寺東・増善寺遺跡」寄居町文化財調査報告書第11集 寄居町教育委員会
- 若田明広 1998 「今井余里遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集
- 太田博之 1998 「関東中期の様相」第2回シナノクニフォーラム「埴輪が語る科野のクニ」
- 栗島義明 1989 「古井戸遺跡石器」『古井戸—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
- 車崎正彦 1992 「1 円筒埴輪—関東」『古墳時代の研究』第9巻 古墳III 埴輪
- 群馬県 1988 「群馬県史 資料編1」
- 県立さきたま資料館 1994 「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」埼玉県教育委員会
- 恋河内昭彦 1984 「長沖古墳群の第7次調査」『第17回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 恋河内昭彦 1990 「塩谷下大塚遺跡」児玉町文化財調査報告書第11集 児玉町教育委員会
- 恋河内昭彦 1991 「真鏡寺遺跡III」児玉町文化財調査報告書第14集 児玉町教育委員会
- 児玉郡市文化財担当者会 1992 「児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要」『平成3年度後期文化財担当者会資料』
- 埼玉県 1951 「埼玉県史」第1巻 先史原史時代
- 埼玉県 1984 「新編 埼玉県史」1
- 埼玉考古学会 1986 「埼玉考古30周年記念シンポジウム資料」
- 佐々木幹雄・橋本 博文・荒川 正夫他 1980 「宍勝寺北裏遺跡」宍勝寺北裏遺跡調査会
- 塩野 博 1999 「埼玉の古墳—その発掘と研究の歴史(その3)—」『埼玉考古』第34号
- 藤崎 潔 1986 「包樹原・松下遺跡発掘調査概報1」包樹原・松下遺跡調査会
- 藤崎 潔・岡田賢治 1995 「安保氏館跡」神川町遺跡調査会発掘調査報告書第5集 神川町遺跡調査会
- 藤崎潔他 1995 「真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡」神川町教育委員会文化財調査報告書第12集 神川町教育委員会
- 菅谷浩之他 1980 「長沖古墳群」児玉町文化財調査報告書第1集 児玉町教育委員会
- 杉崎茂樹 1989 「北武蔵の大規模群集墳の消長に関する一考察」『古代』第87号
- 鈴木徳雄他 1986 「礪ノ入遺跡II」児玉町文化財調査報告書第6集 児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄他 1997 「将監塚東・平塚・藤塚遺跡」児玉町文化財報告書第26集 児玉町教育委員会
- 関義則・宮代栄一 1988 「県内出土の古墳時代馬具」『埼玉県立博物館紀要』14 埼玉県立博物館
- 外尾常人・丸山 修・桑原正明 1987 「余久保内出遺跡発掘調査報告書」上里町教育委員会
- 田村 誠 1996 「四軒在家支群」神川町教育委員会文化財調査報告書第13集 神川町教育委員会
- 田村 誠・金子彰男 1997 「城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮支群」神川町教育委員会文化財調査報告書第16集 神川町教育委員会
- 利根川章彦 1994 「六 東国の群集墳」『古代を考える 東国と大和王権』吉川弘文館
- 長滝歳康 1991 「白石古墳群・羽黒山古墳群」美里町遺跡調査報告書第7集
- 西井幸雄 1986 「先土器時代の遺物」『将監塚—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
- 西井幸雄他 1999 「城見上/木野田/花園城跡/箱石」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第211集
- 本庄高等学校考古部 1975 「児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究」『いぶき』8・9合併号
- 本庄市 1986 「本庄市史」通史編1
- 増田逸朗 1995 「北武蔵における初期横穴式石室導入期の様相」『調査研究報告』第8号 県立さきたま資料館
- 増田逸朗 1996 「椋椋石室小考」『調査研究報告』第9号 県立さきたま資料館
- 丸山 修・外尾常人 1987 「前原遺跡発掘調査報告書」上里町教育委員会
- 宮井英一他 1989 「古井戸—縄文時代—」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
- 余路琢磨・清宮祐二・宮里 修 1999 「塚本山古墳群再考」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第44巻・第4分冊

付編

長沖古墳群の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

埼玉県北部に分布する表層部の土壌には、浅間火山さらに榛名火山など北関東の火山の噴火に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く挟まれている。これらのテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされているものがあり、それら示標テフラとの層位関係を遡求することによって、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集できるようになっている。

長沖古墳群の発掘調査でも、土層断面中にテフラ粒子の混入が認められた。そこで地質調査を行い土層の記載を行うとともに、テフラ検出分析を合わせて行って示標テフラを検出し、遺構の構築年代に関する資料を得ることになった。

調査分析の対象となった地点は、道上1号墳周溝部、B区西壁、C区西壁 SK14の3地点である。

2. 土層の層序

(1) 道上1号墳周溝部

この地点では、下位より垂円礫に富む暗褐色土（層厚23cm、礫の最大径143mm）、黄灰色軽石混じり黒褐色土（層厚24cm）、黄灰色軽石に富む暗褐色土（層厚42cm）、垂円礫や垂角礫混じり暗褐色土（層厚67cm、礫の最大径47mm）、黄白色軽石に富む灰褐色表土（層厚30cm）が認められる（図1）。

(2) B区西壁

ここでは、下位より灰色粘質土（層厚9cm）、灰色砂質土（層厚9cm、以上VI層）、黄灰色砂層（層厚3cm）、灰色粘土層（層厚17cm、V層）、黒灰色土（層厚17cm）、褐色軽石に富む黒灰色土（層厚21cm、軽石の最大径4mm）、褐色土（層厚10cm、以上IV層）、垂円礫混じり褐色土（層厚35cm、礫の最大径43mm、II層）、褐色

土（層厚21cm）、灰白色軽石に富む褐色土（層厚20cm、以上I層）が認められる（図2）。

(3) C区西壁 SK14

この土壌の覆土は、下位より暗褐色土（層厚8cm）、黒色土（層厚30cm）、黒褐色土（層厚6cm）、褐色土（層厚47cm）、作土（層厚11cm）から構成される（図3）。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

上述の3地点において、基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの試料32点についてテフラ検出分析を行い、示標テフラの降灰層準を求めた。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラの粒子の特徴や量を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。道上1号墳周溝部では、試料番号32を除く大部分の試料に比較的発泡の良い淡褐色軽石（最大径2.5mm）が認められた。軽石の班品には斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、新井、1979）に由来すると考えられる。また試料番号14には、ごくわずかながら発泡のあまり良くない白色軽石（最大径0.6mm）が認められる。班品には角閃石が認められる。この軽石は、その岩相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名ニツ岳淡川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に由来すると考えられる。

なお試料番号6から2にかけては、発泡の良い灰白

色軽石(最大径3.3mm)が比較的多く認められる。軽石の班品には斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968)に由来すると考えられる。とくにAs-Bとの層位関係から、この遺構の構築年代は、As-B降灰直前以降の可能性が大きいと推定される。したがってこの遺構が古墳時代に構築され、しかも通常の状態では自然の作用により埋没したものとすると、年代的に矛盾を生じるように思える。

B区西壁では、試料番号17、13および9に発泡のあまり良くない白色軽石(最大径0.9mm)が少量認められる。軽石の班品には角閃石が認められる。この軽石は、その岩相からHr-FAに由来すると考えられる。したがってHr-FAの降灰層準はVI層以下にあるものと推定される。試料番号5および3には、比較的発泡の良い淡褐色軽石(最大径2.4mm)が認められた。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石はその岩相からAs-Bに由来すると考えられる。軽石の産状から、本地点においてはIV層中部にAs-Bの降灰層準があると考えられる。なおI層上部に含まれる軽石は、岩相や層位などからAs-Aに由来すると考えられる。

文献

- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.157, p.1-45.
荒牧重雄(1968)浅間火山の地質。地函研専報, no.10, p.1-45.
町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出

C区SK14覆土では、試料番号3および1に、比較的発泡の良い淡褐色軽石(最大径4.1mm)が比較的多く認められた。軽石の班品には斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石はその岩相からAs-Bに由来すると考えられる。軽石の産状から試料番号3付近にAs-Bの降灰層準があると考えられる。したがってSK14の構築は、As-B降灰前と推定される。

4. まとめ

長沖古墳群において、土層の堆積年代や遺構の構築年代に関する資料を収集するために、地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った。その結果、下位より榛名二ツ岳淡川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)と浅間Bテフラ(As-B, 1108年)さらに浅間A軽石(As-A, 1783年)に由来する軽石を検出することができた。これらの示標テフラとの層位関係から、C区SK14の構築はAs-B降灰前と推定された。また道上1号墳周溝については、As-Bの降灰層準との関係からその性格に問題が提起された。ただこの遺構については、古墳周溝構築以降に何らかの手が加えられたものであれば問題ないと思われる。この点については考古学的な検討を要する。

版会, 276p.

- 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員 会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.

表1 長所古墳群のテフラ検出分析結果

地点	試料	礫石			スコリア		
		量	色調	最大径	量	色調	最大径
A区	2	++	灰白>黄褐色	3.1, 1.2	-	-	-
	4	++	灰白>黄褐色	3.5, 1.3	-	-	-
	6	++	灰白>黄褐色	3.1, 1.5	-	-	-
	8	+	灰褐色	1.6	-	-	-
	10	+	灰褐色	1.4	-	-	-
	12	+	灰褐色	1.4	-	-	-
	14	+	黄褐色>白	2.0, 0.6	-	-	-
	16	++	灰褐色	1.8	-	-	-
	18	++	灰褐色	2.2	-	-	-
	20	++	灰褐色	1.8	-	-	-
	22	++	灰褐色	3.1	-	-	-
	24	++	灰褐色	2.1	-	-	-
	25	++	灰褐色	1.8	-	-	-
	28	++	灰褐色	2.3	-	-	-
30	++	灰褐色	2.5	-	-	-	
32	-	-	-	-	-	-	
34	+	灰褐色	0.8	-	-	-	
B区	1	+	黄褐色	2.4	-	-	-
	3	++	黄褐色	3.3	-	-	-
	5	++	黄褐色	3.2	-	-	-
	7	++	黄褐色	1.3	-	-	-
	9	+	白	0.8	-	-	-
	11	-	-	-	-	-	-
	13	-	赤	0.9	-	-	-
15	-	-	-	-	-	-	
17	+	白	0.9	-	-	-	
C区	1	++	黄褐色	3.7	-	-	-
	3	++	黄褐色	4.1	-	-	-
	5	++	黄褐色	2.6	-	-	-
	7	-	-	-	-	-	-
	9	-	-	-	-	-	-

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない,
-: 認められない, 最大径の単位は, cm.

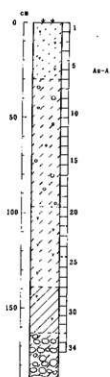


図1 A区1号塚頂部以上の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

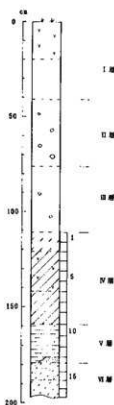


図2 B区内堂3号塚の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

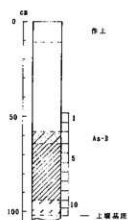


図3 C区内堂13号塚の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



写真図版



長沖古墳群遠景（北から）



長沖古墳群A区全景



道上1号墳全景（南東から）



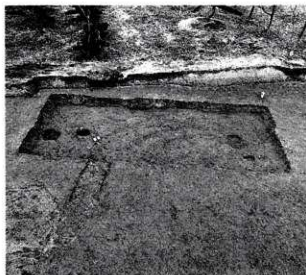
道上1号墳全景（北東から）



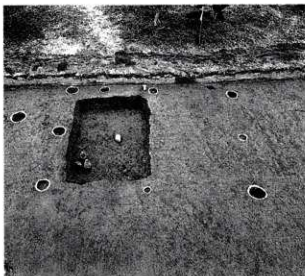
道上1号墳横穴式石室全景



道上1号墳横穴式石室裏込め



A区第1号住居跡



A区第1号掘立柱建物跡



A区第2号掘立柱建物跡



A区道路状遺構



長沖古墳群B区全景



長沖古墳群C区全景



長沖古墳群D区全景



D区第1号住居跡遺物出土状況(1)



D区第1号住居跡遺物出土状況(2)



D区第2号住居跡



長沖古墳群E区全景



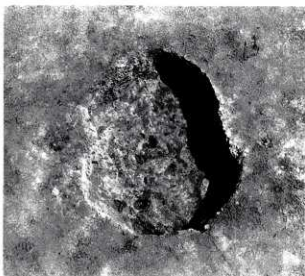
E区第1号住居跡



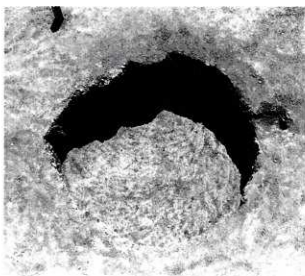
E区第2号住居跡



E区第10号土坑



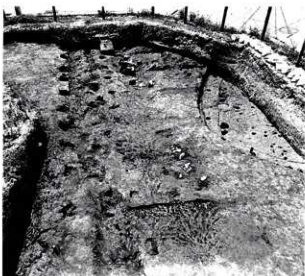
E区第13号土坑



E区第16号土坑



E区道路状遺構 (全景)



E区道路状遺構 (南部)



A区第2号土坑(第18图2)



D区第1号住居跡(第35图1)



D区第1号住居跡(第35图2)



D区第2号住居跡(第36图1)



D区第2号住居跡(第36图2)



D区第2号住居跡(第36图3)



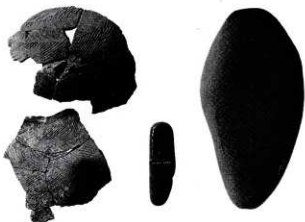
E区第2号住居跡(第44图1)



E区第2号住居跡(第44图2)



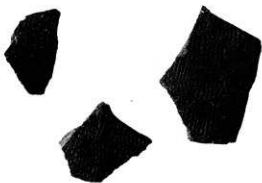
E区第2号住居跡(第44图3)



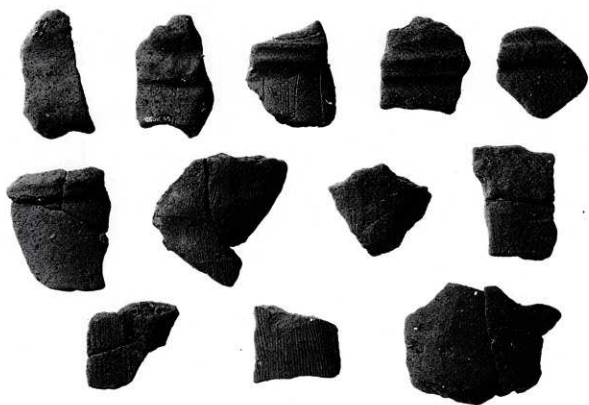
E区第2号住居跡(第44图4~7)



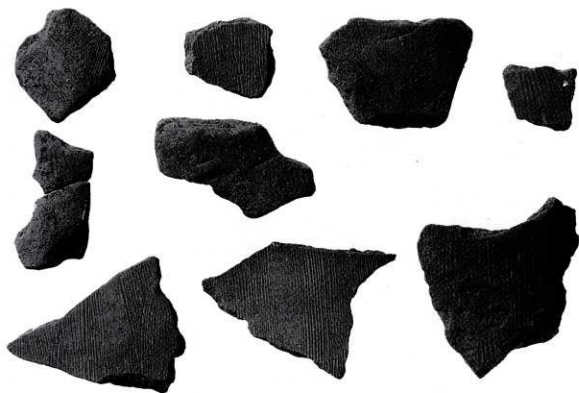
道上1号墳(第11图1)



道上1号墳(第11图2~4)



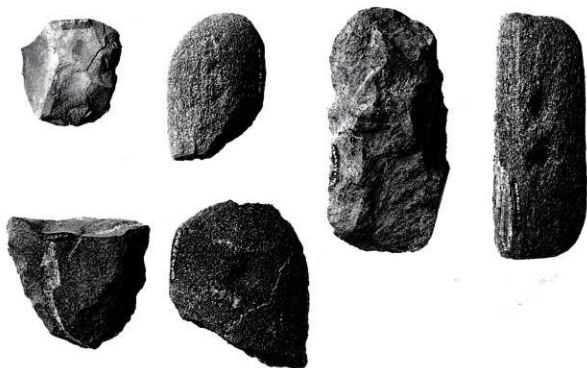
道上1号墳出土埴輪(1)(第12図5~16)



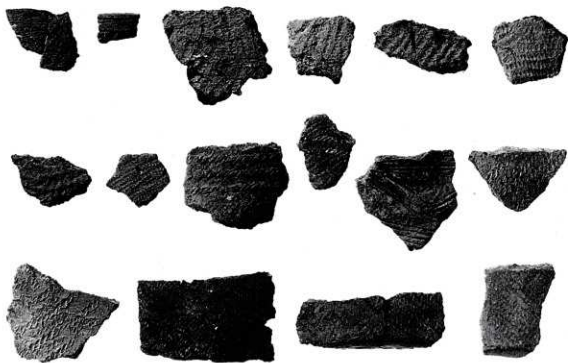
道上1号墳出土埴輪(2)(第12図17~25)



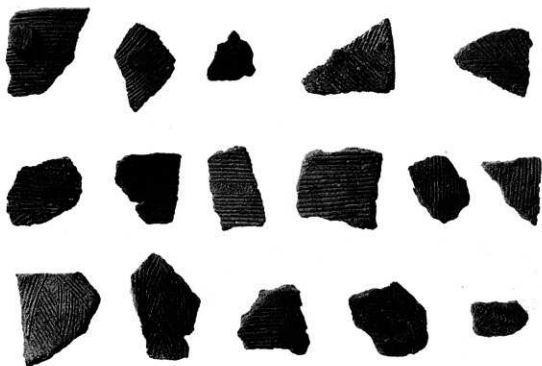
道上1号墳出土形象埴輪 (第13図26-34)



B区グリッド出土遺物 (第24図1-6)



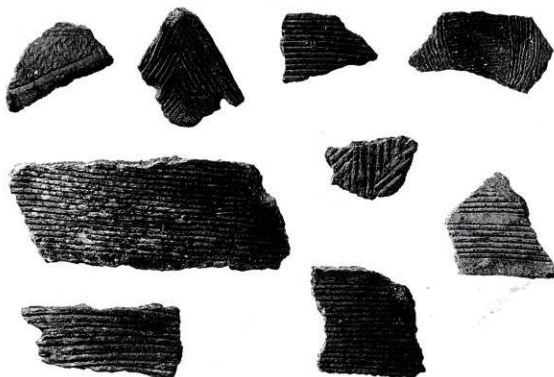
E区第1号住居跡出土遺物(1)(第41図1~16)



E区第1号住居跡出土遺物(2)(第41図17~32)



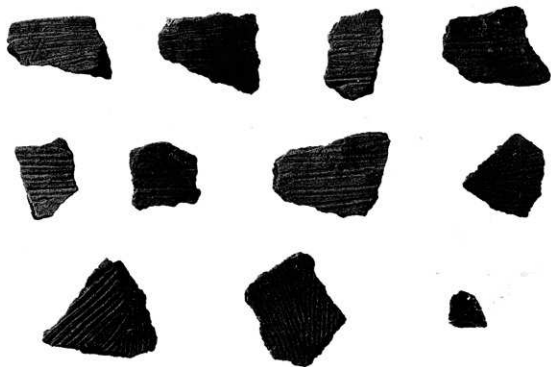
E区第1号住居跡出土遺物(3)(第41图33~36)



E区第1号土壙出土遺物(第49图1~9)



E区第10号土坑出土遗物(第49图1~4)



E区第13号土坑出土遗物(第49图1~11)

報告書抄録

ふりがな	ながおき こふんぐん							
書名	長沖古墳群							
副書名	県道秩父見玉線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業内報告書							
シリーズ番号	第234集							
著者氏名	石島勝秀・大谷 敬							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1 TEL0493-39-3955							
発行年月日	西暦1999(平成11)年9月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ...	東経 ...	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおき こふんぐん 長沖古墳群	ながおき こふんぐん 埼玉県見玉郡 見玉町大字長沖 273番地3他	11204	300	36° 10' 40"	139° 7' 42"	19931201 19960531	5,500	県道建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項			
長沖古墳群 A区	古墳群 集落跡	古墳時代	古墳跡1基	土師器・須恵器・円筒 埴輪・形象埴輪 かわらけ	道上1号墳			
		中世	住居跡1軒・掘立柱 建物跡2棟・土塋3 基・ピット34基					
		近世	道路状遺構					
B区	生家遺跡	古墳時代	粘土採掘跡・土塋2 基					
		中世以降	土塋1基					
C区	古墳群	古墳時代	古墳跡1基		村後3号墳			
		中・近世	土塋22基					
D区	集落跡	古墳時代前期	住居跡2軒	土師器				
		江戸時代	道路状遺構					
E区	集落跡	縄文時代	住居跡1軒・土塋6 基	縄文土器・石器				
		古墳時代前期	住居跡4軒・土塋1 基	縄文土器・石器				
		近世以降	土塋13基					
		江戸時代	道路状遺構					

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第234集

児玉郡児玉町

長沖古墳群

県道秩父児玉線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成11年9月15日 印刷

平成11年9月30日 発行

発行/財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4-4-1

電話 0493(39)3955

印刷/望月印刷株式会社